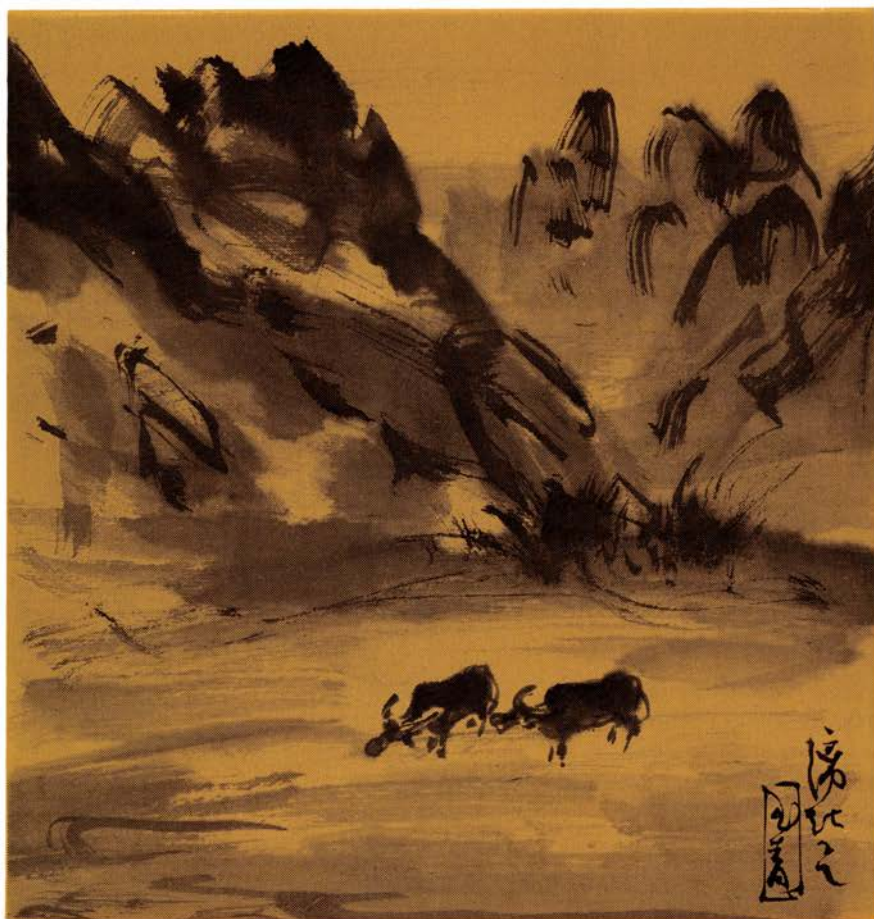


川柳塔

昭和六十二年三月二十五日印刷
昭和六十二年四月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷七三一号



日川協加盟

No. 7 3 1

四月号

友好と観光 中国吟行の旅

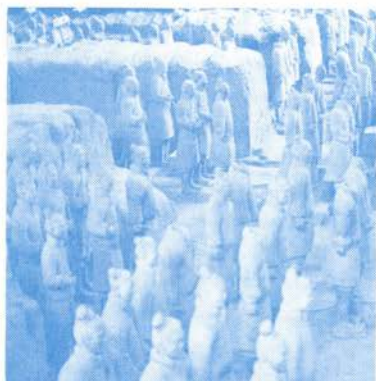
北京—洛陽—西安—上海

☐ 63年9月18日出発

☐ 6日間コース

☐ 費用23万7,000円
(全食事付)

☐ 人員25名かぎり
(詳細は逐次、発表します)



兵馬俑坑(西安市)

川柳塔社

NHK学園東海北陸川柳大会

- 日時 昭和63年6月26日(日) 午後1時
会場 NHK名古屋放送局CKホール
名古屋市中区東横1-11-1
- 宿題 事前投句と選者
- 席題 ①「荷」 田向 秀史選
②「味」 野口 初枝選
③「高い」 青木 晴風選
選者 山岸志ん児・堀口北斗
各題2句
- 講演 加藤翠谷
- ◆事前投句締切 5月31日必着
- ◆投句先 〒186 国立市富士見台2-36
NHK学園川柳センター
東海北陸川柳大会係
- ◆投句料 一、五〇〇円(作品集代を含む)
- ◆参加要領
- ◆大会へ参加希望の方はご自分の住所氏名の宛先を書いた返信用ハガキを同封して下さい
- ◆事前投句は、普通の便箋、またはこれと同じ大きさの用紙二枚を、いずれも真中にタテの線を引き、一枚目の右半分に郵便番号、住所氏名(ふりがな)電話番号、NHK学園川柳講座受講者の方は受講番号、大会への出欠を書き、一枚目の左半分に宿題①の作品、二枚目の右半分に宿題②の作品、左半分に宿題③の作品を、それぞれ二句記入して下さい。

作家賞と功労賞

西尾 栗

昭和六十三年二月二十八日(日)に、南区大宝寺町にある中華飯店大成閣に於て、第五回大阪川柳人クラブの総会が開催された。この経緯については、昨年の川柳塔誌十月号に於て西田柳宏子さんが「大阪川柳人クラブへの認識とお誘い」という稿で縷々説明されているが、今回はクラブの活動の一端として、作家賞を創設して、昭和六十一年秋の第一回国民文化祭で大会賞に選ばれた「いい事を最初のページには書こう」という句の作者吹田市南正雀の当会員西川景子さんと、昭和六十二年の第十一回全日本川柳大会で、文部大臣奨励賞を獲得した「いい友を沢山もって茶がうまい」という句の作者摂津市千里丘の当会員森中恵美子さんの二人の女流作家に進呈することになった。

ついで、同クラブ初代会長の故金泉萬榮さ

ん(六十二年一月八十八歳で死去)に感謝状を贈り、川柳界に貢献して現在も現役作家として活躍している、次のみなさん、城東区の高添眉水(八十八)、八尾市の古川覚然坊(八十五)、豊中市の鵜飼蟻朗(八十三)、福島区の珍斉源次郎(八十三)、守口市の久保田以兆(八十一)氏の五人に功労賞を贈呈して、長い間川柳界の指導育成に貢献された労を謝した。

当日は夜来の雨も名残りなく晴れて、寒さもゆるんで、会員六十余名全員に近い出席を得て、式後の懇親宴は夕闇迫る頃まで続いた。功労者賞は満齢で計算された為、二、三の方がはずれたが、来年度にはもっと増えるであろう。こんなユニークなクラブも珍らしいので、一人でも多くクラブへ入会されて、何かと協力の程お願いする次第である。

因みに会費は一カ月三百円(年三千六百元)で入会し易く、会員は大阪府に居住しておられる各結社並に役員を網羅して居るので、手続きが簡単であるから御入会の程をお勧めする。私の常に提唱している川柳は絆であるということが現実化している。

座右の句

面の裏菩薩も夜叉もなかりけり

(蕉風)

私の句

水軍の末がならべるレジャー船

三宅 一郎

川柳塔 四月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

作家賞と功労賞

瀬戸大橋元年

川柳塔(同人吟)

自選集

■川柳太平記(11)川柳の群像 鈴木九葉

■連載 誹風柳多留廿六篇研究(三十五丁)

水煙抄

秀句鑑賞

同人吟
水煙抄

大阪・堺の会所本における、特殊慣用前句題
愛染帖

西尾 葉 ……(1)

本田恵二朗 ……(2)

西尾 栞選 ……(4)

東野 大八 ……(31)

黒川紫香選 ……(34)

直原七面山 ……(36)

越智 一水 ……(38)

阿達義雄 ……(56)

橘高薫風選 ……(61)

瀬戸大橋元年

本田恵二朗

瀬戸大橋の優雅な容姿を指呼に眺める位置に居住している私であるが、今や開通への膳立てが急ピッチで進行し、ラストスパートの様相を現出している。列車、自動車の走行テストも念入りにスムーズに進み、その結果も満点、快適とされている。記念博覧会の諸施設も立体的に、またカラフルに全貌を現している。

近代的メカニズムの素顔が、花嫁のはにかみのように清純に、また艶に、今や晴れの日へのお化粧の総仕上げの真最中である。

私は二十数年前に『多島美へおまけのように真帆片帆』と詠んでいるが、それは帰らぬ昔話になってしまつて『多島美へおまけのように瀬戸の橋』と座五を改正せねばならなくなつたことへ一沫のさびしさをおぼえぬでもない。

観光バスや観光船の動きも活潑をきわめている。名勝鷺羽山の川柳句碑『島一つ土産に欲しい鷺羽山』も多くの観光客のお目に止まるであらう。

へ女性コーナー 茴香の花 八木千代選 (64)

■同人アンケート わが土地の春 (66)

仁部四郎・福本英子・有働芳仙・西出楓楽・赤川菊野・小島蘭幸・

前川千賀子・永倉僕川・松下たつみ・園山多賀子・小林妻子

初歩教室 阿萬萬的 (70)

「遊ぶ」 福浦勝晴選 (72)

一路集「肌」 林瑞枝選 (72)

「的」 永倉僕川選 (73)

柳界展望 (74)

本社三月句会 (76)

各地柳壇(佳句地10選/田中隆二) (80)

■4月各地句会案内 95 ■編集後記 97

座右の句

子かはしる走る貧富の翳もなく (奥 昭二)

私の句

笛吹けば踊る阿呆の列に僕 加藤彩人

名利由加山蓮台寺の川柳句碑の小径の六十基も観光客のご観賞を頂く頻度が一段と濃厚となるであろう。なお記念博覧会場内には、風流な川柳ポストがしらえられて、ご来場の皆さんのご投句をお待ちするであろう。この稿が塔誌にまみえる頃は、桜も満開、瀬戸の橋も満面に笑みを浮かべて、柳友の皆さんをお迎えるであろう。





西尾 栞 選

下関市 石川 侃流洞

春うらら思想が右へずれて行く

神様と綱引をしてサクラサク

温風機昔ばなしをもう忘れ

住みついて野良猫少し脂肪過多

千杜札御機嫌斜めにはあらず

ブラブラが町内会へ引き抜かれ

松江市 柳 楽 鶴 丸

学歴に負けぬ雑学持っている

せつくすと書けば違ったフィーリング

古いと言われても運転致しません

漁火や日本海のアクセント

肺癌で死んでも煙草を入れてくれ

待つ事はもうなれました毛糸玉

伊丹市 榎 谷 寿 馬

通帳と余命量りにかけてみる

胃袋を突き刺しそうな蟹料理
忙しい人だった大晦日に眠る

ししがしら自己主張する雪の庭

七草のバック薬のように買う

単三の電池で足りるわがいのち

倉敷市 野 田 素身郎

残業へ子育て上手の姑が居る

暖冬へ除雪の予算余る村

席決めるのも幹事の腕の見せどころ

花言葉は知らずサルビアを貰う

松葉杖につらい北風向い風

運勢は吉ただ金運は今一つ

八尾市 高 杉 鬼 遊

空を見ることを忘れた寺の鳩

ご先祖の見ている部屋の白昼夢

落し穴お望み通り落ちてやる

好き嫌いわたしにもいるいやな人
ワープロもあなたが打つとあたたかい
ゆたゆたと生きとし生さる春の川

松原市 谷垣史好

鉄格子とも見える原稿紙の柀目
電話口君の可愛い囁りよ

恋をして賢くなつて風邪を引き

兄弟で解体業と工務店

葬儀屋のくわえ煙草も春めいて
ちよつとした驚き年間家出人

堺市 高橋千万子

張り切った空気の中へ遅刻する

鬼に舌抜かれぬ程度のウソをつき

逆さまに絵本が読める満二歳

拾いものでしたと後添い愛して

靴すべりひと言今夜帰らない

あの人も師走の無理が来た二月

桜井市 岩本雀踊子

少しゼニ持たすと油断の出来ぬ夫

目薬の涙を孫にのぞかれる

川幅が気になる男たり女たり

来世は男に産れて泣かせたる

愚妻だと喋る私は凡夫なり

借り傘の情に男の夢がある

岡山県 土居耕花

輪廻とや馬と騎手とに生まれるか
ピフテキが好きで来世は尾が生える

喘息もそれぞれ添えて形見分け
湯どうふの歌を作れよ俵万智
梯子した店が分からね帽子掛け
バンザイをいつ迄してる蟹の子等

松江市 舟木与根一

お年玉当りは義理で来た賀状

大根が甘く煮上がり雪模様

西高東低お喋りになる雀

屋敷跡まもりつづけて寒椿

年金が主役家計簿つましく

義理チョコでないのは派手にリボン付け

兵庫県 遠山可住

街の子うちに柚子湯が湧いている

上品なナイフいちごを切って食べ

花道を飾る言葉は敵が読む

年金へ賽銭箱の向きを変え

相談に来た手土産を飲んで去に

女まだ残るさりげなく飾り

熊本市 有働芳仙

着飾って女は嘘を吐き易し

乾杯の挨拶早よう吞ませんかい

引立役というお飾りを連れて行き

春一番誰かの絵馬の落ちる音

失恋のピアノは強く叩くもの

種子明しされて自分の馬鹿が見え

竹原市 小島蘭幸

有夫恋妻もいつかは読むだろう

節分の鬼ぐらいならなりましよ
銅メダル勝ったと思うことにする

税金が少うし還るので笑う

ポケットの人指し指かピストルか
ポケットに拳が二つありおとこ

倉敷市

小野 克枝

海からの陽よ平凡の有難さ

傾いたままの夢積む夫婦坂

和服着て淋しい席に座らされ

欲があり椅子取りゲームまだ続く

別人になって出てくる美容院

筆ペンで稼いでいると書いて出す

平田市

久家 代仕男

憂鬱を小出しに編んだ冬帽子

水仙の首のあたりにある憂い

春麗寝仏坐仏にある気儘

暴力と汚職の罪が軽すぎる

ライターに明日のいのちが透けている

放課後の花壇校長草を抜き

美禰市

安平次 弘道

定年へもう春眠も気にならず

充電が過ぎて闘志が退化する

蟹気楼罪の深さに気がつかず

暖冬が続き手形が落とせない

神の目を盗むとつる不整脈

時移り針のむしろに姑が耐え

米子市

林 瑞枝

ああ未来雪は西から晴れてくる
春ララ犬を相手の万歩計

バラ一本青年が買う凜々しさよ

吊り鏡がわたしを値踏みして困る

眠る子の眉は天下を掴むかも

十二単衣着ても妬心は隠せない

島根県

堀江 芳子

頼もしき夫婦茶碗の大小に

ヘルベスに針の疼きの処刑かな

桜土手お地藏さんは花の傘

雨激し若さに燃えた日の如く

喉にしむ朝茶夫婦というもののか

煌々と淋しがりやは灯りつけ

京都府

松川 杜的

べんがらの格子は冬の旅が好き

壬生狂言わたしのほうらく割れた音

竹を踏む春の小川を聞きながら

マル優のカモと見たのか銀行屋

スットントンで終る人生なら楽しから

三年寝太郎重吉の眼は未だ死なぬ

島根県

小砂 白汀

如月やもはや異性とみてくれず

のぞみ無きにしも非ずチョコが来た

霜枯れて味も塩っぱもある男

鍋ひとつ購うにもおとこたたら踏む

抱擁やガラスのごとき君なりき

沈丁にしっとしてゐる菜種梅雨

八尾市 宮西弥生

空っぱのボトル昔を喋り出す
他人はみな鏡惡口いえませぬ

よいことの始まる朝の紅を塗る

他人のこと気になるほどのきれいい好き

先生と呼ばれて気になる髪かたち

赤似合う女で可愛くなつてゆく

大阪市 津守柳伸

送つてはくれぬお方が引きとめる

二本目の指に期待が大きすぎ

褒められたとこで目覚める娑婆の風

一番に教えてくれる非常口

蕩たけて小指の秘密知るコハゼ

自販機に知能指数を試される

和歌山市 松原寿子

待たずとも胸から芽吹く春がある

指切りの余韻もやして蜃気楼

まっすぐに来る風だから憎めない

振り向こうまだ手応えのあるうちに

目醒めればきつと安らぐ波になる

美しい言葉に乗ってみるゆとり

米子市 林荒介

順番に父の荷物が消えてゆく

磨いたらメッキの剥げる勲章だ

木枯しが磨きをかけている雑木

音も無く椿が落ちてゆく浮き世

箒口令消化不良の胸の底

自惚れてうぬぼれて今日を生きる

和歌山市 西山幸

意地悪い噂が連れてくる噂

諦めてから回りだす風車

頑なな台詞を嫌うさくら餅

濡れ衣がいつか馴染んでよく似合う

割箸を割ってしまつてからの悔い

軽い返事をしては火傷をくりかえす

尼崎市 春城武庫坊

山降りる後ろは見ないことにする

平坂名の小言が強く胸を打ち

ポケットに手を入れさまになる男

少々の馬鹿が持つてる人間味

一日に幸不幸あり電話口

自惚れも少しあるから生きている

米子市 小西雄々

花便り友一人逝き風が舞う

辞書にない温みを知った村起し

宮仕え背中で呼吸ととのえる

触角で自然にふれたい旅心

大詰へ父のひと言胸を刺す

寄書へ目立ちたいのが一人いる

豊中市 田中正坊

タンポポよあなたは健康優良児

初恋がぼくにもあつた蓮華草

ほどほどに燃える余生の篝火花

仲よきは美しきかな実篤忌

歴史観国旗出す家出さぬ家
国債を買って余命を考える

奈良県

宮口笛生

ハナハトママス同窓の友が減り
酒という薬で元氣出してます
うさ晴らす酒は止り木だけでよい
酒は好き迷惑かける酒のます
病氣しているよりましと昼の酒
毒な酒のむ日も男のお付合い

尼崎市

春城年代

鍵束は家族の癖を覚え込み
忘れものどかんとしてるように冬
節分寒波心のゆるみくつがえす
薬漬け色とりどりの優しさに
ある日には病いの壺と思わるる
冬の書斎に籠る夫婦の鳩時計

鳥取市

両川洋々

枕木の慰めレール慟哭す
ああ不倫神は黙認されまいに
ゴーギャンの裸婦が私を離さない
領海侵犯なるほどイカがよう釣れる
子を庇うシナリオ妻と書き直す
逢うて来た余韻一行詩が炎える

寝屋川市

稲葉冬葉

二枚目のセーターはゆったりと編み
あほらしいことの一つに夫婦仲
長男の嫁が明るい声を出し

おふくろと言う呼び名にも味があり
陽が西に傾くような訣れかな
達筆の鎮火見舞に立ち止り

米子市

政岡日枝子

いち早く春の帽子をかぶってきた
君も笑えよ太陽が出てくれた
イヤリング一緒に酔っている不思議
イミテーションだから私にも似合う
この街はいいぞ酒屋が三軒も
カルチャーへ行つてうどんを食べて来た

寝屋川市

岸野あやめ

日の丸へ敬礼したい元中尉
齢六十女の夢は卒業し
雪囲いされて牡丹は孤に籠る
気も口も軽い万年平社員
庭の梅咲いて隣はお留守がち
男ありて灯ともし頃を宙に浮き

和歌山市

堀端三男

仏にも鬼にもなれず古稀迎う
女ひとり猫と痛みを分けて住む
何もかも許すと視野が広くなり
一年の速さを思う申告期
鉄橋が着いても島を出たがらず
目立ちたがりがひとり居るので輪にならぬ

宇部市

平田実男

そばで聞く時は気になる通話料
ヘルスメーター妻の機嫌をまた損ね

口ほどに妻悪人にようならず
馬鹿になれだして血圧安定し
相槌を税吏も打ちたい税の愚痴
善人にされストレスを溜めている

茨木市 井上 森生

成人の娘の花髪はかすみ草
振袖もアップの髪もよく似合う
振袖を女の道が待ち受ける
万葉にゆかりの酒は雪見酒
徳利を中に右利き左利き
昇る陽を待つか沈む陽と行くか

弘前市 波多野 五楽庵

老けたなと三途の川で言われそう
家計簿の予算で足りぬ風邪の熱
田高の話が洩れる通夜の席
四分六の六が悔しい痛み分け
音のないジャズを聴いてる足の指

弘前市 田中 叶

父の髭今日降る雪のやわらかに
クレール車あり何日も人が来ず
早く寝る夫婦になつて棲む杜宅
小児科で呼ばれて父である私
轢かれそうな鳩あり鳩に似ておりぬ

松原市 玉置 重人

まっさきに引いてしまったはずれくじ
捨て石にされていたのは僕だった
シナリオを考えているピエロの目

無精卵街の冷たい風に遭う
錦糸卵どっさり盛ったおすそ分け

大田市 藤田 軒太楼

客筋のよいのをママは自慢にし
雛人形のことなら祖母にまかしとき
自然美を活かす古里の活性化
それとなくしんみり聞かせ父の情
耳打ちに察しています名幹事

玉野市 小谷 仙山

手品師の種を明かすも芸の内
古里の風なつかしく風邪を引き
神様の稼ぎ小銭で山をなす
首横に静かに振って決意する
去年の顔で今年も咲いた福寿草

大阪市 江城 修史

楯となる妻に返せぬ借りばかり
ちぎれ雲流れる果てにある墓標
一つ捨て一つを拾う絆かな
風に舞う枯葉の想いが想い
四面楚歌他人は孤高の人と言う

大阪市 黒田 真砂

心乱れた夜ブラックの香にむせぶ
嫁の座の脆さはかなさ寒の月
点をたどって行けば余生の灯に出会う
故里の温さ寒さよ無人駅

夫入院
点滴に祈る思いの刻が過ぎ

大阪府 河井庸佑

肩書がそのひとことに重味つけ
ばつばつと引き際想う年齢となり
出る杭は打たれる覚悟できている
気の利かぬ振りして急場切り抜ける
叱らない約束本音喋らせる

大阪府 本間満津子

沈丁花おもかげ偲ぶ恩師の忌
元の服に着贅えて安心した試着
丁寧な荷造り心届けられ
目出し帽近よつて来てすれ違い
蓋取れば木の芽が告げる春の幸

大阪府 神夏磯典子

すぐ馬鹿になれる夫を尊敬す
春の花少し精気を下さいな
自分にはないやさしさに魅せられる
喧嘩する度に相性のことを言う
固い体ほぐしてくれる春の酒

大阪府 藤田頂留子

逃げたつてどうどう巡りする地球
年度期になると道路が若返り
味しめた時から悲劇動き出す
ハイエナも負けそう悪徳商法記事
つけて消すだけのテレビと今日も無事

大阪府 大塚節子

再会もよし裏切った人だけど
ふと抜けた裏路地で味見つけたり

姑がこっそり詣る嫁の厄

すみれの花少女も老女もフィナーレ
三代目もうかりまへんと廃業し

大阪府 古川美津枝

ポシエットに中学生の夢がある
バレンタイン年は問わないチョコ売場
かぶりつき足袋の裏まで見る阿呆
ひといきを大きくいれて青を待つ
観光地浜辺にほしい監視塔

大阪府 吐田公一

札束の魅力上下のへだてなし
空の旅待つひとときに事故ニュース
母と子のすき間をつなぐ糸電話
わたしの夢だった白無垢娘に着せる
大空に言葉はいらね親子風

大阪府 中西兼治郎

朝の電話返事は夜に留守電話
豊作の水菜へクジラ遠ざかり
お薬で下げた血圧酒で上げ
御近所はとくに知っていた不倫
義理と見栄一緒に入れるお年玉

大阪府 坂口公子

とつぜん倒れたなどと怖がらす
分別がこんなに自分を惑わせて
欲張りで泣き虫でそれでいてもう可愛くて
ちぎり絵の雛の目鼻に遊ばれる
折り込みのピラの白だけ頼りです

米子市

石垣花子

新婦もう音痴たすけるマイク持ち

燃える日も無くて菜の花子だくさん

日本もまさかの時の縄は持ち

幸福なくらし致死量知らぬまま

花屋との約束で咲く冬の菊

米子市

田中亜弥

新しい顔で出てくる陽が好きだ

父病んで神を拾いに行ってくる

千の鶴折らねば今夜眠られぬ

癖一つ捨てて新たに船出する

方向音痴の鳩豆ばかり食う

米子市

青戸田鶴

姑になり姑の痛みにたどりつく

逃げ水を追って果てない旅である

義妹との別れ(三句)

散る時が近いといもうと語り出す

白菊の中で安らぐ貌になり

旅立てば雪しんしんとはだをさす

米子市

菅井とも子

初釜の貌も揃って老いてゆく

賀状来て心配の種一つ消え

繋がれたパールの疵は見落され

駄馬なりに信頼されて荷を運ぶ

姑の留守里へ電話がなくなる

和歌山市

垂井千寿子

千羽鶴千の重さに耐える冬

怖い物知らずが雪見旅などと

遺句集に柳友の温さを振り返る

法の死角小説よりも奇なニュース

憂鬱のかけらが捨ててある角座

和歌山市

福本英子

予定表ばかり作って黄昏れる

言いたいことを控えた席が温い

テネシーワルツ亡夫もチエミも遠くなる

少し遅れる亡夫の時計をふところに

合鍵を渡すチャンスに茶を乞われ

和歌山市

内芝登志代

火の車があちゃん笑顔で廻してる

花盗人の心が解る花に佇つ

草木染似合う静かな未亡人

夢いっぱい青い言葉の歯切れよさ

筆順で親子でもめていること

和歌山市

神平狂虎

鉛筆がポキンと折れる戻り寒

風は無口で噂話に遠く居る

雨の中男は楔打ちに行く

屑籠の中を泳いでいた私

淋しさに慣れてしまった船溜まり

和歌山市

福井桂香

五線譜に春の溜息もれている

ステツプが狂うてしまう落椿

誘惑を試してみたくなるジャムの蓋

株式を読む妻俳壇みる夫

どちらかと言えば五時から女です

和歌山市

坂部 紀久子

すし詰へ胸を合わせた他人様
梅の咲く庭のある夢見続ける

ワンクツション置いて静かな返事くる

ふくよかな胸の当りで毛糸針

ガリバーの土踏に居た運の好さ

和歌山市

山川 克子

ケセラセラそうでなければ出来ぬ恋

そつのない男もへんに嫌味だな

妥協する気のない女の肩パット

何気ない仕草魅力つてそんなもの

あなたには内緒あそこすしの味

鳥取市

森田 熊生

言い訳を聞いても僕のせいでないし

週刊誌どうせ一人の旅でいる

熱爛にしてふるさとの雪のこと

酒が好き日本が好き雪が降る

子の日記素直に書いているこわさ

鳥取県

林 露杖

立春やオンザロックで誕生日

柊の花に酔うたか冬の蜂

無為徒食それでも老いの腹が空き

無気力も困るがこねるのも困り

見えみえの嘘うんうんと四月馬鹿

鳥取県

松下 たつみ

販売機歳にはふれず酒煙草

草の中から故郷見つけた石の位置
税務署でまたも四角な風に会い
コンピューター俺の性格どこで見た
飽食へリユックの飢は忘れない

鳥取県

土橋 螢

年ひとつ重ねていのち軽くなり

料理子育て不肖なり不得手なり

切腹がないから悪いことをする

二万日まだまだつづく旅なのか

うぐいすが啼き猫が逃げ俺がいる

鳥取県

新家 完司

灯をつけて寒い仲間を待っている

二坪を名園にして春の雪

節分の豆よおまえも舶来か

ひもじさを知らぬ不幸な子供たち

マンモスは死んだゴキブリは生きている

取鳥県

江原 とみお

拝まれて虎の子を出すおばあちゃん

お隣とブロック二段の仲違い

円高で儲けマスクをして歩く

自己採点少し辛目にしておこう

春風のはいる透き間はあけておく

唐津市

久保 正敏

ブラックコーヒー女に少し見栄がある

白鳥の波紋が揺れる冬の画布

底抜けに笑う女で隙がない

失恋は十字架でなし次のバス

人情に厚くサラ金賊になる

唐津市 仁部四郎

冗談の切れ目本音でつないでる

兵隊はイヤです税はガンバります

会長が決って町内退屈し

人情を押し売りしてる五つ紋

定年が来た蛟龍の眠り癖

唐津市 浜本義美

病む手もて妻炊飯の温かさ

立春の日射し炬燵に遠くいる

立春の卓へ路味噌よく香り

銀鱗の絨氈這うて日脚伸び

大韓機事件に思う

漁夫婦り愁色深く烏賊を干す

島根県 堀江正朗

空想も出来ぬ宇宙の足音に

生きていく音から生きる欲もらう

まだそんな気のせぬ喜寿へ指を折り

切り替えのきかぬ顔でも髭はそり

孫なみに賞められもして続くお茶

島根県 梅みどり

河川しき花よりだんご春うらら

父を待つ夕餉の明り大きくし

詩日記のこした義姉の人間味

日曜の厨ヶーキのいいにおい

初恋の日記へつづる花言葉

暖かく春の月抱く水たまり

笑い合う一寸先も知らずして

苦い水呑んだ蜚がへこたれぬ

おぼろ月春の心がわかりかけ

計算になかった余生のひとりぼち

島根県 藤原鈴江

夢かけてみたが所詮はメダカの子

編み針の交差へ童話の雨が降る

天晴れな敵だとおもう手を握り

なくさめの言葉がいたいとこを突き

振り向けば心にわたしの鬼がいた

岡山市 時末一灯

霧の朝ロマンに遠い救急車

体調が悪いかいやに優しいぞ

オブラートに包みのみこむ愛もあり

ジョークだと笑って視線刺しにくる

企みのかくし味だな舌を刺す

岡山市 萩野鮫虎狼

本題がなかなか言えぬ長電話

目が覚めて見れば無策の今日がある

お隣の噂へ妻の聞き上手

どうしても勝てぬ碁盤の面を拭き

姑の小言をしまう小抽斗

岡山県 小林妻子

瀬戸の橋待っていたのは観光課

春風へ少しゆれ出すやつこ風
基仇と恐い話を並べてる

風の絵の中にかくれた四月馬鹿
歴史あり弁当箱の私語続く

西宮市 林 はつ 絵

男一匹伝言板へ捨てられる
言い訳をしない男を信じよう
花時計いつも待たせるのは女
女の胸はただ一人しか棲まわせぬ
お通夜の先ず服装を相談し

西宮市 奥 田 みつ子

悪くなると思うと悪くなってゆく
良くなると信じ好運ひきつける
風花がおとき嘯を連れてくる
八階は八階の目で住んでいる
肩幅に海の匂いのする男

西宮市 西 口 いわゑ

縄電車明るい方へ発車する
思い出をゆつくり流すオルゴール
母さんに似て来たなどと不満そう
成人した息子と歩く母の照れ
ぬくぬくと男の傘の中に居る

岸和田市 福 浦 勝 晴

愛情に打算を掛けて買う土産
ああ日本春夏秋冬人ごろし
縄のれん平和論者の飛ばす唾

ポーナスをもちたと駅から赤電話
内職に年季を積んだ座りだこ

岸和田市 島 崎 富志子

土鈴振る花の思い出花吹雪
うれしさは六十にして職を持つ
一月のめでたき終るカレンダー
来てうれし帰ってほっとする孫で
手になじむ夫婦湯呑の三十年

岸和田市 古 野 ひで

薬湯の匂いの中に浮かぶ亡母
忍従を美德であつた座りだこ
そして春孫ピカピカの一年生
又明日も頑張りましょう湯が溢れ
暖冬の付けかも立春からの木枯しよ

高槻市 辻 白 溪 子

矢印の先がトイレへ向いている
すぐあとを追うと柩へ取案す
浜幸へ喝采出来ぬ記事を読む
手品師の空いてる片手に種が有る
正直に占い言えぬ事がある

高槻市 川 島 諷云児

無口だが元気な妻が傍に居る
待ちぼうけ自動ドアに嗤われる
一步退くことも覚えた枯尾花
途中下車したい日もある宮仕え
丸木橋後が来るから渡らねば

京都市 都 倉 求 芽

ふるさとに預けたままの夢の壺

新鮮な魚をクチャクチャにしてグルメ

銀行も二階は笑顔を振りまかぬ

一日が確実に経つカレンダー

商品も社名もカタカナで老舗です

京都市 山 本 規 不 風

頬白や馬酔木の花を待ちこがれ

流し雛女系世紀にあるレーダー

奇蹟と言う講演をさす奇蹟

お父さん一番可愛い子はだあれ

バスポート持つてないので選ばれる

松原市 北 野 久 子

小児科は泣く子笑う子ねんねの子

結んで開いて卒中が恐い

バッグにはいつもお守り札がある

つまりその出ればお金が減るさかい

もともとは聾と思えば生きやすし

松原市 佐 藤 藤 子

消火器の有効五年無事に過ぎ

沖繩の西瓜がとどく雪まつり

逢うた日も逢えない日にもこの悔い

若葉マーク子供を二人乗せている

ここだけの話に耳が四つある

藤井寺市 吉 岡 美 房

ばやいてもどうにもならぬのにはやく

おつとつと家計はみ出すお付合い

凍死せぬ程度に亭主締め出され

春の音行きつ戻りつ梅が咲く

梅の花春爛漫を見ずに散り

藤井寺市 福 元 みのる

思い出にふけるばかりで夢枯れる

自分史はなんと敗戦史じゃないか

万一を相談しあつて早くはない

五時からの男幹事に選ばれる

鏡だけ本音の顔も知っている

今治市 越 智 一 水

幸せな愚痴嫁に出し嫁が来る

花嫁の荷が春潮に乗って来る

誘われて口紅こゆい春の宵

無意識に軍歌歌っている怖さ

百姓をいじめてロンに喜ばれ

今治市 矢 野 佳 雲

開運のみくじやる気を出せという

好きな子へ特急にする縄電車

厄ばらいする花束を贈られる

鏡拭く母がしたようねんごろに

税務署の封書来るものやはり来る

富田林市 藤 田 泰 子

告白してから気付く四月馬鹿

暖冬も心配ごとのひとつなり

奥さんの口に納まるハートチョコ

差し向い二人でひとりの命なり
ライバルも休んで居るからひと休み

富田林市

田 形 美 緒

一葉の賀状に友情取り戻す

盛り場の朝は夕べの夢の跡

エマニエル一泊二日で夫と居る

盛り場の片隅にいる逃亡者

湯はたぎる帰り待つ夜の猜疑心

松江市

恒 松 叮 紅

日の丸を焼いて傷口またひらく

浮気するのも遺伝だと脅かされ

戦友の二字大切に生き延びる

趣味のない人には背くベレー帽

新郎の羽織に欲しい肩パット

東大阪市

森 下 愛 論

まだ若い気でも老骨きしみ出す

空っ茶一杯だんまりでいい夫婦

アンチック茶房に惚れて想を練る

奮然と出て間違った他人の靴

値切ったら買うはめになる程に負け

諫早市

原田メイシュン

ふかふかの布団で寝きらぬ貧乏性

捨てせりふ吐くと俺が負けになる

親娘ですもう折れる気の語を探し

道順を正確に行く梯子酒

合格をしたらしい窓の灯り消え

吊皮で読んで座席に気を配り

顔を選んで傘に誘えば断わられ

信徒会もめさす信者金があり

どの声も家出の犬に似る夜更け

父よりも子の好物が並ぶ膳

守口市

羽 原 静 歩

昨日今日ボタン一つをかけ違い

マル優の貯金確かめて確かめて

漢方よ効いているのかいないのか

人生のヒット街道裏街道

償いの視野に軍手が乾してある

柳井市

弘 津 柳 慶

過去を辿れば妻にすまない事ばかり

この愚痴を聞いて下さい御燈明

残業へ男同士の飲む話

パソコンで心もとない返事が来

オヤオヤオヤ税金がもどつて来

倉吉市

奥 谷 弘 朗

駆け引きのうまい男のふところ手

凡人に移り変りの世が激し

長生きをさせたい肩をもんでやり

精いっぱい嘘で遊んで来たと言う

野党には的はずしたご答弁

倉敷市

稲 田 豊 作

老梅の気品老いるも佳しとせむ

箸を持つだけの舅が早く起き

初恋は参銭切手の頃でした

いい人に連れ添いましたと妻の愚痴
楽天家の胸算用に損はない

爺ちゃんの素語りを聞くもう春か
雲脚の速さに縋る里心

ハイヒールの機嫌が悪い滝見台
マンネリの殻を破ったエキストラ

佳境に這入るといつも邪魔するのが女

お隣の大正琴は音痴です
以心伝心お互いさまに厭な奴

世渡りのモットーとしてイエスマン
家計簿の予算を乱す慰斗袋

看病で距離を縮めた嫁姑

玉姫殿へ嬉しい日取りきめにゆく
忙しい忙しいと老妻の長電話

梅だより姪の入試に灯をともし
うぬぼれよやがて奈落の道辿る

曲水の宴笹舟も流したら

へソクリ財テク転んだ妻の気鬱症
妻は芝居わたしは米を研いでいる

試験済んで天神さまも昼寝する

呉市 林野甦光

浜田市 中川幸一

寝屋川市 江口度

名古屋市 越村枯梢

冷凍庫南阿のエビには冷たすぎ
味気ない正月でした餅搗機

借りてきたお皿に義理をのせて行き
わたくしの負けです女房負けてない
笠岡市 松本忠三

二人三脚そろそろ紐が解けそうなの
損ばかりしていて罪ないろは順

数えでも満でも達者であればよい

波かぜがいやで「すみません」を連発し
傘の中ずう体大きくなりすぎて
奈良市 天正千梢

棕櫚のたわし家を支えたその昔
一滴のうるおいヴィヴァルディの春を聴き

田子の浦秀麗富士のきわまり

爽やかに目覚め今日から職がない
真っ直に攻めては落ちぬ老恋記
兵庫県 辻文平

嘘に嘘互いに笑い合う夫婦
恋の疵なぞって今日も磨く鍋

妻の歩に合わせゆとりのあるブラン

右地獄さりとて左行き止まり
煩惱があるから人間らしゅうなり
姫路市 大原葉香

親と子の絆を猿に教えられ

起床ラッパもう聞こえない兵の墓
柱時計我が家の顔の音で鳴り

花嫁孫第二号

寝屋川市 宮尾 あいき

白無垢の似合う花嫁孫娘

蠟梅(ろうばい)のかぐわしきかな綿帽子

あでやかにうちかけも良し藕なけて

イブニング花婿花嫁ゴンドラで

一幅の絵になる夫婦蛇の目傘

檀原市 岩井 本蔭棒

からすさえなめてる祖父の頬かむり

お向いは怒った音で窓を閉め

正義派に地団駄踏ます頬かむり

単身へ堂々と来る女文字

脳死脳死と生きているのが気ぜわしい

神戸市 山口 美穂

パンの耳雀は隣の屋根で待つ

シクラメン内緒話がきこえない

蜘蛛の糸人の絆が思われる

帰宅して老母の笑顔にほっとする

同窓会みんなが老眼鏡を出す

竹原市 森井 菁居

茶の間では無口でよろし火の男

頂上は遙か自叙伝まだ書かぬ

駄馬ならば駄馬でも良いが進むべし

花に伏す男は春の絵にならぬ

狂うたら楽になるとは知りながら

堺市 中川 滋雀

年号の変らぬ御代を信じてる

豆の木を騙しつづけた天の碧

歩道橋渡ると戦の朝に出る

それなりの理由でサクラも狂い咲き

蹴りやすいポーズで空缶待つてゐる

宝塚市

丸山 よし津

ゆっくりと些事をこなして春を待つ

名を変えても寒さ頂上建国日

小説より奇なるニュースの謎を追う

三指でつまんで塩の味決まる

年金を貰って気付く六十五

出雲市

園山 多賀子

致死量にポトリと落ちる紅椿

鯛焼の温みを抱いてバスに揺れ

世帯染み姑の轍を踏んでいく

性善説水仙の白質される

雁首を並べて烏合の衆と言う

和泉市

西岡 洛醉

終局を派手に散ろうか星流る

嘘ひとつ歩幅乱れた駅を降り

四月馬鹿乗って凡夫の顔となり

旅の湯に老いの余白の背を伸ばす

禁煙の風が美味いぞ花の春

高知県

赤川 菊野

いつ死んでも好いとは真赤なうそ

瀬をのぼる魚にも似た昨日今日

たそがれて酸素がほしい独りの灯
京料理京の心で箸をとる
ライバルの苦手を知っている余裕

大和高田市 岸 本 豊平次

知らぬ振り出来る度胸が羨まし
鍼が効く位に病んで無欠勤
雪景色どう書こうかと墨をする
現場から中継レポーターも泣いている
建国を祝っていけない国がある

羽曳野市 田 中 隆 二

言いたくはないが余計なことばかりする
亡父のことしみじみ語る冬の酒
運のない男見送る冬の駅
雪椿越後のひとに逢いに行く
もう二度と後ろを見ない冬景色

鳥取県 川 崎 秋 女

逃げてゆく二月を追うと風になる
変化球あなたに投げてみたくなる
人間不信猫がいちばん好きになる
死ぬ時のこと考えず椿咲く

鳥取県 森 田 布 堂

一票が増えた議員の嫁の世話
孝行はすたれ按摩器あてがわれ
仲裁の酒がなだめた意地と意地
使い込みして心中のいい度胸

鳥取県 金 川 満 春

まだ意欲老人会長研修会
生かされて居るとも想う有難さ
寝たきりにならぬ伴せ噛みしめる
吹雪の夜山陰名医灸据える

鳥取県 森 山 盛 桜

神様のもぐら叩きに生き残る
網棚の生首誰も気がつかぬ
旅の妻から上げ底のない土産
蹴とばした膳を男は振り向かぬ

鳥取県 中 原 汲 香

嫁がせてひととせ今日は母の声
おごそかや嫁いで母となる調べ
雪解の水が鳴ってる歌ってる
春陽の土の伴せ嗅いでいる

鳥取県 中 原 みさ子

モナリザの笑顔に負けたのがボクさ
子宝が欲しい神鈴振ってくる
風花や想い出ごっこしています
祝喜寿やまあるいまるい姑となり

鳥取県 広 本 文 子

びっこ引くあの野良犬が今日来ない
灯を消して神にうかがいたてている
ひとりから始まる人の世のきずな
お上手に飲めたんですね胃カメラ

大阪市 北 勝 美

暖冬異変気になる夏の水不足

安売りの目玉になつてゐる卵

諦めを悟りに変えたい老いの日々

ハイヒール歩道の目地に噛まれてる

大阪市 大野 武太

アルサロの元祖も消えた千日前

魑魅魍魎財テクブームに陥り穴

宥される嘘あれこれと四月馬鹿

アルバムへ無言の対話つづけてる

大阪市 坂本 仙吉郎

あこがれの夢二の生家葡萄棚

牛窓のハーバー太平洋につづく波

男の子拳でふいた家の前

男気を出した手前のふところ手

大阪市 渡部 さと美

山水画釣り人ひとりいてのどか

やぶ椿その素朴さに負けた薔薇

人生の目減りころころ毛糸玉

葬いで姉さん妻と聞かされる

大阪市 横山 為子

幼稚園派閥があつて仲間割れ

仁王さん邪心を叱る門に立つ

竜宮をのぞいてみたいバスポート

水栽培土が恋しい貝割菜

大阪市 板東 倫子

無器用に生きた男が癌を病む

何となく美人スパイをゆるしてる

ホステスのような名のつくペット犬
満たされぬ妻という名で飲むワイン

大阪市 塩田 新一郎

東西東西大正も古くなりました

お米まだあるかと吾は戦中派

早咲きの梅が石段登らせる

一步でも踏もうよ二十一世紀

和歌山市 若宮 武雄

好運と悲運に分ける春の風

受験地獄のさ中に匂う沈丁花

齢のせいだろうか万年青好きになり

墓参りこの安らぎを大切に

和歌山市 牛尾 緑良

どこまでも幸せ芝居だな夫婦

砂時計の砂が途切れる白昼夢

生きてゆく拳を妻があたためる

浮かれすぎていたなと思う戻り寒

和歌山市 桜井 千秀

後ろ指少しも手加減してくれぬ

奥の手でうそぶくなんて許せない

やりがいがあります金にはならんけど

気働き程も身動きままならず

(前月分) 桜井 千秀

偽った分だけ愛想つけ加え

クドクドと言うからつまらんこととなる

おっとっと腹八分目をお忘れか

高波ヘジャンプその都度後遺症

和歌山市

木本朱夏

ほろ苦いチョコに女の謎がある

一人芝居にカーテンコールなどはない

思いきり顔を洗ってあれは夢

女達人畜無害と言う勿れ

和歌山市

寺田裕美

三寒四温猫が伸びたり縮んだり

女房の釘が効かない千鳥足

エプロンを脱ぐと本音がはねかえり

たくあんの塩の甘さを噛みしめる

和歌山市

後藤正子

ハンカチの白さを緑だと思ふ

思い開きしようと思ふ小抽斗

通り過ぎれば橋の高さも笑い合う

急にあわただしくなった春の庭

島根県

錦織文子

あせらずに幸福駅の切符買う

相続税をにらんで居坐る鬼瓦

ほめられて人間の心ぬくうなり

ライバルの言葉だんだんやせて来る

島根県

石田清泉

古稀の坂越えても同じ風に遇い

ミスキャスト日本の春はまだ遠く

暴言にブラウン管も壊れそう

人工の雪で大山魁り

唐津市

山口高明

他人から見れば不幸を買う女

夜の蜘蛛逃がして明日に夢繫ぐ

経験が言わす匠の重い声

親族の視線集めて通夜の女

唐津市

筒井朴竜

蹴っ飛ばす空缶サッカー通学児

「暴力追放」張り紙の吹き溜り

童心の健気忘るな正義感

少年は活きる明日へ立ち向う

唐津市

浜本ちよ

裸木は貧乏に似たしたたかさ

感情の落差激しくよく怒り

肩のこる話を酒がもつれさせ

他人の振り旅でしみじみエチケット

島根県

西村早苗

悪縁と笑い一度は貸すお金

ヌードショーの事は内緒にしておこう

年末年始終わり胃袋ずつと好い

ハンカチを振ってる声が届かない

島根県

榊原秀子

自分史を今年はきつと書くつもり

記念写真真父正面に厳として

回答がびつたりそれから出た自信

何時か会う日の約束がまだ出来ぬ

岡山県

二宗吟平

冬の客去るを見届け雪だるま

竿に来て嵐笛吹く春の曲

瀬音から一枝もろう猫やなぎ

虹の最後を見届けたのは山だろ

岡山市 行吉 照路

幸せは今日も仕事を追っかける

健康に歩け歩けのセールスよ

セールスの微罪を少し見てしまい

扁平足少し匂って父の席

八尾市 山下 みつる

火の御恩水の恵みを知って生き

年金の話で眠気さつと取れ

ここでは妻に頭を下げている

大名を見おろした松今も生き

八尾市 宮崎 シマ子

自在釣宿の主も話し好き

いらぬとは言うたがやはり待つ返事

断りの理由に病名二つ三つ

玉手箱若返る夢つめておく

岸和田市 清野 こう

同病の男女それぞれ澄む瞳

北の駅湯気につられた立ちうどん

ゲートボールまだまだ残っていた若さ

日本列島桜と吹雪の北南

岸和田市 原 さよ子

満開の梅を気づかう春一番

ウインドへ女心がゆれてくる

這いはいが出来て家族の人気者

出来栄えと別に安らぐ筆を持つ

岸和田市 芳地 狸村

湖東の旅

県道で神の住まいが西東 (苗村神社)

狛犬にかわって守る亀と鹿 (兵主神社)

通行人次の舞台は斬られ役

念入りに紙を漉いてる冬の里

倉吉市 野中 御前

一言が腹に根雪となって冬

片想い辛子きかせたそばする

親は子を育ててきたと思にきせ

生かされて今年も匂う春の梅

倉吉市 淡路 ゆり子

向い合う炬燵で夫を採点す

起き抜けの温もり庇うタイツはく

風の日は半鐘の鳴る夢を見る

百歳を称える日和花魁 (叔母逝去)

羽曳野市 榎本 吐来

男の勲章会社を三つほど潰し

案じた通りのコースに乗った宿酔

追い抜かれ追い抜く若さ持つバイク

エリートがここにもあった鳩の群れ

羽曳野市 中村 優

サバイバル凡てお札のエアポート

的外すつもりか総理の恵比須顔
人の世の哀しさ矢印ぎやくに出る

ベチャンコの布団が語る闘病記

羽曳野市

佐野白水

会者定離あの笑顔ない旅の宿

除夜の鐘死出の旅路で友は聞き

山茶花と椿わからぬ新人類

住所のない賀状氏名のない年賀

寝屋川市

堀江光子

庭先の椿を褒めて女客

その昔仕事の鬼の日向ぼこ

男なんてというていて再婚し

シルクハット脱げば手品師老いている

出雲市

板垣夢酔

蝶ちようの愛に飢えてる水中花

立て板に水思いあがりはなかったか

今日は主婦忘れなさいとイヤリング

起きて寝る自作自演の繰り返し

出雲市

吉岡きみえ

愛されて可愛がられて冬バラよ

明日もまた咲こういのちある限り

餅はもちや花は花やで買ってくる

雪が舞うわたしのざんげきくように

出雲市

石倉芙佐子

友情のほころびを縫う囲炉裏はた

粉雪よまだまだ遠い母の国

かじかんだ掌に抱けない深情
奴さん折って智恵子になる世界

出雲市

園山良子
(よし子改め)

外つ国もやっぱり太めはお人好し

育児日記三日坊主では済まされず

旅先で手を借るシャッターフルムーン

明治の手顔もねじって缶のふた

高知県

曾我部裕

再三の慰留に少しうぬぼれる

社長室退屈だらうなあとと思う

かかる世に十九歳の正義感

盆栽の姿趣味とは思われず

土佐市

中内朱坊

立春を迎えて怒る寒気団

労働が過ぎたか妻の寝息聞く

架橋元年道路の整備追いつかず

酒だけはよせとカルテが無理を言う

高知県

小澤幸泉

空白の時間楽しむ夜の床

ここまでは妻のタクトも届かない

サスペンス女の恐さみえてくる

灯を消してやっと明日が見え始め

仙台市

川村映輝

年重ね年には勝てぬ事がふえ

喧嘩した亡夫を褒めたり惚気たり

働き蜂と言われ世界の長寿国

檻の中自立あきらめ昼寝する

静岡市 渥美弧秀

ランチタイム座敷の話弾み過ぎ

白梅が語りかけてる老夫婦

財テクに乗り遅れても趣味に生き

風の子が風に会いたい塾の窓

河内長野市 井上喜醉

残り火を抱いて余生の船に乗る

年金が出ると贅沢したくなる

老兵は死なず職場のガード役

決断の重さを知っている受話器

貝塚市 行天千代

給料日らしい匂いの換気扇

手袋がきらいで値札付いたまま

長い生活電気製品痛み出し

ホーム炬燵で巡り来る春待ちましょう

姫路市 人見翠記

戦うより許す心に従いぬ

金貯めて過去の無念の仇を討つ

姑を飛び越そうとしてけつまずき

お昼寝も仕事の中よ古稀を過ぎ

箕面市 坪田紅葉

梅一輪咲く庭にたつ謝恩会

老いの意地つらぬきとおして友は近く

ロングスカート弱った足をガードする

信仰をすすめる人の自信顔

体温計振る亡母を忘れず

雲形定規がなくて恥かく

鼎談はせず謝辞多き著書

洋書繰りつつ笑える修業

町田市 竹内紫鏡

手話の子に温い人情教えられ

栄転の内示へ電話話し中

農に生き猫背の父の悲し過ぎ

親切が過ぎて噂の女となり

七尾市 松高秀峰

この豆も輸入ものと鬼の私語

吊り皮で反芻している朝の曲

蟻の列呪文をとなえているごとし

裏町が好きな画伯のベレー帽

神戸市 仲 どんたく

鈴つける辺りで話がややこしい

大器晩成これから燃えてく唐がらし

賞め言葉へ狸寝入りの気持良さ

充電もしてます炬燵の雪見酒

兵庫 協田米朝

できすぎた孫は隔世遺伝かも

酸欠のお皿二枚のティータム

年寄りに惨酷な世になりました

解っては貰えぬ珈琲にがく呑み

広島 藤解静風

米子市 寺沢みどり

暖冬へこころ乱した寒つばき
思ひ出の球ころがしをあの世まで
産卵の亀の足跡消してやる
すこやかに生きる目安の塩加減

西宮市 瀬尾 六郎太

超音波二極大が腕の中
老妻不在落ち着く筈が落ち着かず
すごいよねママは赤ちゃん創るから
妻連れて歩いてごらん美人だぞ

岡山県 山本 玉恵

飄々と海鳴りをきく女の背
深追いをしすぎて今日は風に病む
春の雪消えても未練はまだ残る
トンネルを抜けると海と太陽と

境港市 細木 歳栄

嘘言えぬ女真つ赤な嘘に会い
ほんのりとピンクの嘘なら許される
無智であることも時にはありがたし
還暦の集い還暦みな忘れ

吹田市 茂見 よ志子

年ごとに嫁に貫禄つく不安
要る要らない今日こそ捨てる納屋のなか
一族の靴にぎやかに祝いの日
つまるとこ要点語らず聞きもせず

松原市 小池 しげお

甘口のお酒で女くどかれる

革ジャンパー嫌な女を連れている
初詣で妻のみくじも吉だった
酒好きの医者かやめよとまだ言わぬ

守口市 森川 まさお

手掛りがないので真つすぐ伸びる草
棒ギレを持てば元気になってくる
小遣いをやると他人の様な礼
階段を豪奢なこなしで降りてくる

西条市 片上 明水

野良犬がまだ起きていた夜の道
横丁の横丁にある京の寺
風邪薬買わずに冬が済みそうで
ライオンは嬉しい時にもらみつけ

高槻市 竹内 花代子

二十一世紀の話が弾む月参り
ペランダの雀にためらう布団干し
テラスから春の香を貰うヒヤシンス
仏壇も飽食お下り残る老い二人

松山市 谷 信夫

血圧の謀反封じて春近し
正月も神経痛は休まない
のど自慢僕もベッドで審査員
土俵入りの真似をしてみるいい朝だ

大阪市 寺井 東雲

先決は金の相談多過ぎる
風の様な旦那で妻が悩んでる

よくもまあ歩けば工事につきあたる

大阪市 松尾柳右子

未来図は温泉廻り夫婦独楽

ライターの扱い下手でも強い母

体形も似てる三役婦人会

大阪市 北山悟郎

硬骨がこの一年の道迷う

律義者世間がゆがんでサン格拉斯

戦争風化残り火燃やす戦友会

大阪市 町田達子

思い出の亡母の言葉が生きている

少しずつ伸びる日足へ気が和む

うぬばれた日も懐かしの青春譜

大阪市 井上白峰

翔べもせぬ翅を拡げて悪女ふる

口車大の男を乗せに来る

女上位を笑って居れぬ我が家にも

大阪市 宮下とし

男親子に地下足袋のよき教え

産気づき男立ち合う世となりぬ

春風に棹竹のオッチャン一年振り

出雲市 小白金房子

その手には乗るなとトラが首をふる

針箱をはなさぬ八十路の鼻めがね

着て脱いで女六十路の彩をよる

出雲市 河原恵美子

それからはあの人寄りの南風
妥協と情性どちらもちどり足
午前零時新人類となつてみる

出雲市 久谷まこと

着飾ったみんな笑顔の初対面

これからが本音を聞かす咳払い

一言のしゃれたつもりが火付役

出雲市 竹治ちかし

羅針盤与えて祝う子の門出

衣着せぬ歯が痛み出す四十坂

金持たぬ奴ほど気前いい浮世

竹原市 岩本笑子

横やりも入れたくなるさ飲めぬ酒

三面鏡貧乏神も写つてた

故障してます手を洗うのもよから

竹原市 古田太虚

山陰の雪は抵抗なしに降り

試筆される紙は無表情でいるらしい

お隣の花は機嫌よくほめておけ

竹原市 信本博子

どんぐりの相談答え出て来ない

夢袋一針毎に愛を縫う

思い出を辿って砂丘を踏んでいる

竹原市 石原淑子

吹く風に委せて糞虫楽になり

春よ春思いがけないめぐり逢い

いじめてはいないわ夫のトゲを抜く

富田林市

新開 千代女

それぞれにみんないい人隣組
のら猫と話しながら日向ほこ
病院でいろんな話聞いて来る

富田林市

片岡 智恵子

語尾消える程に自信のない噂

その嘘がワイングラスの底にある

娘を嫁がせて

荷飾りにほんとの首が動かない

富田林市

松本 今日子

法事にも女心で締める帯

エンジンの音聞き分けるロボの耳

酔っぱらい泊めて私が眠れない

弘前市

斉藤 嘉

兎毘仕掛けて聖書読んでいる

烏合の衆だとカラスは思っていない

指がまだ忘れていない草鞋編み

弘前市

真喜内 實

地吹雪の路歩き甲斐ある道ぞ

お話の花咲く我が家春早い

ガッツポーズ足弟競う路のとう

米子市

澤田 千春

いい友に感謝しながら生きている

世の中の渦を大空消してゆく

極楽の地図を片手に冬の旅

米子市 光井 玲子

変化球かえす気力が残ってた
巣づくりがすむと無口になるカラス
つながりの重みに惑う蟻もいる

米子市 金山 夕子

手提袋にかかさず飴を入れておく
山あいの街から響くいい湯だな
万一の離婚に荷物揃えとく

島根県 松本文子

亡夫生きているかな墓地の草生える

耐えている背中越えていく祝唄

百まではあまりに遠し五十坂

島根県 松本 はるみ

弥次馬になって今夜を見つめよう

すっぱかしてそれから電話待ちつづけ

近よらぬ君子にあらず臆病で

姫路市 丁坪 サワ子

孫の齢お百度踏めない老いの足

ポックリ寺善男善女の頼りどころ

生かされる喜び趣味のあれやこれ

姫路市 都里 遊光
(釣改め)

争うて出れば優しい六日月

沈黙も母の情にとけかかる

ねばられて入った保険が審査落ち

岡山市 井上 柳五郎

聞き上手な他人へ本音洩らした日

ストレスはあんた男でしようと言われ
嘘ひとつ夜半目ざめて眠られず

岡山県

花田 たけ志

たしなめたマナーへ返って来る罵声
死ぬる順違えちや困る立ち回り
姑に牙をむかせぬ嫁の舌

岡山県

岩道 博友

春来たら買いに出ようと老母の足
百姓の話になって入歯鳴る

田舎道女房と踏んだだけの跡

岡山県

矢内 寿恵子

煮豆ことと嫁も姑となりはなり
汗拭いて来た言訳を責められぬ
誤字当字老母の温みをだいて来る

謎めかす愛打ち明ける別れざわ
故郷に戻った鮭へ網が待ち
百万の土地で日銭を稼ぐ店

和歌山県

山田 高夫

宴席の軽いジョークが突きささり
好転のきざし社長の趣味がふえ
血を分けた親子の仲に犬と猿

和歌山県

青枝 鉄治

脇息にもたれ修羅場のほこおさめ
一流の会社過信の喝を受け
つい地金出して機運がしばみ出す

浜田市

佐々木 裕

不景気は嘘らしみんなたんと買う
考えぬいてなるにまかせという答え
梅咲いてはや立春と知る寒さ

和歌山県

天満 三千代

流行に遅れた柄の派手を選ぶ
ライバルに先を越された背が憎い
暖冬へ蛙も出たり入ったり

静岡県

永倉 僕川

十三の春男結び父教え
月給の額を聞かれた初帰省
加賀ダルマコケシと一緒に春の卓

羽咋市

三宅 ろ亭

教え子の見舞に心春のよう
同室の人が羨む見舞客
病気のおかげでメロン食べ倦きる

芦屋市

竹中 綾珠

口癖に言う光も失せてくる
句の種がころりところぶ置炬燵
鐘つけば知恵が広がる古都の街

寝屋川市

平松 かすみ

温室に負けるものかと落のとう
年金の暮しへ鉢の置きどころ
水さに耐えぬくつもり猫柳

島根県

北川 民子

神さまでも仏さまでもよい初詣

倉吉市

渡辺 苦句

年迎えてもひとりの膳はひとりの膳
敵に逢うと腹の虫げらげら笑う

福岡県 横地雅風

二日酔い押せば電卓だって酔う

退屈へ退屈が来て花が咲き

月給は銀行へ夫軽くなる

海南省 三宅保

鳩の群れ第九条を楯にする

止まり木の自慢話に罪はない

親の名を先に言われる七光り

高槻市 河瀬芳子

戻り寒とろとろと昆布炊く

歳時記に愛の記念日入れました

日の丸を忘れずに出す角の家

鳥取県 さえきやえ

無理をして聞いたばかりに胃がいたむ

雪のふる街で女のかぞえ唄

明日手術こわい粉雪つもりです

守口市 結城君子

もどきもどきの料理ならべて黄昏れる

暖冬を出て如月の心地よし

美々卯までオーバーの衿立てて行く

福岡市 吉川一郎

百葉の酒で病気を繰り返す

図書室に寂しがり屋の席がある

謝って済むことでない輪転機

吹田市 栗谷春子

いろいろなこと言うて来る春となり
行く道はこれでよきそう春がすみ

犬の水凍てついていた日曜日

高知市 北川竹萌

果敢なさを話して庭の落葉焚く

手ぶらでは来ぬ土佐男酒提げて

湯豆腐に熱燗建国記念の日

松江市 竹内澄子

編棒の目を太くする早春譜

又聞きそのまた聞きで悪女病む

共通点いろいろあつて今の彼

川西市 松本ただし

国説り聞いて秘湯の月明り

散歩道医院のドアもコース内

前立腺そんな話題の喫茶店

豊中市 一瀬福一

軍歌しか知らぬ祖父の後遺症

圏外にいてもやっぱりする噂

若者の頭まん画で脳がやせ

鳥取県 羽津川公乃

晩成を信じたスタート亀で発つ

シナリオになかった今日の紙吹雪

ちらし寿し五彩はなやぐ雛の宵

枚方市 二宮山久

来年の今ごろ受験でなやむはず

両隣集めて妻の昼さがり

妻にだけ借りぬつもり知恵を借り

八起き目の男についてゆく女 箱入りの娘箱からまだ出ない イミテーション宝石箱に馴染めない	箕面市	椎江清芳
嫁取らぬ一人っ子あり母死ねず 試練又楽しからずや神と住む 自転車を止めて尾を振る犬を褒め	姫路市	中塚遊峰
神の倫理しつこく聞かす妻一人 座主様の話はいつも一方通行 茶柱に今日の運気をあてにして	有田市	松井かなめ
春めいて猫も廊下で背伸びする ライラック咲くハルピンに飛ぶ慕情 深追いをするから運に逃げられる	豊中市	上田登志実
演歌きく我が青春に悔いはなし コスモスの便りしたため嫁姑	大東市	土岐トク子
今日一日流されぬように老夫婦 我が命いとしく思う昼の風呂	堺市	柿花紀美女
杯を手にも月を愛で 児を抱いて月に立ち	岡山市	直原七面山
ジュークボックステンポの早い曲を選び	茨木市	堀良江

トロイメライ待ちぼうけの喫茶店 据膳は淋しいと思う姑の座 何もかも手抜きだらけの冬ごもり	出雲市	小玉満江
睡蓮の悲しき古城水に映え 旅芝居裏方さんのエレジーで 不安など無いから検診うけてみる 分校の児等の温味でとける雪	和歌山県	新谷忠昭
ライバルの残り矢の数読んでいる それからも柿を植えない猿と住む 後遺症冬日の寒さを予告する 三世代そろって春の祝い膳	米子市 島根県	川上より子 城角鶏生
風花の護摩木ふたりの名を連ね 春の雨受話器の別れ長くなり 望郷の想いがつのる雪の歌 居酒屋で酒とめられた医者と会い	豊中市 広島県	辻川慶子 田村新造
何十万人中の一人初詣で 太陽を取り合うように蒲団干し 暖冬も神の都会だとおもっ 生えぬきで天下りには意地をみせ	河内長野市 米子市	植村喜代 白根ふみ

自選集

小出智子

尼緑之助

去年のことは忘れて董咲いている
夫の顔も見飽きて雨の音を聞く
花便りうちの電話は人ざらい
一息で吐き出している正義感
廻れ右そして忘れることにする

月原宵明

藤村女

父権地に落ちて空咳通じない
ライバルが幕引く役を買って出る
臘梅に明治の恋がなつかしい
尋常の型では吹かぬトロンボン
ささめ雪右手だけ出すコップ酒

金井文秋

正本水客

軍艦マーチの速度で歩く足自慢
健康の度合がわかるから歩く
平均寿命過ぎたが医者と縁切れず
均等法ない時分から強かった
自分史のせめて終りはむらさきに

辰年のねがいは雲の天に向く
初鏡 白髪のはども確かめて
タイミング サラダ短歌の新体操
自慢屋の鼻が気温に伸びて来た
円高と天候 国会まで歩調
やりとげてこのむなしさは何かしら
乾杯にまだ実感のわいて来ず
ひらかなの母の手紙がよく喋る
針箱に涙の彩の貝ひとつ
来る来ないあの人来るまで繰るカード
車井戸由緒ありげな月うつす
待ちわびて石になる気に悔いはない
矢おもてに立って男の顔洗う
賑やかに狸寝入りを起こされる
夫婦茶碗こだわり少し溜めている

善人は心に重荷を又包む

背信は春の彼岸を吟味する

おばはんもレールに春の夢をのせ
思ひ出し笑いの上手な母の唄
より好み四月の花屋で足をとめ

半歩だけ先に歩いて肩を貸す

石段の数は中途であきらめる

二三人立って私に譲る席

汽車走る瀬戸大橋を船で見る

甲板にひとりのおんな冬の船

身の程を知れと仁王の瞳がもえる

貼り替えた白さ個室は温かい

野に拾う物あり少女たち多感

総桐のタンス障子も母の部屋

三代が養子隣も春の貌

ユーターン故郷の水も甘くない

和服着て女遠慮深くなり

合点の行かないままに酒となり

初参加も勝てる自信は持っている

年輪の中に杉の子眠ってる

児島与呂志

義弟死去で上阪（二月二十二日）

方五寸瑞徳堅道居士入る

死んでいる顔とは見えぬむなしさよ

大阪の空広過ぎる一人の死

火葬場へ来てうちだけでないと知る

喪服着ててっちりの店見て通る

黒川紫香

本田恵二朗

露天湯のムード若葉が盛り上げる

バス旅の帰途はそれぞれ夢うつつ

定刻にちゃんと聞える靴の音

大同小異それもそのはず双児です

音痴パパの子守唄でも児は眠る

市川鈴魚

大矢十郎

眠らせてくれぬ笑顔の捨てぜりふ

軍歌消えずされど酔わねば現れず

生き方も型にはまって宮仕え

二度の職遠しバチンコ屋は近し

残り火の小出しへ遠い日を数え

小林由多香

野村太茂津

切腹という手もあり男逃げられぬ

誰にも見せぬためらい傷が腹にある

短兵急に叩き過ぎたか天狗鼻

哀れにも一匹狼牙がない

工藤甲吉

深追いはせぬが鯉口切つてある

山内静水

お姑と男結びはまだ確か

亡母のあと継いで家内の小商い

肩の手を払う死ぬほど好きなひと

カーテンをびったり灯りも消えちやつた

ゆっくりとたまには磨く足の裏

藤井明朗

花見ござひとき春を満喫す

珍客に会える楽しみさくら土手

仕事快調春の歩幅はみだれなく

健康を意識日記から始まる

新年のプラン重荷になるも歳

水粉千翁

命錆びたりしと思う筆走る

生者必滅を読み直したりこぼしたり

残したいことへ忍耐強くなり

紅梅の蕾へ冬も辛かろう

もぎ取られそうに娘の恋すすむ

米澤曉明

お母さん私えくばが欲しかった

目くばせへもう行動に移る妻

人柄に惚れて力を貸してやる

お招きは嬉し家計簿はさみし

算数の答を合わすだけの母

八木千代

縄にしてゆく正夢も逆夢も

嘘がばれないようにと祈ることもある

しあわせがこぼれぬように粥を煮る

これからも暗示をかけて縄を縛う

壺の底の火種にいつも裁かれる

阿萬萬的

第十九回日展を見て

山の霧動いて滝の音を吸う

夏近き飛鳥は草の匂う道

糸蜻蛉の羽根へ水面の影揺れて

海鳴りへ肩寄せ合つた錆びた屋根

音のない絵となり長江雨が降る

橘高薫風

わが町は古墳最後に春の色

つらつら椿つらつら大和郡山

川口弘生さんを偲ぶ
悼木山遠二氏

字にならぬ今はの際の字も読める

川柳太平記 (119)

川柳の群像

鈴木 九葉

東野 大八

糸杉の空 ふるさとは責めもせず 九葉

わが心ひとすじとなる春の笛

子はとつと二月の雪の降る如く

「主幹（註 九葉を指す）は、本の虫であつたので、あらゆる本を読みあさっていた。」

生田春月、萩原朔太郎、武林無想庵、辻潤の

ダダイズムにいたる図式の遍歴。ゲーテ、ニ

イチエ、ドストエフスキー、リルケに憧れて

いった過程は、主幹の川柳の歴史であると私は考える。そしてゆるぎなく斎藤茂吉にひかれ、朔太郎に魅せられ、辻潤たらんとし、ド

ストエフスキーに親近感を寄せながら、不思議に九葉主幹は、春月、リルケにひそんでい

る抒情性を心の隅へかたくなに宿していたと

私は思う（「ふあうすと」 山本芳伸追悼文）

昭和37年主宰者楳元紋太が病臥してからは「ふあうすと」誌の主幹となり、同誌巻頭を飾って連載した文章は、緻密な読書人の本領を発揮してその作品とともに多くの川柳人を魅了した。

九葉は本名鈴木豊太郎、神戸商業、神戸高商卒。県立神商の同級生に川柳人三条東洋樹、小池鯉生がいた。川柳に彼を誘ったのは三条東洋樹である。九葉十七歳の時だという。

「彼にすゝめられていなかったら、私はおそらく川柳作家になつていなかっただろう。」

しかし私が川柳作家になつていなかったとしても、川柳を作るのに使った時間を、もっと意義あることにあてたとも考えられない。それで私は自分が川柳作家の端くれになった事

を後悔もしていなければ、彼の誘いを恨んでもいない。（「川柳雑誌」 昭39・5）

「九葉さんの文章によると、神戸高商を卒業されるとすぐ住友銀行から来てくれと言われたが、自分の性分に合わないで断つたと書いていられる。（中略）当時は一年や二年の学卒浪人はざらにいろ大不況の最中である。もし仮りに九葉さんが住友の大舞台で今というコンピュータの如き優秀な頭脳を駆使されていたら必ずや大成されたに違いない。いささか九葉さんの為に惜しまれてならない。歌人の川田順や俳人の山口誓子も住友にいられたのだから。」（「ふあうすと」 山口鉄三悼文）然し筆者あての九葉関連の資料のなかで、ふ誌古参同人の一人はこう書いている。

「九葉氏の父君は、神戸福原で金買業を営まれ、鬼の鈴木」と称された方である。家庭内でも暴君的な方であつたらしい。九葉さんが住友銀行を嫌つたのは、同じ金融業であるという潜在志向からきたものでなかつたか」とある。引用すべき筋合いではなかつたと思われるが、九葉なる人物の人間形成の点で取って採録しておく。

昭和のはじめ住友銀行を忌避した九葉は、神戸三越支店（業務担当）に勤めた。

「当時、東京三越にはきやり系の柳誌『富士山』があり、大阪三越には番傘系の『天守閣』があつて川柳による各店の交流が盛んであつた。これに負けまいとして、神戸三越も九葉さんを盟主として、『波止場』を誕生させた。七号までしか続かなかつたが楽しかつた。」「ふあうすと」 山本芳伸悼文抄録

「昭和10年学卒後三越に入つたが、『波止場』が生れ、九葉先生の指導で川柳を作るようになった。往時の先生の御作『短気者淋しく生まれ詩を作る』等の作品が当時のノートに残っている。」「ふあうすと」 伊藤定子悼文

「九葉氏はフィクション作品を頭から認めなかつた。本物の反対語は仮物といわれ、フィクションの代用語とされた。虚構の真などという言葉は、短歌・俳句の真からみてまやかしてであるというのが信条のようであつた。ある席で、そうした作家の女流とムキになつて論争されて、その女流はふ誌を去つた。大柳誌の世帯を支えるには短気で潔癖すぎる一面があり、もっと幅広い度量が欲しい」

この資料に一面の九葉の人間性が出ている。「ふあうすと」誌巻頭の九葉語録につきのようなものがある。

「わたしたちの川柳は、天与のものだと言

えは神がかりめくが、私達の意志だけではどうにもならない天与の機会をつまぐ捉えなければ、わが分身としての作品は生れないであらう」 昭45・3

「私たち川柳作家が現代詩に関心を持つのは、現代詩がどう流れてきたかを知りたいからである。現代詩のカラフルな詩語を川柳に移植するためではない」 昭46・12

「伝統派も革新派も川柳家が本当にやりたことをしているのなら、他人がせんきを病む必要はない。にせもののメッキがはがれるのは、時の流れにまかせておけばよい。わたしたち川柳家はめくらばかりではないのだ」 昭49・10

前掲の「フィクション作家の女流」との論争点と、右の語録とは何かそこに関連性があるように筆者には感得されるのである。

右の女流とは時実新子（川柳展望主宰）のことで、彼女の「凶暴な愛が欲しいの煙突」という句をめぐる件である。ふ誌同人の間で煙突事件？として話題をあつめた。

「九葉氏との出会いは昭和八、九年に始つたと思うのだが、（中略）当時のふあうすと選者といえは、大体、紋太、素生、竹二、東洋樹、嶺月、九葉といったところで、とりわ

け九葉氏の選は厳しかつた。紋太師や素生さんが二十句から三十句抜かれるときでも、九葉氏はせいぜい十二、三句、少い時は七、八句ということもあつた。だから、他の選者に二句抜けるよりも九葉氏に一句抜けることに努めた作家が多かつた。」「ふあうすと」 田中好啓悼文Ⅱ註・前記に用いた悼文とは、「ふあうすと」の鈴木九葉追悼号に拠る）

九葉は戦後神戸トラック協会役員。昭和51年12月29日心不全で死去。享年69。釈豊信。

「私も出世のたしにならない川柳を選んだからには、川柳と共倒れするまで、とことんやってやれという気持になる。川柳の道は詩人の道ではなく、川柳作家の一人一人が生きて行く道であると思うと、急に自分の身のまわりが明るくなつたような感じがしてくる。」「ふあうすと」 昭52年1月「わが足跡」これが九葉の絶筆となつた。著書「小さな発言」 昭39・7が一冊あるのみ。

遺句

冬母一つ大きく 神からか

九葉

★次回回は「三条東洋樹」

誹風柳多留廿六篇研究 (三十五丁)

596 大和の桜山城で伊勢ハほめ

石田晋「一条院御時、ならの八重桜を人の奉りけるを、そのおり御前に侍ければ、そのはなを題にて歌をよめとおほせごと有ければ

伊勢大輔

いにしへのならの都の八重桜

けふ九重にほひぬるかな

(詞花集・春)

いわゆる「川柳百人一首」の一にはいるもの。意は不必要と思うのではぶく。

大輔はならの桜を京でかき

八〇二

南||賛。

九重に詠んで名高ひ八重さくら 三七五
奈良桜一重よけいに匂ふなり 四二八

多田||賛。

597 御立身なまくさい風門を吹キ

石田晋||御出世御祝の鯛。生臭い風は幽鬼の感があるが、ここは祝いの風。

御立身魚に帆かけて乗ってくる 二六三

目の下へ帆をかけて来る御立身 四九二

意は、出世なさった邸に御祝の魚が通り、魚の匂いがただよっているよつたの意。

南||賛。祝いの生鯛が次から次へと持込まれ、為にその魚の生臭い風が御門前を吹くとのこ

石田晋一・南得二・小野真孝
本多正範・石田成佳・大屋六郎
八木敬一・鈴木黄・多田光

故岡田甫

とでしよ。

帳面に鯛く鴨といそがしさ 九八〇
鯛ぐらいたづらんくと御あいさつ

多田||賛。

598 舞鶴ハ空色に能ひ模様也

石田晋||先行の

鶴といふ字も舞って居るのとやかさ

と同じく、風ともとれるし、実際の鶴の白い姿が晴れた空に舞う姿ともとれる。ただ、江戸城の異名「舞鶴城」が掛けてあるように思

われる。すなわち、舞鶴は青空によくあつて
いる模様であるの意か。

南〓賛。青空に舞う鶴を着物（小袖）の模様
に見立ての句。風及び舞鶴城？

石田成〓賛。情景の句とおもいます。

八木〓賛。舞鶴城がかかって、徳川讃美の句
のように思ふ。

鈴木〓賛。やはり徳川家礼賛の句と見たい。

多田〓江戸時代には江戸の空で鶴の舞うのが
見えたので、そのことと結んだのであろう。
むりに徳川礼賛と取らなくてもよいのではな
いか。

599 つきまとふ狐を放す国家老

石田晋〓お妾对国家老。お妾は玉藻前の昔か
ら狐か。三国伝来の狐を放したのは陰陽師泰
成だが、今は国家老というところか。「つき
まとふ狐を放す」で狐つきをおとす呪術者か
と思つと、国家老と言つたところがおかし
み。意は殿に付き纏う狐と同じよふなお妾を国家
老が放すといったところ。

石田成〓賛。

蛸つばをぶちわりに出る国家老

まづ猫に袋かぶせる国家老

多田〓賛。

三四
12
八七
5

600 山吹と違ひ見事な梅の花

石田晋〓安倍宗任と太田道灌の対比。即答の
できぬ山吹は「七重八重花は咲けども山吹の
実の一つだになきぞ悲しき」、即答のできた
梅の花は「わが国の梅の花とは見たれども大
宮人は如何にいふらん」となる。意は即答の
できなかつた山吹と違い、公卿に一撃を与え
た見事なのは梅の花、ということ。

多田〓賛。梅はよんだか山吹はちをかき 二四4

601 一ト御殿ン稲妻のする花の朝

石田晋〓奥の花見の出発のごたごたの句では
あろうが、稲妻がはっきりしない。雷が鳴る
と婦女子は騒ぎまわる、その景と花の朝のあ
わただしさが同じようだと言つたものか。

南〓礎のいう御殿女中花見の出立前の光景。
奥方、御姫様はじめ御供の奥女中等、今日を
晴と盛装。「稲妻」は折柄の朝の光に、その
髪飾の金具が稲妻のごとく、キラリ／＼と光
り輝くというのでしよう。

石田成〓賛。花見に盛装した立居振舞。

多田〓私としては、だいたい礎稿のように、
お屋敷の奥のごたごたと考えています。

602 月の疵直打をしたも名句也

石田晋〓全くわかりません、お教えを乞ふ。
南〓宝井其角「夏の月蚊を疵にして五月雨」
があり、其角には数々の名句があるが、この
夏の月の蚊を疵にして五百両の値打をした句
も名句であるとのこと。

蚊が無イと其角千両迄ハつて 二二23
夏の月其角半分ンはめて置き 寛元宮1

八木〓賛。

句を疵にして店賃が百安し

多田〓賛。

二六39

603 追／＼に割込の来る初のひな

石田晋〓初の雛の句。生まれて初めての節句
には、雛や道具が親戚知人から贈られてくる
するとその数が増える度に雛や道具をならべ
かえたりすることとなる。

それを割込という芝居用語を使って句にし
たもの。

大屋〓賛。

真中に本店からの内裏びな

中納言ぐらいをくれるしわい伯父

多田〓賛。

拾十
22
一六
37

水煙抄

黒川紫香選

広島市 流 奈美子

故郷の噂を連れて春の風
里の木戸開けると亡母の瞳に出会う
メロン味値程に評価しない舌
響き合うハート信じてタクト振る
博学のゆとり黙って聞いている

今治市 野村京子

掌の荒れへ女の音符冷えて冬
古本屋の主人居眠りばかりする
雪の中少女おとぎの国へ行く
ひきかえすにはあまりに遠い道しるべ
トランプで愛を女が追って見る

富山市 舟渡杏花

貸して戻らぬ傘とおんなじ傘を買う
欲深い耳の掃除は念入りに
大風呂敷の横でラッパも負けていず
美人にはめっぽう弱い生れつき
目線すこし下げる幸せ見えてくる

八尾市 高杉千歩

朝寝して父の影追うゆめの彩
病む友とシャボン玉とはそ花の庭
お便りがハガキですまぬ夜半の春
街更けて屋台が流す夫婦みち
鬼さんがいるから安心して遊び

佐賀県 寺中三枝子

花ごよみ蕾開いた日のデート
聞き上手話し上手でドンになる
からませた小指が私困らせる
へのへのもへじ足を挫いて暇ができ
オールマイティ運命に強い妻の辞書

熊本市 永田俊子

石橋を何度も叩いて出おくれる
愛の鈴鳴らしてくれる人に逢う
折返し点でわかった母の塩
雪ためた竹はジャンプの機をねらう
画廊喫茶にしもやけの手を暖める

熊本市 宇野昭代

ガラス屋が来るまで窓のボール紙
雑巾を正面に干す若さかな

読みさしへ文鎮代りの虫めがね

小走りの妻へ夫の歩がゆるむ

子に送る返事へ誤字のことも書き

熊本県 大川幸子

売り出しの目玉あさが姑の趣味
肩パット益々強くなる女

消ゴムで消えてなかった過去が浮く

捻子が切れ恋する事につかれてる

家中にチャイムひびかせ留守らしい

高槻市 笠嶋恵美子

春一番花嫁さんをつれてくる

マネキンに着せる服から売れてゆく

腹立ててみても愛しい子供達

不倫きさら雪の重さよはかなさよ

相槌を打って共犯者にされる

尼崎市 児玉歌子

遠い日の男を想う茜雲

まだすべて許すに遠い廻り道

否定する言葉がだぶる春の海水

石に投げて不運を確かめる

影絵 名古屋市 藤井高子

母は海愛のかたちも方円に

野の草に我が生きざまを問われけり

ループタイふらふら街の放浪記

コーヒーへ持ち寄る旅の後日談

議論百出小骨ばかりを持てあまし

静岡市 沢田きん

上向きの鼻が愛嬌振り回し

春を待つ芽のふくらみへ如露の水

話下手せめて聞く耳磨きたい

赤い実が燃えて明るい春の庭

校庭の音が聞こえる風の向き

草津市 久保和友

蟹さげて旅の顔することもない

北国の時雨が好きで酒になる

三十間長屋の前で斬られ役

小錦が走るのを見る巡業地

全快へ麦わら帽子が掛けてある

高槻市 津田スミ子

風邪声の方が魅力の電話口

川の水春の音して流れ来る

いばれる程の所得もないが申告書

編棒を持つとやさしくなってくる

身を護る法律僕に矢をむける

静岡市 浅子まつゑ

忘れじと思えど忘れる事ばかり

ありのまま書いて日記を五年越し

寒いのに鼻の頭へ汗をかき
捨て猫に好かれしばらく撫でている
風邪の子をあやす童話の種が尽き

長岡京市 木 本 如 洲

近松の恋は不倫で美しい
涙もらいおとこを欺す舟の櫂

週末の午後献血の列にいる

街角の花屋に春の詩がある

母の墓畔を軽く越えてゆく

和歌山市 山 口 三千子

衣食住足りて心を病んでいる

陽の当る場所で居眠りしておこつ

仇花と知らずに蝶はたわむれる

一通の手紙に過去をあばかれる

念に念入れてスタート出遅れる

熊本県 高 野 宵 草

新道の真ん中へんが元の家

理髪店の鏡に自信つけて出る

淡々と苦労話をして泣かせ

子と歩く街の雑踏充ち足りて

大袈裟に事件報道する平和

二度三度疑い深くなる電話

トタン屋根熟れ柿落ちたままで冬

ままごとで父の弱さを子が演じ

数え歌紅殻格子からもれる

じいちゃんの靴もリズムを持っている

吹田市 井 上 照 子

堪えて来た寒さに椿潔し

坂の道心に刻む師のことは

美女の絵に喰いつくようなベレー帽
書道展招かれた義理読めぬまま

湯気の出るあかごを包むバスタオル

京都市 木 村 たけし

小鳥来る苔の青さに祇女の墓

健康で半年過ぎた定期券

湯煙りの窓アルプスの雪に酔う

愚痴こぼす男に負ける貝割菜

笛を吹く少女を森は眠らせる

久留米市 鶴 久 百万両

黄水仙活けて養子を募集中

婦果本能妻には永久の謎だらう

愚夫に還るとき消しゴムはもう要らぬ

筋のないシナリオ抱いて春を翔ぶ

標的から悪女を庇う天邪鬼

和歌山市 堀 畑 靖 子

夫から見せたいだつて今朝の富士

エネルギッシュに動き夫に恐がられ

仏前に春を知らせる花を買う

玄関で犬と仲良く寝るアヒル

トラック野郎の妻をドキッとさすニュース
岐阜市 渡 辺 杏 村

一年生持ち物みんな名前入り

高校生ヒゲがちよっぴり生えて来た

窓ごしの光居眠り誘い出す

一斉に青い背広で入社式

花見する余裕はくれぬ棒グラフ

滋賀県 安田志津

わだかまり包んで消えてくれた雪
追伸に梅の便りも添えておく

鮮やかに紅で咲いてもボケの花
さわやかに聞くJRのありがとう
束縛がなくなつてからの深い闇

鳥取県 土橋はるお

じいちゃんと呼ばれた耳の掃除する
水割の底で女が泣いている
姑に仕える本を読んでいる
まな板の上の魚が逃げている

米子市 小村てい子

味方にはなれず其の後の傘を干す
背の雪がロマンチックと六十路馬鹿
冬の真中で拾った淡い文字
大声を出して胃袋たしかめる

鳥取県 小谷美っ千

人生双六神も微熱が出るそう
恋だらう珈琲モカに凝ってみる
詩に託す万葉人の深なさけ
陽があたる障子の影に春隣

大阪府 上田柳影

胡瓜揉みが好きで逆風には乗らず
あいりんの街で気兼ねのない煙草
自販機で買う潤いのない切符
こんな時居てくれたらなと灯を入れる

東予市 小山悠泉

横に首振って頑固な父である

動かないクレーンにらんで職がない
誇る物ない故郷の空が澄み

四国の夜明け試走列車が橋渡る

尼崎市 森安夢之助

思い出が残っていないこの名刺

画紙一ぱい夢を描いてる幼稚園

紋す気になつて包みを解いている
離農した節くれ指のひとり言

尼崎市 的場十四郎

空港で遺書を書いてる旅人形

節穴で世間の噂聞いている

よろこびと厳しさ抱いて晒布まく
老妻が守りの座に居て恙なく

西宮市 松本一郎

ときめきの心夫に土産買う

ご近所に顔なじみ増え定年後

童歌輪の中に居る野の仏
どの部屋も灯りをつけて妻の留守

鳥取県 田村きみ子

陽炎が燃えて春の日けだるくて

今だから言える貴方にアイラブユー

少年よ雪ダルマの絵書けますか

新人類ときどき神と手をつなぐ

愛媛県 西山えつ美

おにぎりがこんなにうまい災害地

本命だからそつと手渡すチョコレート

ニュースでも七草がゆをすすつて
結婚記念日妻はすっかり覚えてた

桜井市 前山 美恵子

姑に尽してくれる青い鳥
しあわせのいびきが優しい顔になる
すりガラスの中にしまったブライバシー
もんどりに素直に入る好奇心

岡山市 千原理 恵

意地張った肩が悲しい影法師
ふつくと太った気がする冬の猫
方程式解けないままの闇つづく
俗世かな男一匹罌に落つ

尼崎市 山田 保蔵

正月に誓った禁酒三日もち
貧しくもみんな揃つてお正月
そんなもの買うなど財布泣いている
総理でもタダで空気を吸っている

熊本市 北川 一進

麦踏みも済んだと鉛筆書きの文
テレビ又つけ放しの高軒
宝石をつけたら指を見せたがり
台所並んで立った新世帯

熊本市 黒田 緑

呑む飲みぬめなどと次元は埒の外
何気ない癖を妻からつつかれる
頼りない数字にたよる浅い知恵
なめくじの散歩はひからびておわり

身蟲肩の話耳だけ貸している
幸せの朝トーストもいい焦目
甘いムード水さすベルは放っておく
駅弁を買うふる里の心買う

西宮市 秋元 てる

手を振ってくれるローカル線を行く
種明かしするまでもない夫婦劇
へそくりを足してブランド買いにゆく
面倒見のよさが取り柄の握り飯

枚方市 中山 おさむ

大漁旗見えて無線が騒がしく
鹿獺の身振り手ぶりを聞いてやる
妻入院いつもの居間が広すぎる
ちよんぱりとばあちゃんの待つ無人駅

静岡県 藪田 獺 杏

亡母の部屋今も灯りをつけてます
疑いを知らぬ仔犬の目がきれい
死ぬ日のために笑いを少し取って置く
踏まれた草が春を覚えていてくれた

大阪市 亀井 円 女

熱があるごめんねすこしねかせてね
ポケットへねじこんでくれた母の愛
ポケットに入れておきたい話聞き
搾乳を終えればほんとに丸い月

兵庫県 倉垣 恵美

旅靴ここもふる里芽花咲く

寝屋川市 宮崎 菜月

戦火なきいちごが燃える防空壕

花の芯一つ貰って秘め通す

赤を着るブルーゲンピリアに負けられず

鳥取県 鈴木 芙美

ガス欠にならぬ程度の夫婦仲

内需拡大田んぼも道も広けれど

赤い服着たくなったら中年か

電話から郷里の空気を少し吸い

河内長野市 大西 文次

一病息災金欠病という持病

送電線古里の山一またぎ

医者よりもゴルフに行けば治る風邪

仏より自分の好きな供え物

尼崎市 吉永 伊三郎

寺町の風にととき会いに行く

手袋を脱いだだけです二人仲

耳鳴りの奥で軍靴音揃い出し

まばらな客席から痛いやじ一つ

寝屋川市 太田 藍子

盃へどうぞどうぞと要らぬ世話

ごきげんの父が一人で鬼は外

家族よりのんびりしてる受験生

受験の日天神さんへ念押しに

静岡市 三井 三津子

熱燗がさめて話が進まない

逢える日は心も顔もよく写る

おふくろが達者で届く四季の味

明日のことより今日の考える

尼崎市 鈴木 良征

急いでもあかん門限すぎている

恰幅と言う贅肉に泣いてます

佳き日がら濡れた人形の瞳に出会う

盲導犬「スロースロー」とバス降りる

佐賀市 古川 一徳

父と子の橋揺れて絆が太くなる

正論でくる妻世間を狭くする

春雷に小さく光るくすり指

素人の依怙地直球ばかり投げ

米子市 服部 朗子

大輪の花にあこがれ土寄せる

分身にふしぎな道を歩かせる

思い出の道を一人往き来する

いのちのかぎり尽くしてくれた提げ袋

大阪市 山田 妙子

娘の恋が春一番に吹きました

身から出た錆ゆえ後振り向かず

赤飯が好き家族でめでたけれ

ライバルが居なくなったら眠るばかり

鳥取県 黒田 くに子

祝賀会少し妬みをまぜて飲み

重荷みなおろし冬眠してました

優待席で安眠している猿もいる

子の車戻って安堵してねむる

貝塚市 池田 寿美子

カンツォーネ明日の発想変えてみる
目覚ましの聞えぬ夢がつづく朝
山の歌山小屋だけの灯が温い
マニキュアを忘れず孫とお買物

兵庫県 西脇富美

シナリオが無いから波が越えられる
春一番火種かき出す火消壺
思い出を辿れば遺影の児が笑う
へそくりは決断聞いてから出そう

静岡市 安本孝平

自己主張ばかりしたがるアドバルーン
振り向けば去年の影が追って来る
古日記妻の本音を垣間見る
喝采の中で約束反古にする

和歌山市 森茜

譲られて笑顔かわした交差点
去る人へあつけらかと南風
社長さん使い捨てとは殺生な
シクラメンはめて寿司屋の暖簾でる

大和高田市 寺脇三倉

長のつく名刺が欲しい三年目
泣き虫でだから駅まで送らない
披露宴恩師の祝辞にある詠り
愛の巢の広さ座って用が足り

鳥取県 伊吹富恵

身内には渋さ甘さの柿の赤
逢えばすぐ愚痴になる子に逢いたくて

懺悔録書けば消したい罪ばかり
口惜しさを噛んで明日の糧とする

鳥取県 田村千絵
(高二)

わたしなりのファッションだから着こなせる
十七歳青春思いきり学ぶ
校門を出ると北斗七星見える
恥じらいもなくパン食べている女の子

和歌山市 田中輝子

私ではない女と話しているソファ
便箋の白さを利用しすぎて
これ切りもいいねホームで手を振って
遊び疲れて眠ってしまう妻の膝

兵庫県 東浦砥代

妥協して力のぬけた顔をする
夢捨てて笑い袋が小さくなる
おくれ毛の恥じらい若さ抱きしめる
目かくしをすりやこそ神の手も握る

熊本市 鶴田謹爾

小春日の庭にヒヨドリ来てくれる
週刊誌やや売れすぎる文化国
不躰のマイク愚問を黙殺す
夜半に聞く雨樋の音春近し

鳥取県 太田幸枝

美人薄命わたしは白寿まで生ける
美人ではなくても心温い嫁
ストレスがあるらし寝言まで聞かせ
虎落笛さびしい母の愚痴じゃない

鳥取県 津村 八重子

夜桜や亀井音頭に貝がら節
杉笛に一途な命かけて父
蛸のよう湯舟に父の顔がうく
それから言えば器が欠けてくる

唐津市 浜本 治幸

寒行の音遙かなり風凍る
結論を先に伸ばして酒の宴
雑踏の真ん中に居て孤独感
声のない電話無気味な夜が更ける

静岡市 片平 静代

土産物買わぬつもりが買つて来る
よく折れる赤鉛筆や家庭赤
訃の報へ今日も予定がくるい出し
綾取りへ好きなあなたへ橋渡す

静岡市 杉山 やす

春風が歩けあるけと押している
小錦に似てる人形出来上り
医者からは無理をすると言われている

羽曳野市 吉川 寿美

切り札を伏せて反論きいている
虚と実の間で逆立ちしてやろう
病夫看取る背なにしんしん雪つもる

酒田市 永沢 裕子

立話聞いてしまった塀の内
安売りのチラシくらしの枠でみる
人形に問いかけ老いの火をおこし

尼崎市 新井 泰子

バレンタイン和菓子に孫の声添えて
育児書の数ならわたし負けません
鍋みがき心の垢も流します

熊本県 岩切 康子

古切手世界の子等が手をつなぎ
星座などわからず星の美しさ
急ぐ帰途月は大きく闇登る

出雲市 金森 知恵子

握手なら羞じらう遠い日の二人
亡母の掌の温もり背なが覚えてる
慕い寄る蝶々だから欺せない

静岡市 三浦 つね

アスファルト歩道なじめぬ藁草履
今日の日をまだ惜しそうに逝く夕日
気兼ねなどしない昼寝の老夫婦

西宮市 上嶋 ふさ子

独り棲む母の夜なべの灯が赤く
夕風ぎて入りくる船の灯がともる
声出して姉と争う夢を見て

寝屋川市 立床 晴風

土を這う虫にも広い天がある
一坪の土地も買えない貯金帳
二次会の言い訳提げて千鳥足

兵庫県 酒井 靖子

地図にない橋は叩いてから渡る
嘘一つ吐けぬ男にある反旗

思い出を飾るボタンをつけなおす

枚方市 森 本 節 子

蒲団干しせねば損する様な日々

鷺はきてくれないが梅ちらほら

シヨールで小さな心配かくしてる

米子市 新 正 子

釣り百科今日は地球を釣りました

ジョークには笑い遅れている律義

釘を打つ音のまんまのお父さん

藤井寺市 高 田 美代子

なだらかな坂がなかなか登れない

起き上りこぼしに勝てぬなと思つ

相談をされると決つて金が必要

尼崎市 尾 宮 弘 治

達筆の亡父が生きてる硯箱

葉牡丹を夫婦ダブつて買ってくる

予定メモ書くのが惜しいカレンダー

尼崎市 木 下 義 嗣

ダルマでも時には横になりたかろ

さくらまだ蕾の墓の泉岳寺

お揃いの湯衣がなびく露天風呂

伊丹市 小 熊 江 美

そこで問題孫がクイズを持ちかける

旅慣れた母で財布は二つにす

町内の噂笑らす立話

京都市 森 川 春 子

町角で舞妓通るを待つカメラ

雛飾る孫の手つきは危なかし

日曜日鹿せんべいに振り向かず

徳島県 宮 武 まつ女

もう意地は張るまい天気悪くとも

鈴つけた猫が時どき来て泊る

りんご歌妻が乙女の顔になる

新発田市 上 鈴木 春 枝

遺言の下書きをする誕生日

度忘れをしたで逃げとく母の知恵

本音吐く独りの部屋の独り言

静岡市 中 川 み つ

振り向けばあなたも止まる影法師

愛想の無い妻と居て安堵する

居留守ではないが起きられぬ風邪の床

広島県 森 川 拔 智

ゴルフマラソン相撲を見るのが大好きで

おしゃべりが過ぎて眼鏡がずってきた

聴診器おれのやまいがわかるのか

和泉市 中 川 楓

三面鏡三つの女写し出す

目につかぬ心づかいのある老舗

表札に父がいてます一周忌

佐賀県 山 口 松 枝

ノートから足がはみだす子供の絵

手術後は早く食べたい希望だけ

冬帽子脱いでひとりの旅終る

大阪市 松 永 すすむ

白魚と言われた指も今は沙魚
ばそぼそと言訳をする枯尾花
軍服の似合う男が昔居た

島根県 菅 田 かつ子

メロドラマそばで夫の高いびき
看護婦と親しくなった針のあと
うなずけば次の言葉がのしかかり

京都府 小 林 英 子

待つ事も誇りと思う寒椿
華やいだ肌着に替えてフルムーン
風花の涙にふれる一心寺

尼崎市 佐 藤 美代子

炊きたての匂が好きでやせられぬ
好運ですきらりと流すお人柄
見舞客気ままな話して帰る

島根県 小田川 智重子

郷愁やおいも御飯を炊きましよう
街灯が早々とつく冬の街
したたかに生きた同士でお茶を飲み

兵庫県 森 脇 和 子

二兎を追う糸を操る手の疲れ
書き出しが決まればすらすら走るペン
青春の交換日記で今夫婦

寝屋川市 豊 福 路 子

入れ知恵が利いてすんなり母娘文
きょうの日の命の重さ七十路

飾らない夫婦舟にも瀬戸の春

旭川市 朝 倉 大 柏

一粒の種にも太陽賭けている
ふるさとの雲が知らんふりをする
雪のこと言ってあいさつだけの人

尼崎市 明 壁 敏 之

孫帰り台風の跡片づける
幸運が欲しくて壺に騙される
暖冬で泣き出しそうな雪ダルマ

羽曳野市 麻 野 幽 玄

結局は好きとは書けぬまま投函
二次会の先頭を切る懷手
近くまで来たので寄つてく美術館

鳥取県 乾 隆 風

カマトトが居るから財布緩めない
方言を少し都に播いてくる
買物かごから愛があふれている

大洲市 横 田 放 人

孫を見にそんなわけです空を飛ぶ
大学の教科書となる漫画本
おしゃべりが少し気になる禁煙車

豊中市 三 宅 つえ子

佗助が開くあの人がよこぎる
豆まきも忘れて鬼と掘炬燵
節分に胃薬ものむ老いた父

新潟県 高 野 不 二

持たぬのにNTT株の値だけ見る
正直に言うてやっぱり叱られる
ボーナスに合せ交際費がふえる

鳥取県 西川 和子

荷が過ぎて風に乗れない笹の舟
けなし合う趣味を二人は持っている
それなりの荷物背負って惚けられぬ

富田林市 大澤 三四子

磨かれた鏡に心見すかされ
包丁の音が知らせる出来不出来
不器用で雑音ばかり耳に入れ

岡山県 土居 ひでの

主婦ひとりシェフに仕立てる調理法
ひとり居の用心棒は父の下駄
ナレーションのない涙に動かされ

岡山県 伏見 すみれ

裏口に女の涙おいて来る
博多帯キリツと女に隙がない
セールスに隙みせたのが不覚

倉敷市 田辺 灸六

病院の暖房心は温らぬ
退院の日から噂を吹き込まれ
運のない男に不精髭似合う

静岡市 諏訪 志げ

辰年の孫にハッパをかけてやり
この頃は少しばけたか孫笑う

旅に出て世界の広さ考える

岸和田市 三輪 通彦

仲人を頼まれ作法の本を買う
年金の暮らしに慣れた無精ひげ
権力へ汚ない金が寄ってくる

兵庫県 奥野 テル

散りぢりの絆を拾う夢枕
一人部屋弾むは一句ひねる時
道しるべお地藏さんと峠茶屋

鳥取県 西村 黙光

雲に乗り天狗の鼻毛抜きに行く
分校のいじめを知らぬ雪達磨
ドカ雪へ奢る心を諭される

高槻市 芦田 静江

父不信火の見櫓の日がもえる
活発な孫が振りまわす佗び住まい

法華経百水行

迫力に帰山の僧の水しぶき

岡山県 後安 ふさえ

異国から花嫁が来る過疎の村
愛着のちびた靴が捨て切れず
病み上り仏と語る香をたく

鳥取県 山根 八重

荷車に苦楽を積んだ夫婦道
浮雲と心をつなぐ糸電話
口笛軽く新車を磨く愛磨く

島根県 小田川 昭子

世話好きが居て同窓会の丸い宴

美容院から母にこやかに帰って来

いい事がありそう母のうす化粧

大阪市 吐田 純子

蓋物に入って届く母の味

子離れて青春もどる夫婦仲

出迎えの傘へみやげの紙包み

尼崎市 中澤 向西

森林浴空気はうまい里の山

手も足も出さぬがダルマ目がこわい

優しさに負けてしまった頑固者

和歌山市 丸岩 晏

悪人を気取りたくなり目出し帽

愛嬌がこぼれて甘いママの酌

検診の結果が届く雪の朝

岡山市 池田 半仙

甘酒の美味さ寒さがひきたてる

団地から朝は続々自家用車

仔犬抱く幼児もとても可愛い顔

寝屋川市 井上 すみれ

梅綻んで隣の山茶花散り急ぎ

鏡からお世辞が戻る美容院

黄水仙乙女の口元にさも似たり

鳥取県 西浦 小鹿

海よ風げ酔いたいほどに酒を注ぐ

赤いバラを雪女へ贈ったよ
嫁乗せて大八車引いてゆく

八尾市 椎尾 公子

駅弁のあれききこれきき迷い出し

合鍵を作ってくれる店があり

鍵を忘れ夫の帰り駅で待ち

高槻市 神野 節子

里の家鬼門はチャンと避けてある

冬枯れの街ニューファッションの彩染める

落ちるだけ落ちて再建考える

静岡市 大石 たき

駄目男意見も言わず陰で愚痴

日記帳書く程の事無くて暮れ

はげかくし帽子かぶればいい男

竹原市 古田 比呂子

バレンタイン夫にも四つきたチョコレート

ごめんねのかわり夫にお茶を入れ

ああ万事休すのところで目が覚めて

岡山市 平田 たけよ

つまずいた石の丸さに教えられ

限りある余生に赤の彩を選ぶ

リーダがうまくて波乱などはない

豊中市 玉井 房子

嬉しくて悲しくて女ですもの

豆撒きの声張りあげる不況風

年豆は顔見合せて端数だけ

奈良県 田中紀美代

水仙のうぬばれ見たり妻の留守

良い噂播けどいつこう広がらず

病む夫よ寝て欲しくあり起きて欲し

青森県 永沢招人

脳味噌が軽いか頭が下がらない

ロボットに三面記事は解せまい

渡り鳥明日を信じて川に居る

十和田市 阿部進

羽根布団娘に贈られて嬉し泣き

雪おろし私は高所恐怖症

政治力お金を出して買っている

青森県 福士トキ

バンクした自転車わたしの未来像

レパートリー欲しくテキスト買いあさり

八人も産んで育ててまだ達者

静岡市 西村千代

逢い度くて便りを書いた無二の友

春風に隣の愚痴がペラントに

亡き夫に詫びていそいそ旅に出る

鳥取県 武田帆雀

威を落とし楽な鎧にして老いる

禁煙をしてからポケット楽になり

子をあやす振りで覗いている垣根

鳥取県 山田草人

山陰の海のつぺらと春が来る

妻めとる終身刑を背負いこんで

自分だけ写らぬ鏡掛けてある

黒石市 相馬英三

天下泰平嫁と姑が胡座かき

逆立ちをしても落ちない我が財布

老眼鏡外した妻の美しさ

大阪市 堀口欣一

なき人の夢ばかり見る春の夜

梅の花木村重成ここにあり

いろいろの夢に出てくる人の顔

山口県 高崎雀声

春はもうそこまで来ている風の声

一瞬を美しく舞う雪の精

半農のサラリーマンによい暮し

青森県 波ただお

カルガリーに聖火が燃えて平和なり

いい湯だな鼻唄まじりの仕舞風呂

今冬も屋根で挨拶できる雲

静岡市 滝花喜平

三ヶ日許されている千鳥足

日向ぼこ春待つ話声高し

衣食住たりて節度を置き忘れ

田辺市 染道佳明

お祭もすんで残ったチョコが歪んでる

白鳥に憧れていたのはあひるの子

梅だけで食べていますと梅の村

島根県

加本義良

宿題はもうすんだかとお母さん
交通事故追いつくまでの記憶あり

枚方市 二宮 由紀子

それなりに希望をつなぐ老いの春
平凡な余生健康と詩日記
こげくさいから長電話さよならす

鳥取県

久野野草

冬の風さいふの中まであれくるう
がむしやらに走った結果一人です

(前月分) 摂津市 もちづき遊美

ライバルに芯があるから手をつなぐ
米作り自信の腕が泣いている
縁遠い息子可愛い娘と帰る

富田林市

加藤 ミツエ

人生は舞台主役を演じねば
受付の零れる笑顔ホツとさせ

摂津市 もちづき遊美

受験日祖母は仏間にすわりこむ
四十七士の碑に桜の雨降りしきる
花見よりふところ寒い失業中

島根県

松本聖子

人まばら亡母に見せたい金閣寺
靴下の片方おちてる風呂の道

大阪市 今西 静子

目覚ましが布団の中で鳴りつづけ
また事故か地蔵の服がさらになり
オーバーなチラシの嵩に唸される

佐賀市

江口 万亀子

明日にまだスケジュールのある有難さ
論争をしかけて若い気を保つ

豊中市 小林 一夫

赤かぶは恥しがって売れました
ちがいはじめは上のボタンと下の穴

八尾市

片上 英一

義理チョコの甘さ軽さよ風にのる
背伸びした背丈でものを言っている

久留米市 中垣 米之

わが生活カネを除いて足りてます
ロボットの手足となつているパート

堺市

桜沢 あかり

さわやかな瞳に嘘はつけません
友達と同じ悩みを笑い合い

静岡市

柳沢 たま

つなかりを届けてくれる年賀状
夕ぐれに歩幅のみじかい数え唄

米子市 門脇 晶子

弘前市 小寺 ギホウ
子の願い満たして財布文なしに
根回しを失敗しての猿芝居

静岡市 久保 きぬ

木枯しが落葉と踊る路地の音
お茶碗が身体の具合い知っている

島根県 山根 志保子

焚火するエゴな女の寒い背
愉しさよ梢がこぼす空の青

岡山県 牧野 秀香

成人日二十一世紀へと船出する
年賀状皺が殖えたと添えてある

岡山県 後安 江山

家族皆倅せそうに初詣
新しいパジャマの温もりくれる嫁

愛媛県 石手 武

スローモーフ婦どうにか食ってます
弱点を突かれそれから失語症

出雲市 高橋 きよし

続けてる新体操にある妙味
姑より勝る切れ味もった嫁

鳥取県 木下 美葉

美しい女心は燃えている
春雪も燃えてる人は苦にならず

鳥取県 乾 喜与志

欲と愚痴燃えてわたしは生きている

まる嚙りしたい美人よ青林檎

大阪市 川原 章久

袈裟捨てて坊主背広で宗右衛門町
一銭洋食焼いて遊んだお下げ髪

奈良市 井上 大

スキー場雪が降ったといいニュース
先生もイライラしだす三学期

吹田市 山田 里子

青春を包むコートが長すぎる
それぞれの目線が違う大都会

泉南市 坂根 流水

カタカナの言葉孫から教えられ
賀状から故里見てくる気も起り

唐津市 野田 旭恒

老夫婦違う思いで箸を取り
ここだけの話ですがが洩れていた

佐賀県 石田 源吾

砂時計をやきもきさせる長電話
見苦しいものに女の酔っぱらい

高石市 宮田 純一

名幹事と褒められ万年平社員
団体が去んで仏像ほっとする

唐津市 入江 喜久夫

新婚と判る仕草の二人連れ
綻びし寒紅梅に春をみし

岡山市 中嶋 千恵子

半分は妻がさおさす夫婦舟
順番に落ちた熟柿の独り言

川西市 田中喜俊

経済もマンガの本でよくわかり
高校生マンガとガムで座席占め

吹田市 西岡豊

ちやり舞いが受けた舞台の大拍手
大胆に迫ってみよう宵の風

和歌山市 田中みね

乗り継いで逢瀬の時を待つ切符
客人へメニユーが変わる市場籠

岡山県 福原悦子

子離れの寂しさ埋めるひとり言
ミシン踏みリフォームの手に夢がある

大阪狭山市 桜井莊次

連休の疲れを溜めた重い靴
タイミング良くて不要になったメモ

奈良市 米田芳子

喜寿過ぎて子離れ出来ぬ母が近き
よい夢は亡母の形身の羽根布団

大阪市 山北三三三

孫の手の指が足りない鳩の数
頼り切る病む身を妻を叱るなり

熊本県 立道善太郎

仁王さんに話しかけたい町の寺
さよならと言えずにそっと病室を出る

奈良県 横井都姫子

翔んでいる女が好きなお漬物
古里を忘れさせないお味噌汁

唐津市 福島紀一

毛糸玉ころがっている平和なり
夕雀むらがつている住み心地

岡山県 杉本伊久栄

苦勞など厭わぬ母の太い指
おもいやり母は火中の栗拾う

神戸市 木村貴代子

雪降ればいくつになっても雪だるま
我家とは思えぬ程の探し物

大和郡山市 渡部トキワ

ほのぼのと春の便りを梅二輪
梅二輪ほのかに春の囁きを

高松市 竹川折荷

読みながら盗み見もする古本屋
電話口小言親父に引き継がれ

奈良県 米田恭昌

湯けむりが妻のヌードをフォローする
「寅さん」が好きという師の羽根布団

島根県 坂本雪路

お招ばれで茶柱の立ついい話
孫の行儀がよいのでおばあさんほめられる

愛媛県 八塚三五島
グルメ評論どれもおいしい日本語

定退の気ままに動く散歩下駄

岡山県 江口 有一朗

雑音に慣れて人生の旅路晴れ

南米から帰省の友に

古里へ錦を飾る久しぶり

島根県 児玉 幸子

暖冬の湖上に走るサーフィン

小さい春見付けた石垣すみれ花

八戸市 島田 昭治

年金が妻に笑顔を作らせる

買いだな僕をどなたか買ってくれ

高槻市 孝久 彰一

換気扇音騒しく日曜日

麻雀をやる相談はすぐにでき

藤井寺市 楠 昭子

パンフレット見ながら温泉素買い

今聞いた振りをするのも社交術

岡山県 松本 元江

髪を梳く櫛の軽さにある憂い

黄水仙咲いて華やぐ午後の庭

今治市 渡邊 伊津志

丹精の色が出て来た寒牡丹

大根が抜かれてしまひ径暗し

和歌山県 田中 隆積

春を待つ土の吐息を確かめる

蘭の香に熱い思いを思いをかける

静岡市 谷 紀代志

約束を果たし安堵に傘忘れ

失意の死読経の陰で啜り泣き

和歌山県 根本 実

逢えぬ夜はコップ片手に花を踏む

悲しいから花の散る夜に別れない

寝屋川市 北岡 波留吉

榎原へ何時か行ってる建国日

三人目で願ひ叶うたひなかざり

榎原市 西本 保夫

表情から女の耳はするどすぎ

ただ意地で柱時計のネジを巻く

静岡市 丹羽 定次

倅せは孫の泣き声気にならず

淋しさは森も切られて家が建つ

和歌山県 岩崎 瑞穂

石段へ息を切らして初詣

お正月礼儀正して屠蘇祝う

流山市 神田 治

いとこは真似てとパパは批判され

国際法の穴から酸素吸うスパイ

大阪市 島路 太郎

的はずれだった予想はあしからず

人肌が恋し父なし母もなく

島根県 今川 三津江

七草を過ぎれば山はさわぎ出す

時代劇テレビへ夢中老いの部屋

岡山県 富坂志重

無理だとは承知の上で聞く小言

お早ようと言えぬしこりが未だ残り

藤井寺市 菊地繁男

ツーカーの女房の居ない空しさよ

今日からは古稀だが十指まだ動く

島根県 岩田三和

山寺の鐘に合わせてお茶わかす

山のぼりすれば青空なお高し

京都市 山脇正之

野仏に花一輪を供え去る

振り返る献体の意志固まれり

大阪市 平井露芳

有夫恋川柳も又負けとらず

複製の名画飾って飽き足らず

大阪市 富岡温子

八十五まだマムシ酒呑んでいる

寒い日は鍋の中身が変るだけ

泉佐野市 真崎浪速子

プラスアルファ稼いで福祉を削られる

辰年へ新酒に燃える杜氏の汗

大阪市 梶本露児

パチンコ屋なんて軍艦マーチやろ

繁華街仮面をつけた人ばかり

呉市 岡田寿美礼

七草粥八十一祝いほのぼのと

川柳の年賀状もらい心和み

東大阪市 大平太一郎

戦後派に話して置きたい戦前派

名簿またアルファベットで国際化

豊中市 額田明吉

錆おとし垢もさらりと再就職

円高に懐かし洋モク日替りし

●ジュニアの部

枚方市 二宮摂子

父と母ケンカの後の仲のよさ

春の風心地よいな肌寒さ

枚方市 二宮正彦

母さんの機嫌がいいのでおねだりを

お父さんよってる時しかねだれない

尼崎市 新井朋子

答えなど分かっているのに友に聞く

ラブコール聞こえてきそうなチョコレート

尼崎市 新井晶子

プランコをいっぱいこいで空の上

ほんとうに心におにがいのかな

桜井市 まえ山たかのぶ (小二)

ビックリマンシールでいえ中大さわざ

いもうとのパワーおでこがきずだらけ

桜井市 まえ山 (小一)

おひめさまになれなかったらピアニスト

おとうさんのビールなんだかおいしそう

大阪・堺の会所本における 特殊慣用前句題

阿 達 義 雄

上方の会所本（江戸の万句合に相応する）は、江戸万句合に比して、一般に毎回提出される前句題が多く、寛保から宝暦にかけてのものには、前句題二〇個前後というのも珍らしい方ではなかった。

然し、延享四年の瓦竹堂李坡撰『明石人丸大明神三万句集』における前句題四六個は、その数において最も多いものであろう。

この様に上方の前句附において、毎回多くの前句題を課したのは、どの前句題でも附け易いものを自由に選べるようにと考えた興行政策の現われであろうが、上方の前句附にあつては、一般の江戸万句合の様に、或る点者の前句附（万句合）が毎月三回も開巻されるということがなかったことにも起因するであらう。

李坡点に限らず、上方の会所本を見ていると、前句題の文句の中に、殆んど定石化されていた特殊なものがあり、これ等は他の一般の前句題と混じられていても、特殊な前句題として誰にも気付かれるものであった。

この代表的な前句題の例を、李坡点の会所本の中から引用してみると、短句題では次の様なものがある。

たゝく灰吹く	雨のぼろくく
よい日和かなく	かたほにこくく
ほんにほんほに	ねこのまひくく
かねのこんく	あふつ灯く
星のきらくく	

又、長句題としては、
ちんくく風鈴ちんくくちんくくと
くるくくとたばこのけふりくるくくと

ひよくくと鶯のひよくくくと
こんくとかねのこんくくと
きらくくとふすまの引手きらくくと
ばらくくとしぐればらくくくと

などがあり、これ等の前句題の句数や文句に多少の出入りはあつても、李坡点の会所本には特に目立っている前句題であるばかりでなく、堺・大阪の会所本一般に見られるものであつたが、江戸万句合や京都の会所本には殆んど見ることのできないものであつた。

多くの前句附の点者の中で、この様な特殊な前句題を常に出題する者と、之を全く出題しない者とがあつたといふことは、会所本の系統又は点者の地盤などに関係のあつたことを無言のうちに語っているものである。

というのは、これ等の前句題が全く無関係の多数の点者によつて出題されて偶合したとは考えられず、其処には排系、会所、或は地域を同じくしていたための自然的模倣、或は一種の伝統らしいものによる支配などがあつた結果としか考えられないものである。

瓦竹堂李坡撰『明石人丸大明神三万句集』は、その句品、寄句高数、前句題の数などから見ると、上方の前句附の盛時の極点を示しているものと考えられるが、右に挙げたよう

な特殊的前句題も、前代から大阪・堺の点者によって慣行的に用いられたものを、次第に集大成したものであろう。

勿論、李坡点には、江戸や京都の前句附にも提出されていた一般各種の前句題も発見されるが、今はこれ等には触れないことにする。

今、我々が李坡点の集を見ると、その大部分の前句の意味が、その前句題の有無に拘らず理解され、その前句題は附句鑑賞の際には半ば蛇足の感がある。例えば、「きらく」とふすまの引手きらく」との前句題につけられた幾つかの前句を見ると、

おしろい厚き伊達はいちらし

畳へもれし日を取に這ふ

風のかはりも蘭で知る内

客を取らふと猫の皮鳴く

などとなっていて、この場合の前句題は、その附句の意味を考えさせる契機として、背景・場面・雰囲気などを提供しているものと考えられるが、一般の前句附の前句題とは異なり、前句と附句との関係が意味的に緊密性を欠き、附句が一句立としても取りはずし自在となっているものは、恐らく当時の松木淡々等の俳諧高點附句集等の一句立重視の傾向にも影響されたものであろう。

李坡系の前句附から川柳点の多くの先蹤句

を生んだのも、この様な一句立の附句を生む特殊な前句題の存在にも由来していると思われる。

(一) 特殊の慣用前句題の前駆的な姿

前句題の如何が附句の傾向を支配すること考えると、李坡と同じ様な特殊的前句題を好んで提出していた点者は、程度の差こそあれ、李坡的な傾向をもち、李坡的な系統に属する点者ではなかったかと考えられる。

そこで、前に示した李坡点における特殊の慣用前句題が、どの時代から発生していたかと調べてみると、大体において、享保十年刊の会所本合綴の大坂板『和国丸』の辺まで遡ることができるようである。

すなわち、この中に収められている龍田大立評の『金比羅奉納一万句集』の前句の中に「くるく」と煙草の煙くるく」と「た、く灰ふきく」、「あふつともしひく」、「能日和かなく」、「屏風きらくくく」などが見られるが、この中の「屏風きらくくく」は、「きらくく」と襖の引手きらくく」とを、短句題にしたようなものであろう。

又、同綴中にある浪花和田原十石評の『和州大福村清書』の前句題の中にも、やや李坡系の前句題を思わせる「しの、めのそらく」

「入相の鐘く」などが見出されるが、これは未だ十分形式化してはいないようである。

然るに、同じ享保十年の同書中の会所本でも、枕楽評『生玉宮奉納一万句集』の前句題は、既に瓦竹堂李坡点の前句題の前駆的な姿を明らかに見せて、

よい日和かなく 月へによつぱり
叩く灰ふきく 風鈴ちんくく
ねこのまひくく あふつともしびく

ひらくとひらりく」と鳶の舞

きらくく」と襖の鏝きらくく」と

ごんくくとごんくくと鐘の声

というようになっている。

(二) 特殊の慣用前句題の系列

前に特殊の慣用前句題の例を示したので、一々前句題を引用する煩を省いて、この種の特殊の慣用前句題の発見される会所本の名を列記してみると次の様である。

なお、以下列記の書は、鈴木勝忠氏編の『未刊雑俳資料』に拠るものであり、引用句も同様である。

(一) 和国丸 享保十年 大坂板会所本集

(1) 龍田大立評 金比羅奉納一万句集

(1) 和田原十石評 和州大福村清書

(3)枕 楽 評 生玉宮奉納一万句集

(二)誹諧清書帳 享保十年か 大坂板会所本寄本

(1)雨晴堂遠山評 住吉奉納三千句集

(2)吉田戸板評 (書名不明)

(3)菊谷三以撰 (清書所 筆六)

(三)玉みがき

千鹿評奉納一万句集 享保十四年 大坂板会所本

(四)さゝれ石 享保十五年 江戸板

「三ヶ津宗匠撰」となっているから、京・大坂の会所本や江戸万句合などからの抜萃本であらう。

(五)仮題奉納五千句集 享保年中 大坂会所本の寄本

(1)一万句集 (点者不明)

(2)鳳朔評五千句集

(3)龍田大立評 生玉二千句集

(4)慶雲含白羽孝 奉納五千句集

(六)潘山・瓦長雨評前句附集 享保年中 大坂板

(七)俳諧心の種 寛保一年 大坂板

(八)櫻 瓦竹堂李坡評 奉納堺神明宮五千句集

(九)旅 李坡・一舛合評 天満宮一万五千句集

延享元年 会所本二冊寄、泉州堺細字屋刊

(九)旅 硯

延享元年 会所本二冊寄、泉州堺細字屋刊

◎右の「旅硯」の下に記されている「会所本二冊寄、泉州堺細字屋刊」の文字に特に注意すること

(1)滝又峨評 奉納泉州岸和田蛸地蔵尊 寛保三年

◎次に右の寛保三年の双峨点の前句と付句の例を示してみると、

(前句) さりととはくくく

(附句) とどめさすやう仏師は乗りかかり

(前句) 能い日和かなく

(附句) 着飾て乳母ハ裸を追ひ歩行

誘ひ人を叩く真似して羽織出す

(前句) 雨のぼちくく

(附句) いろくくに昼寝の口のゆがむ蠅

(2)李坡・一舛・可申三評

奉納家原文殊堂五千句集 延享元年

(十)李坡評明石人丸大明神三万句集 延享四年 大坂板

(一)磯の波 京宗匠点の秀逸集 延享四年 京都板

(二)おきな草 会所本合綴 宝暦初年 大坂板

(1)左橘評 大日堂奉納三千句集

(2)晚鈴評 柿本社奉納五千句集

(3)魚江・瓢水評 明石住吉奉納

(三)京乾峰評万句合 宝暦年中 京会所本

(1)貞六堂乾峰撰 彩色画

(2) 神の軫

(注) 京乾峰点の右「書に見える特殊的前句題は「きらく」と横の引手きらく」とだけである。

以上の会所本や前句附集を通じて気がついたことは、李坡点に見られるような特殊前句題の見られるのは、殆んどみな大坂や堺の

会所本であり、例外に属するものも一応その理由を説明することができることである。

例えば「さゝれ石」は江戸板であるが、「三ヶ津宗匠撰」となっているから、この中に大坂の宗匠点会所本から抜いて収めたものがあるのであらう。

又、延享四年「磯の波」は俳諧大辞典によると「京・野田藤八板。京宗匠点の秀逸集で前句付以下十三種の雑俳の諸形式を網羅し、当時の風を概観するに便」とあるが、これらの京都の宗匠の中に中村李坡系の者がいたから、この書にも李坡特有の前句題が見られるのであらう。

なお、ここに見られる「た、く灰吹く」「猫のまいくく」「くるく」とはこの煙くく等は、大坂系のもので考えられるが、これ等の前句題は享保以来のものであるから、この頃には既に京の宗匠の中でも、多少これに影響されていた者もあったと解することができる。

最後に、宝暦年中の京乾峰評の「彩色画」「神の軫」の各々に「きらく」と横の引手きらくくとの一前句題だけが発見されるのは宝暦期になつては、京の乾峰の前句題提出法も大阪・堺の会所本などの模倣又は影響などがあつたからと考えられる。

— 同人 吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

直原 七面山

包丁を夢中になって砥いでいた

林 荒介

「ライバルの胸を刺すために」。いやいや、愛する彼女に料理の腕の良さを見せるために……。いやはや、男心の複雑怪奇だ。

口説く気で酔わせて酔ってそれつきり

高橋 千万里

自分も酔ってそれつきりとは情けない。懸命に妻を護って風の中

中原 汲香

嵐から、豪雨から、烈風から妻を護り抜く勇猛果敢な立派な夫。羽の下に妻をば入れて、嗚呼!! 美しき夫婦愛!!

雪国に暮らし賛歌に背を向ける

羽津川 公乃

賛歌する雪景色も、ここに住む人々にとつては、日頃見馴れた一風景であつて感心ばかりしては居れないのですよと言っている。

ひと時は善女になりて回向の座

天正 千梢

先刻まで彼氏と熱く抱き合つて、愛をたしかめ合つていた彼女が今は、善女と化して回向の座におさまつて居る。追善のために。

歳月を無駄にはしない和紙の艶

寺沢 みどり

「あの艶は、和紙が生れて今日まで幾百星霜を閲して来たそのしこりなのですよ」と句主はおっしゃる。私達はその爛眼に心から敬服すべきではないでしょうか。

身から出た錆は素直に落さねば

寺田 裕美

裕美さん!! さあさあ!! 錆を落して磨きを掛けて、錆止めをして身をきよめ、胸をば張つて堂々と未来に向つて行進!! 行進!! 念入りに育てて鷹にさらわれる

本田 恵一朗

さらわれて……口惜しがつている苦悩のに、苦悩のに、心の中では「盗人殿よ!! 娘をよろしく願います」と念じているのが親心!! 嗚呼!! ありがたし!! ありがたし!! 聞く耳を持つて正邪を区別する

野村 太茂津

句主は言外で「区別しすぎると、段々世間が狭くなつて来て住みにくくなりますから、時には耳の感覚を鈍らせて、世間を広く大らかに渡つて行くことはありませんか」と言つておられる。私にはそう思われてならないのですが。皆さんは?

落し子を眺めて思案をしる辰

山内 静水

子を思ふ親心を描いて絶妙!! 松の根は岩を掘んで風に堪え

米澤 曉明

「てををは」が立派に使いこなされていて句も（姿）美しく、語感も最高。句意から受ける感動の波に、私の胸は張り裂けそうですよ!!

女強し愛することを知ってから

石原 淑子

女の「芯」を歌つて妙。

点滴を受けつつ名優芸に死す

上田 登志実

句を読んで泣きました。宇野重吉様!! 本当にご苦労様でした。句主と共に心からご冥福をお祈り申し上げます。

あく抜きをしてから違いにいつてくる

青戸 田鶴

もろもろの女を抱いて、汚れ切った自分の体のあくをすっぱりとぬぐい切つて身きれいになり、将来を約束した彼女に逢いに行く、男の純情さの片鱗に触れた気がして、心楽しい一時を持つ事が出来た。

住み馴れた地球へ少し飽き申し

有働 芳仙

かと言つて、一足飛びに月に移り住む訳にも参りませんが。芳仙さん!! どこかよか場所でもございませうか。若しあらば是非お教え願ひたいのですが。五五の句、四四の句をいじくり回している位では、まだまだ心淋しくて、淋しくて

水煙抄

秀句鑑賞

―前月号から―

越智 一水

それぞれの過去を焚火にぬくめ合い

永田 俊子

焚火、それは庶民の語らいの場所であり、田舎の風物詩とも言えよう。そこで過去をお互いにさらけ出しあため合う姿は美しい。サングラスかけて坊さん何処へ行く

松川 芳子

面白い句である。田舎の若い住職さんであろう。いい車で寺を出るところ、バツタリと村の檀家の百姓さんと逢った光景が目につかんてくる。

悲しみに耐えぬく鍋を光らせる

野村 京子

川柳は人間を詠むと同時に生活を詠むことである。この句、生活に打ち勝って行こうとする台所での、女の後姿がうきばりに出ている。鍋を光らせるが、この句の生命であり、作者の手腕を示している。

雲がゆつくり流れて明日が読めてくる

藤井 高子

日本の四季というものは有難いもので、その風景からも川柳が生まれてくる。ふる里の山を見て明日の生活を農民や漁民は組み立てる。淡々とした写生句である。

愚かにも賽銭箱を覗き込む

笠嶋 恵美子

寺参りをよくする私も、時々、この句のようなことをやらかす。人間の自然な姿を、作者は、愚かに……と受けとめている立派な心がけである。

描き切れぬ想いが墨をにじませる

東浦 砥代

絵心の腹立たしさがよくわかる句だ。でも考えようによつては、筆はちびついていて面白い絵が書ける時があるように、墨もにじんできた面白い絵になる時がある。

母さんが女になってダンスする

高野 宵草

近年、笑いのない川柳の中で、この句は、久しぶりに膝を打って笑わせてくれた。母さんが女になって、とはうまく言ったものだ。ダンスをしていてお母さんの歳と体形までが想像できて、ほほえましい句。

とん底に落ちて味方に妻がいる

浅子 まつゑ

とん底などという言葉を、この頃あまり聞かれなくなったが、まかりまちがえば、とん底の暮らしに落ちる仕組みの社会である。その時、本当に力を合わせて味方になってくれ信じられるのが妻である。表現に技巧も飾り

もないが、真実味あふれる句である。

お世辞には遠く四角に生きている

流

奈美子

とにかく、この世はまともなものに言っている人間は少ない。特に女性には少ない。だが作者は、もの静かで正直な気品のあるやさしい女性であるようだ。川柳は人間を詠むことである。

怒りたくなると決って空を見る

笠崎 恵美子

大空はすばらしい。あなたの怒りをやさしく包んでくれる。空を見るその美しい心がけをいつまでも失なわぬことである。むづかしい表現を使わず、さらりとした教訓的な句。内緒ばなしに孫の小さな手がぬくい

亀井 円女

庶民にとって、陽だまりは有難い場所である。そこによれば、きまって内緒ばなしがはずむ。お母さんの悪口を言っているとも知らぬ孫は、おばあさんに手をじっと握られてい

葉牡丹がひらき小心責めてくる

上田 柳影

近年、葉牡丹を花屋だけでなくおおくの店先で見かけるようになってきた。葉牡丹がひらけば、茎を中心に相抱く形から愛のシンボルのように見える。牡丹の花そっくりの美しさであるその美しさに、作者は小心を責められると言っているのでないか。

愛染帖

橘高薫風選

和歌山市 堀 畑 靖 子
生も愛も夢と言ひ切るは寒し
ふと気付く隙間あなたの横に寝て
米子市 小 村 てい子
積み重ねた本は夕焼見たくなり
流行の服ではないが花のした
鳥取県 江 原 とみお
風花や泪はこらえ難きもの
標的にされてるらしい胃が痛む
藤井寺市 福 元 稔
くたびれた男に代る世紀来る
進退を仁俠道で決着す
高槻市 河 瀬 芳 子
筑で水汲んで来ました女坂
ときめきが消えれば女やめする
米子市 政 岡 日枝子
さくら降るせめて仮面を外しませ
いつまでも泣くなよさくら草が咲く
和歌山県 三 宅 保
らくがきは落書帳にしたくない
意のままにならない部下を頼つて

青森市 工 藤 甲 吉
雪にも負けず風にも負けず寒立馬
寒立馬同士励まし励まされ
今治市 月 原 宵 明
反省を派手にしたのは丸坊主
企みが少うし句う招待状
鳥取県 新 家 完 司
目で犯すだけならしはし許されよ
ツーと言えはカーではなはだ頼りなし
西宮市 奥 田 みつ子
シャム猫を抱いても老いはしのび寄る
失言も意地悪もみな風邪のせい
松原市 小 池 しげお
とばとばと大には大の用があり
一三日ぬくおすなあと猫柳
米子市 小 西 雄 々
砂丘では馬に乗りたくなる少女
税務署が忘れてくれる日を待とう
守口市 結 城 君 子
貧しきは恥にはあらず葱坊主
菜の花の辛子合えから春におう
島根県 小 砂 白 汀
風花の棲家に近いふる里よ
好きなものが失礼ながら五六人
宝塚市 丸 山 よし津
有り余る世も並ぶのが好きらしい
生き下手で唇を噛むことがかり
和歌山市 福 本 英 子
他人を傷つけて揺れだす堅い椅子
流行の不倫の語呂に酔つてから
河内長野市 植 村 喜 代

悪女にも正直である三面鏡
いつまでも若い気である金遣い
米子市 川 上 より子
たわむれに鬼と一途のかくれんぼ
先様に似た初孫をあやす日々
唐津市 福 島 紀 一
落ち椿よくぞ散つたと思ひけり
湯豆腐に一人一人の思いあり
和歌山市 西 山 幸
さくら散るふいに献体などおもう
和歌山市 牛 尾 緑 良
空の青思いあがりは程々に
福岡市 吉 川 一 郎
催眠術寂しがり屋がすぐ罹る
唐津市 浜 本 治 幸
老いて尚かくしゃくと生く父の杉
唐津市 仁 部 四 郎
買い物へ次女も三女もついて行き
大坂市 塩 田 新一郎
親切な嫁に叱られ嬉しくて
今治市 矢 野 佳 雲
夫婦して同じ夢みたことがない
平田市 久 家 代 仕 男
蒸発の母をいくたびクレヨン画
枚方市 中 山 おさむ
核廃絶竹槍ならば許せるか
北海道 府 柴 野 香 京
葬列のあとさき点る雪の燭
和歌山市 後 藤 正 子
ひとりふたりみんなが汽車に乗る訣れ
富田林市 片 岡 智 恵 子

真ん中に座り決心定まらず

松江市

あげるもの何もないので見つめてる

寝屋川市

幸せと殊更いうが気にかかり

米子市

細い月さんげを聞いてくれますか

鳥取市

ばたん雪誰かが呼んでいるような

富田林市

桃の花二つ約束したように

大阪市

息子が酒を飲まぬと片手抜けたよう

大田市

どんよりと曇った空に詩がある

愛媛県

三流の綺麗どころが来て乱れ

川西市

老人の日に老人の友が来る

和歌山市

セリの値へ鮭の眼玉動かない

唐津市

実直に一人一役して終る

広島市

曲り角結び直した靴で行く

尼崎市

薄情な姉と思われよく眠る

奈良市

幼な子に男同士と口止めし

島根県

師の一句ぬくめ戴く朝のお茶

寿美子

光子

光千代

千代

文子

今日子

さと美

武

静雄

実

正敏

奈美子

流

春城

年代

恭昌

江正朗

堀

江

正朗

堀

江

正朗

堀

江

正朗

ひとときを紛らす疼き句に挑む

島根県

長老の訓示を鶴の声と聞き

唐津市

お隣の塀が少うし高過ぎる

羽曳野市

古本屋で見付けた海を抱いて寝る

和歌山市

どろどろと汚職失言でる政治

八尾市

人の字の型に娘一人母ひとり

寝屋川市

左手でたまには握手してやろか

和歌山市

日照権冷たい言葉多すぎる

富田林市

引き止めてほしい気持ちも置手紙

大阪市

指の中で一番荒れてる薬指

鳥取県

冬帽子わたしに似合う雪がふる

鳥取県

怖い者知らずが吹かす煙草の輪

岡山県

退院の日の老妻がこそばゆし

米子市

風にのり心はすでにエメラルド

静岡市

老残の暮しに弾む詩と楽

広島県

堀江芳子

野田旭恒

田中隆二

神平狂虎

山下みつる

岸あやめ

古久保和子

大原葉香

田形美緒

稲本凡子

さえきやえ

武田帆雀

土居耕花

服部朗子

渥美弧秀

森川抜智

森川抜智

森川抜智

森川抜智

森川抜智

森川抜智

森川抜智

森川抜智

森川抜智

森川抜智

森川抜智

この鹿はたしか去年もここに居た

京都市

老いの字のかすれに老いの意地がある

倉吉市

不本意な籠城となり雪二尺

千葉県

ばあちゃん食べた気しないサラダバー

和歌山市

過去からの声がきこえるもがribue

今治市

神神の宴が続く村祭り

豊中市

三鬼忌や生きがたき世を生き抜かん

兵庫県

渡らねば戻れぬ道に来てもう

鳥取県

歳時記にない我が輩の誕生日

土橋

霊柩車はまだ来ない罪の深さよ

名古屋

夕ぐれ心の花は咲いてます

米子市

踏切の一人寒い二日月

西宮市

掛軸の夢の一字に思う事

豊中市

智恵の輪が解けなくなった父の指

弘前市

絵に描けば女の憂い美しい

堺市

ポケットの煙草が疼く禁煙車

大阪市

井上白峰

井上白峰

和歌山市 山口 三千子
半世紀過ぎて自分の夢に合う

岡山県 松本 元江
ゆるやかにたおやかに春訪れる

箕面市 椎江 清芳
相合傘だけど二人はまだ他人

奈良市 米田 芳子
舞鶴へ吊いの旅雪静か

東大阪市 大平 太一郎
バレンタインチョコにない味老いて知る

佐賀市 石田 源吉
蒔いといった種が余生に咲き香り

和歌山市 山田 高夫
父の忌に父の素顔を語る母

米子市 金山 夕子
花柄の枕で眠る七時間

米子市 林 荒介
傷に疵を重ねた両の掌を合わせる

米子市 青戸 田鶴
スパイスをきかせてみても湧えてこぬ

米子市 澤田 千春
雪を出てやがて花野で躍ろうね

羽曳野市 吉川 寿美
割り切れぬものよ愛とは絆とは

唐津市 筒井 朴竜
還暦の竜です青春ブルーバック

尼崎市 明壁 敏之
炬ばた焼風の武者絵に呪まれる

今治市 渡邊 伊津志
白波は綿羊の祥れ海恋し

富田林市 藤田 泰子

私の死ハートが冷たくなったとき

岡山県 江口 有一朗
自嘲する顔を鏡に見て貰い

和歌山市 田中 みね
義母を立てて夫を立てて風が風ぐ

寝屋川市 宮尾 あいき
顔のしわのばしておくれ小糠雨

岸和田市 芳地 狸村
パチンコの玉がころがるたこやき屋

桜井市 前山 美恵子
叱られぬように可愛くついた嘘

倉吉市 田中 亜弥
甘い話に乗るではないよおばあさん

尼崎市 春城 武庫坊
歯車が噛み合い男の歌となる

岡山県 池田 半仙
生甲斐は重い肩の荷かも知れず

兵庫県 吉田 明
地下足袋よりもう定年は来ないから

川西市 松本 ただし
ストレスと妥協出来ないカメレオン

高槻市 辻 白溪子
脇役のいじわるを受けた視聴率

高槻市 川島 諷云児
隠れても逃げて影はついてくる

唐津市 浜本 義美
楢山も生きる闘い旗を振る

唐津市 浜本 ちよ
朝がくると歩きたくなる気持だけ

枚方市 森本 節子
そこかしこ蠢く気配春の土

芦屋市 竹中 綾珠
高層の上に真白き朝の月

大阪市 神夏磯 典子
すばらしい髭をつけたい夢があり

大阪市 板東 倫子
女子マラソン女は強く美しく

広島県 田村 新造
水着ショー心齋橋は空っ風

大阪市 松尾 柳右子
町々に三色すみれ新社員

奈良市 岡田 きぬゑ
聡明に生きると神に遠ざかり

八尾市 島田 昭治
風吊敷を広げあながい度胸なし

豊中市 中桜塚三丁目13-15
投句先 千560 橋高薫風宛(ハガキに3句)

橋高薫風宛(ハガキに3句)

NHK川柳募集

課題「電話」 選者 橋高薫風

締切 4月10日

(ハガキに三句以内)

投句先

大阪市東区馬場町3-43

NHK大阪放送局、ふれあいラ

ジオセンター、川柳係

発表

4月24日(日)ラジオ第一放送

午前11時5分から

荀香のむ

八木千代選

しばらくはまるくなつてゐるまるい虫 松江 竹内寿美子

ここしばらくの間は抵抗も反論もせず心ななだめ
ようと、まだ少し被害者意識を持ちながらまるくなる
虫は作者の心の動きを客観的にみつめた自己の投影で
す。面白いのは下五の「まるい虫」で、もともと淋し
がりのまるい虫のくせに殊更まるくなる意思が伝わり
ます。

引き出しは気を付けないと咬みつくよ 岡山 富坂 志重

どんな小さな日常の一こまからでも、心さへ向けて
いれば深い川柳が生まれることの不思議さ。咬みつく
よ」とさらりと詠んだ明るさ。どんなに痛かっただろ
うにと思わせて。そういえばこの世で出遭う不運のは
とんどは、何かしら油断とか、ちよつとした隙間に起
るような気がしてきて、我が身をふりかえりました。

ほうれん草の僅かな紅が衝いてくる 和歌山 後藤 正子

その日のうちに山を越したい赤い毯

お隣の犬が素知らぬふりをする 羽曳野 吉川 寿美

縄電車 あしたは親を積み残す 岡山 土居ひでの

動かない馬を必死で押してやる 米子 政岡日枝子

黄ばんだセロリ今夜も本を読む 大阪 田中 弘子

山彦を待つほど甘く出来てない 寝屋川 稲葉 冬葉

湯こぼれや明日は南の風だろう 名古屋 藤井 高子

死の間際に目を明けてこの空を見たい
茫洋と旅人でありつづけよう

陽に遇うて雪はこの世のものでなし
うめが咲き桜が咲いてあらそわぬ

司会者の音頭にぱつと咲く桜

毯つきがだんだん下手になつてくる

笛の音につられて春が来ますよう

帰る家あるから旅に出かけよう

犬よりも貧しい嘘でなろうか

通りゃんせ風は止まってくれぬもの

胸のマグマに気付くわたしの記念日だ

冒険の潮から潮が満ちてくる

接木して赤いリングがなりました

散る花の匂いよ人もこのように

雪溶けて美代ちゃん峠あとする

耳栓にしても聞こえる風の音

つり糸が猫と私の絆です

睨みっこ仁王の顔が恐くない

好きなとき桜静かに咲きたかろ

小さな客におとぎ話を用意する

長い道たまに道草したくなる

出直してごらんと天を指す一樹

未解決へ弾ませておく僕の靴

手はじめに二人へもどる小さい釜

もう怒つてはいない柩に埋まる釘

青森 富士 トキ

尼崎 春城 年代

倉吉 淡路ゆり子

米子 門脇 晶子

松原 佐藤 藤子

和歌山 西山 幸

寝屋川 宮崎 菜月

富田林 松本今日子

西宮 林 はつ絵

米子 川上より子

高槻 河瀬 芳子

和歌山 松原 寿子

米子 服部 朗子

岡山 清水悠貴女

大阪 松尾柳右子

藤井寺 高田美代子

米子 新 正子

大阪 神夏磯典子

島根 堀江 芳子

大阪 堀 いくの

和歌山 田中 みね

奈良 横井都姫子

和歌山 田中 輝子

大阪 渡部さと美

倉敷 小野 克枝

快復期の無理は大目に見ていよう
 湯のけむり霊のゆくえが信じられ
 優しさを分けて下さい地蔵さま
 亡母がしたように私も種を蒔く
 咲く時のよろこびだけに花は生きる
 地下街の猿のシンバル休まれず
 やがて妻がライバルになる定年後
 透視せぬ鏡みがいて過ぎた日々
 すらすらといかぬ切手のふくれづら
 肩をもむ姑の心をもみほぐす
 宇野千代の顔にさくらが咲いている
 散るために咲かせたような花吹雪
 曲がり目が一つもなく編んでいる
 春の陽をしつかり椅子に当てる
 吊り橋が長く人間恐怖症
 明日は明日 今夜の星が美しい
 一日が長くなったらおしまいだ
 たまさかの男の料理などれぬ
 よりかかる大きな胸が横にある
 ぶら下がる雲は大きな父の肩
 お砂糖をおおめに入れて合う話
 じゃがいもの花をきれいと思う時
 私小説 雪にまつわる深き刑
 雨しとどまたも女が泣いている
 めがねの傷が深くて森が見えませぬ

和歌山	福本	英子
米子	林	瑞枝
島根	松本	文子
富田	藤田	泰子
米子	青戸	田鶴
宝塚	丸山よし津	
佐賀	寺中三枝子	
富田	片岡智恵子	
大阪	古川美津枝	
和歌山	内芝登志代	
米子	金山	夕子
吹田	茂見よ志子	
兵庫	倉垣	恵美
米子	光井	玲子
鳥取	小谷美つ千	
河内長野	植村	喜代
松原	北野	久子
西宮	西口いわゑ	
広島	流	奈美子
桜井	前山美恵子	
吹田	栗谷	春子
西宮	奥田みつ子	
鳥取	さえきやえ	
大阪	鍛原	千里
米子	沢田	千春

明かしてはならぬ一語を溜めている
 山鳴りは神の足音かもしれぬ
 髪洗う明日のわたしを作るため
 私をきたえる風が今日も吹く
 つきつめて愛しき者を憎しとも
 峰打ちの父の拳がふるえてる
 ノウハウを身につけ泣く児黙らせる
 背が少し伸びた気がする読後感
 お喋りの過ぎたお灸は村八分
 冗談がはみ出しそうな玉手箱
 いけにえにされた男が眠る川
 同行二人運命線は北を指す
 こともあろうに天神さまが火事に遇う
 知恵の輪へ迷いつづける夫の指
 向い風 私に本音吐けという
 確実な別れに気付く風の坂
 花暦あしたのいのち何彩に
 北風の死角に咲いたすみれ草
 夫の粥グツグツ煮えている平和
 十人の友より欲しい友ひとり



鳥取	川崎	秋女
島根	喜島	ノブ
竹原	信本	博子
米子	足立由美子	
和歌山	木本	朱夏
倉吉	野中	御前
和歌山	桜井	千秀
堺	鈴木三千代	
高石	浅野	房子
八尾	高杉ゆきみ	
出雲	石倉美佐子	
兵庫	東浦	砥代
出雲	金森知恵子	
米子	石垣	花子
和歌山	湯浅	由梨
姫路	釣	遊光
貝塚	池田寿美子	
富田	田形	美緒
唐津	浜本	ちよ
和歌山	山口三千子	

ハガキに雑詠3句 毎月10日〆切
 投句先 〒683 米子市花園町14

八木千代

■同人アンケート

わが土地の春

担当・辻 白溪子

桜そして藤

唐津市 仁部 四郎

玄海に向って右手に国の特別名勝虹の松原を、左手には庶民の海水浴場として名を馳せた西の浜を従えて唐津城址がある。明治九年に払い下げられてからは、舞鶴公園として唐津地方の人々に親しまれている。

紀三井寺の桜

和歌山市 福本 英子

ふる里をはるばるここに紀三井寺

花のみやこも近くなるらん

「わが土地の春」の紹介をとのご依頼に和歌山の春を紀三井寺の桜にしました。

名草山の中腹にある西国霊場第二番の札所ですが、見晴しの良いとっても明るい所です。

明治四十五年から植え始められた桜は、登閣口の石段の両側から、中段の広場、上段の広場へと本数がふえて約三百本になる。八重桜、山桜が多く、やはり四月第一週が最盛期になる。ピカピカの小・中・高・大の一年生とその家族が多いが、親愛なるわが日本人としては、やはり一献参ろうか、というところ。四月末になると、第二の花便りが待ち遠しい。巨木にして名木、藤の花が香る。

根廻り約八メートル、蝶形の花が五万余。藤棚は十メートル四方。樹齢百年をこえて唐津市文化財でもあるが、とにかくいい匂いがする。花房が一・五メートルに達する花も多

参道の途中ではっと一息ついて見上げると、まだまだ続く石段の数、でもそれだけに登りきって振り返ると目に飛び込んでくる和歌浦、片男波の青々とした海、そして本堂から流れるご詠歌と鐘が春風に乘って桜へと導いてくると、疲れが一ぺんにどこへやら。

近畿で一番早咲きの桜と海、山の眺めへ京阪神の方々ぜひお越し下さい。四月号の案内では、今年の間に合わないかと心配です。その時は新和歌浦、和歌山城へお供いたします。明るく陽気な空青し山青し海青しの紀州路でお待ち申しています。

く、紫の花のすだれを張りめぐらした中で、大きく大きく深呼吸をして毎年の春を送る。

春の訪れ

熊本市 有働 芳仙

南国熊本は春一番も過ぎ、今、梅が満開を過ぎ、そろそろ散り始めています。市の中心を離れ、郊外の街並みを通ると、どこからともなく梅の清楚な香りが風にのってきます。あたりを見回すと、なるほど塀ごしに庭の紅

梅や白梅が顔をのぞかせています。しかし、春のシンボルは、何と言っても桜の花ですがただ今準備中といったひっそりしたたずまいです。中には「狂い咲き梅に馬鹿ネと笑われる」、気の早い桜もあり、どこか小生と似ています。

熊本の本番の春の訪れは、何と言っても恒例の植木市で幕開きとなります。最初の植木市は、農協協賛による自衛隊通りの植木市で、ここでは現地直送のお国自慢の特産物もお目見得して春の息吹が感じられます。その後十日ほど遅れて、白川河川敷に本格的な植木

入学式の思い出

大阪市 西出 楓 楽

見上げると満開の桜が、頭からのしかかってくるように感じられました。二、三日前から異常に体がだるく、何をするのもうとましくて、中学校の入学式だというのに、ちっとも心が弾みません。私も希望に満ちた新入生のひとりであるはずなのに、まるでひとごとのように、ぼんやり校庭の桜の下に佇ってい

市が展開され、四十数万人の人数を見せ、三月中続き、盛大な緑の祭典が春を呼びこみます。

亡父の思い出

高知県 赤川 菊野

実家の前の小高い丘に一本の老木の山桜があり、春には山桜特有の清楚な花を染しませてくれたものです。その桜も、私が結婚して

ました――。

入学式をおえて行ったお医者さんで、腎炎との診断が出ました。もともと腺病質だったせいか、回復はかどらず、やっと登校の許可がおりたのは、二学期の始業式の日でした。

今からもう三十年も前のことです。それからは、おかげで生まれかわったように健康になりました。毎年度の桜もやさしく私を包み心を浮き立たせてくれこそすれ、あの入学式の日のように、私を威圧することはありません。

桜前線北上、今年こそ中学校の桜を見に行こう――とまた、思うだけで終りそうです。

数年後に気がつくと、何時の間にか枯れていました。

その山桜の周囲にはたくさんのやぶ椿があり、桜より一足先に春を告げると、私は近所の男の子と一緒に椿の木に登り、よく遊んだものでした。また、花の好きな亡父は庭に一本のはたん桜を植えて、とても大事に育てておりました。

あれはたしか、私が小学四年生の頃だったと思います。花の終わった後、亡父はその桜の木の真中あたりから切っているのでびっくりし、私がその事を尋ねると、こうして切っておくと来年はここからたくさんの芽を出し、いっぱいの花を咲かせると言うのです。枯れはしないかと思う私の心配が的中し、枯れてしまいました。その時の亡父の悲しそうなお顔やさしかった亡父のことが、無性に悲しく思い出される今日この頃です。

春の吟行

竹原市 小島 蘭 幸

私達の竹原川柳会は、会員の親睦を図ることと、一般の人にも川柳を広く理解して頂く

という大前提のもとに、年に二度、「春の吟行」を開催しています。昨年は、創立以来初めて、観光バスで大崎島吟行を開催しました。地元大崎町の初参加者を含めて六十六名の大盛会でした。桜の下で飲み、唄い、作句する。白い灯台、青い海。子供達は、のびのびと走り回っています。吟行の楽しさは何といつても自然との触れ合いだと思います。

ご立派な橋の向こうは何もない 10歳 由博
トンネルを抜けても同じ春の海 勲
展望は伊予水軍の夢の島々 静水
後日、大崎町の広報「おおさき」に「長島大橋を観光バスが走る」の見出しで、竹原川

近江の桜

近江八幡市 前川 千賀子

旅行先は風景で選ばぬ。つまり、琵琶湖に勝る景色はないと自負している滋賀は、近江八景でも知られるように、名所旧跡には事欠きません。まず、「花の生涯」井伊直弼で有名な彦根城。城を中心に千三百本の桜があり、四月一日から二十日までの桜まつりには、ほぼ半ばが飾られ、夜桜も楽しめます。駅から

柳会大華大崎島へ吟行……。の記事が紙面いっぱいに紹介されました。桜の季節になると瀬戸内海の小さな島々は淡いピンクに霞みます。近くで見るとよし、遠くから見るとよし。

牡丹伝説

静岡市 永倉 僕川

遠州七不思議の一つに、京丸牡丹の伝説がある。周智郡春野町、京丸の岩岳山に大群生する「ヤシオツツジ」、その別の名が京丸牡丹。京丸牡丹にまつわる悲しい哀れな恋物語

近いこともあり、多くの観光客が訪れ、賑わいます。

しかし、湖国生まれの私のお勧めする桜は湖北の海津大崎。国道一六一号線沿いの約五百本の桜が紺碧の湖に枝を伸ばして爛漫たる様は、どんな名言をもってしても言い尽くせぬ風情があります。この辺りは、琵琶湖でも最も深く、湖の底には古代の壺やはにわがあるらしいのですが、水流が激しく、詳しい調査ができません。四月中旬が見頃ですが、一度、お天気の良い日に、ご家族とドライブでもいかがでしょうか。

を紹介します。

昔、京丸の里を一人の若者が訪れましたが山深く道に迷いました。たまたま通りかかった村人に助けられ、いつしかこの若者は、一人娘と深い仲になってしまいました。村の掟は、村人以外の者との結婚を厳しく禁じていました。二人は仕方なく村を後にしましたが、ついに安住の地がなく、再びこの山の村に帰って来ました。二人は間もなく天竜川の流れに身を投げてしまいました。二人の命日がくると、二人の魂は大きな牡丹の花と咲き、流れるように消えたということでした。

現在はこの伝説とは逆に若い旅人が訪れ、また山間地では過疎化が進んでいるので、一人でも多くの若者の永住を望み、町内企業就職奨励金制度という新しい町の掟を決め、町内就職の若者にお金を支給して町の繁栄に努めています。豪華絢爛と咲き競う牡丹「ヤシオツツジ」こそ、わが土地の見事な春です。

大山の花

鳥取県 松下 たつみ

春夏秋冬、大山はそれぞれ人を魅了してあ

きない。

山歩きの好きな人は、山は歩いているだけでも楽しいが、花や野鳥などを知れば知るほど、もっと楽しさが増すものだ、と話してくれた。大山は鳥取県民の誇りとする山であり、自然と歴史の宝庫でもある。多くの人が訪れているが、残念なことに大山の花についてはあまり知られていないのが実情のようである。ダイセンオグマキのように、大山にはダイセンの文字を冠したもののや北海道、樺太、本州中部、遠くは千島、カムチャツカの高山に限られていながら南下した種類のものまでも見ることができる。残された清浄な自然の中で、春から夏秋と咲きつづける花々は、訪れる人々の俗塵を洗い流してくれる。また横手道は、平易な道すじであり、数多くの種類の花を観賞することができる最高のコースである。是非おすすめしたい。

観桜句会

出雲市 園山 多賀子

四月ノ四月と言えは桜ノ桜と言えは木次の桜土手、毎年四月上旬の日曜日のむらくも観

桜句会は、尼先生はじめ出雲からも川柳を愛し、花を愛する常連たち、それに大阪から紫香、水客、潮花さんの三人組、雀踊子、メ女さんらも加え賑やかな顔が揃い、一年ぶりの挨拶の握手に、川柳という趣味のふれ合いに心温まったのを思い出す。

私が初めて木次を訪れた時、「春雷が大袈裟に春告げに来る」、「風を切る女の歩幅狂わないうい」、そんな句が選に入った感激は今も忘れられない桜につながる思い出の一コマでもある。その後、潮花さんが早逝され、水客さんもお顔を見せて頂けなくて淋しい思いがよぎる。夢のふくらむ蕾、満開さらに好し、ちらほら風に散る風情もひとしおの詩情を誘う。花は毎年同じでも、年々歳々人同じからずの感しきり。

こぶしの花

岡山県 小林 妻子

中国山脈の標高千メートルを越す山並の春は遅い。それでも四月中旬になると桜も咲きます。武蔵の里から珍しい花を紹介させていただきます。

桜や梅は、ほとんど人が植え、花見を目的として二次的根拠もありますが、自然にその土地の気候風土に合致して見事に人間を樂しませてくれる花こそ、春を樂しむ花の見どころではないでしょうか。カラオケブームに乗って北国の春がヒットして以来、こぶしの花が一躍、脚光を浴びたようです。

そのこぶしが全山真白になるほど咲くところがあります。武蔵の里から二十分ほど車で行ったところです。岡山県と兵庫県の境で岡山県英田郡作東町宮原という所です。中国道佐用インターから三十分くらいで、昨年は四月十二日が満開で、村のこぶし祭もできたようです。JR姫津線佐用駅からでもよいが、バスの便はありませんので自動車で行くようおすすめします。また、シャクナゲも近くで楽しめる所があります。一度お出掛け下さい。

近畿文字放送作品募集

題「記念」 森中恵美子選

3句 締切 4月15日

ハガキに明記の上、左記へご投句下さい
〒540 大阪市東区谷町2丁目36

大手前ウサミビル3階
近畿文字放送 川柳係

初步教室

題一 顔

阿 萬 萬 的

今月の課題「顔」はいろいろありまして、さてとなると何から書き始めたらいいいやら。

まず、

春の顔梅の梢にはほえめる

喜与志

(梅の梢に一輪春の顔覗く)

では子供の顔から順次進めて行く事にしましょう。

添寝して子は安心の顔で寝る

ミツエ

(乳房離さず子は安心の顔で寝る)

子の寝顔確かめて見る救急車

正子

合掌の童の顔には迷いも消えてゆく

美子

(合掌の童子の顔に影がない)

善太郎

その童顔もだんだんと智恵がついて来て

都姫子

顔色をうかがい逃げる三歳児

都姫子

(孫はもう顔色うかがう知恵がつき)

千鶴子

爺ちゃんのお話まるい顔で聞き

千鶴子

中年の母ともなるといろいろの顔が

方子

教育ママの顔ゆがませる通知表

方子

バカな顔子の成績を自慢にし

美恵子

(親馬鹿丸出し子の成績を自慢する)

つえ子

顔色で冗談ですと席を立ち

路子

(顔色を読んで女は座を外し)

路子

姉妹のさだめに写る親の顔

路子

そして中年の方々にはこんな顔もたてなく

路子

てはならない事もあって

路子

薄化粧一寸良い顔して行こう

悦子

顔だけで今日は御免と義理を見せ

しんじ

中流の顔で出してる寺の寄付

遊峰

無い癖に顔立てしてはあとで泣く

成明

(顔立てはしたが空しく夜を帰る)

成明

ともあれ川柳人は相当お人好しが多い様で

和子

丸顔が苦勞知らずの様に見せ

保夫

そう言えば人に騙されそうな顔

保夫

(お人好しがはつきり出てる丸い顔)

保夫

丸い鼻に愛嬌あつて人氣者

志重

裏切りを又も赦してお多福面

志重

(お多福を自認裏切りまた赦し)

志重

老夫婦の顔にはほほは笑ましくなるのは私だ

志重

けでしょうか。

志重

顔揃う夕食を待つ老夫婦

喜園

振り返り顔見つめ合う夫婦坂

一耕

二人になりやと自分の顔になる 坂田しず子

一耕

(二人になり自分等の顔とり戻す)

一耕

穏やかな顔でうれい老い二人

美恵子

(老い二人だんだん豊かな顔になり)

美恵子

年寄りの顔にはいろいろ盛り込まれて、

はる子

老斑にカラー調整少しする

はる子

野心捨て顔もやさしさ取戻す

三千子

年輪と思えばいいらしい顔の皺

円女

アツプした顔に隠せぬ歳があり

金吾

不器量を齢がカバーして呉れて

トキ

(齢という皺が人間まるくする)

トキ

一と呼吸遅れとほけた老いの顔 坂田しず子

喜園

顔の皺にも母の苦勞が偲ばれる

喜園

がむしやらに生きた顔あり深い皺

遊峰

耐えて来たらしい顔して回り椅子

照子

(耐えて来た男の顔の深い皺)

照子

無表情にさせて孤老の佗住まい

千鶴子

浄土ではこんな顔なり日向はこ

章久

鏡の中亡父に似ている顔となる

金吾

そして人間最後の願いとして、

金吾

重吉の執念本懐デスマスク

明吉

(重吉の執念満足そうデスマスク)

明吉

修業して死に顔を美しくする

トキ

花で埋める顔に頬紅つけてあげ

喜与志

とあれおふくろの顔は何かにつけて思い

喜与志

出されるものとして

喜与志

顔だちが母に似ていて気を許す

三千子

母と娘の顔の黒子も同じ位置

三千子

(顔の黒子もはつきり親と娘の絆)

三千子

化粧せぬ母にエプロンよく似合い

みね子

底辺を歩く素顔の束ね髪

八重子

ホステスの素顔の裏に母を見る

みね子

ホステスも帰れば母の顔となり

みね子

そして親孝行の真似事をしても

勝美

顔見せに帰っただけの親孝行

勝美

(親孝行の心算で顔を見せに来る)

嫁いだ娘がちよっぴり客の顔で来る

(嫁いだ娘が今日はお客の顔で来る)

(好物を送って浮ぶ母の顔)

(見合いの席娘の母親見るゆとり)

みちのくで見付けた昔のははの顔

老いて子に従う様な顔でなし

ここで人間でない顔も一寸、

五百羅漢母によく似た顔に会い

五百羅漢あの人も居るこの人も

(一と癖ある顔もまじっている羅漢)

羅漢像五百の顔が畏まり

羅漢さま五百の顔の温かさ

(春の陽に羅漢の顔の影まるく)

明治雛瓜実顔が喜ばれ

(よき時代お雛様ささるい顔)

狙の秋刀魚の顔をじっと見る

躰いた石まで憎い顔に見え

仁王さんどこか似ている馬場の顔

猫も又器量よいのが先に売れ

猫が出たのでベットの句を少し

顔見れば子猫甘えて寄って来る

(子猫も甘える顔を知っている)

まだ眠い顔つれて来る朝の犬

(眠い顔犬に散歩をせがまれる)

又こんな顔もありました。

虫の好かぬ人が似ているモンタージュ

モンタージュ薄い記憶にすがりつき

遊光

喜代子

由梨

サワ子

章久

遊光

和子

露芳

晏

正之

すみれ

一郎

善太郎

みね

(モンタージュ薄い記憶で描く似顔)

懸命な顔が崩れて女子マラソン 向井しづ子

女子マラソン世界の強豪顔合わす タネ

(インタビュへ女子マラソンのいい笑顔)

あの真由美顔こわばらせ記者の前 一耕

運命に押し流されて真由美さん 向井しづ子

(運命に流され真由美眼を伏せて)

男の顔はいろいろの所で借りられて

会場に重みをつける顔集め

お歴々顔を揃えて初ゴルフ

(ゴルフ場新設 名士の顔が借りられる)

顔つなぎまめな市長の盆踊り

仲裁へあなたの顔が要ると言う

顔つなぎのそのそと行く義理もあり

休日に顔貸すことが多過ぎる

(男五十顔貸すことが多過ぎて)

だがこんな顔はいやですわね

顔は人 心は獣で生きている

顔役が義理人情の仮面つけ

(義理人情の仮面でボスは顔を出し)

でもこんな人達もいるのです。

地上げ屋にや泣き顔見せぬ長屋連

(住民パワームう泣き顔は見せませぬ)

ともあれ常連や仲間の顔は楽しいもので、

お馴染の顔が浮いてる湯屋仲間

飲み仲間嬉しい顔でついて行く

顔馴染いつもの店で又一杯

(駄法螺吹く顔が並んだ縄のれん)

よく食べる顔が並んだラーメン屋

(よく食べるホステスの顔たこ焼屋)

では最後はもうもろの顔を

この笑顔明日も会えるという自信

(明日も又会おうよ笑顔へタ焼ける)

ここだけの話満面笑みたたえ

(ここだけの話とちよっぴり笑う顔)

毛筆の賀状にそれぞれ顔がある

通動と普段着別な顔があり

素晴らしい笑顔の嫁で家ぬくく

気休めは心と別な顔で言い

日向ぼこ弛んだ顔が硝子戸に

バーゲンを漁るママさん別な顔

色々な顔ヘンリッターはいチーズ

浦島のその後の顔を見たい亀

幽玄の中妖しく能面恋に泣く

ポニーテール素顔に揺れる春の風

飾らない笑顔でとうに負けている

答弁を濁して総理の渋い顔

電話口悟られそうな涙顔

冬の空恋を知らない顔をする

日が暮れてビエロは父の顔になる

愛憎を越えようと木偶の顔になる

これで終りますが、顔にはかり拘り過ぎて

視野が狭過ぎて残念だったように思います。

題「走る」

3月10日締切(5月号発表)

ハガキに5句以内

宛先 〒598 泉佐野市中庄一〇八一九九

阿 萬 萬 的

遊ぶ

福浦勝晴選

遊ぶこと知らぬ男でうとまれる
 ままことのおしゃべりババとママを真似
 大阪文化遊びの中にうかがわれ
 ワープロに遊んでもらう春こたつ
 ママを待つ砂場でひとりたそがれる
 パソコンと遊んで孤独な子に育ち
 連休で遊び疲れ空財布
 釣りに行く朝は黙って起きてくる
 菜の花が浮気な蝶に遊ばれる
 外孫も来て独楽はしゃぐ松の内
 夜遊びが過ぎて気弱に戸をたたき
 隠れんぼ鬼が泣き出す日暮れどき
 お元氣でおそびですかと皮肉られ
 外遊で世界の知識膚で知り
 遊びかた知らぬ親父のなっぱ服
 無記名で少し遊んだアンケート
 鬼の子と一緒に遊ぶ森の闇
 遊びではないと気付いてから慌て
 夜遊びの味を覚えた伝書鳩
 母と子が無邪気に遊ぶ糸電話
 柵の中のウサギに餌をやる遊び
 いい咽喉へ遊んだ昔冷やかされ

規不風 曉明 勝芳 正美 通彦 重人 杏村 朴竜 恭昌 章久 玉恵 旭恒 山久 京子 代仕男 白漢子 清云児 保夫 繁男

お遊びが本気になった春の馬車
 遊ぶ人も泣く人もある雪月花
 若いころ遊んだ人とすぐわかる
 自分史に遊んだことは書いてない
 鍵っ子が遊び疲れた冬の部屋
 若い時遊んだくせがまだ抜けず
 ハンドルの遊びに慣れた腕さばき
 ロボットもノルマこなせば遊びたい
 遊ぶことも均等法で飲み歩き
 コンバクト遊ぶ女の早春譜
 遊ぶぜ二はしくてピエロになる男
 人妻と遊ぶ泥舟沈みこる男
 メルヘンに遊ぶ妙なるオルゴール
 遊ぶのも仕事のうちとガムを噛み
 損をしてあれが遊びかパチンコ屋
 住

元江 倫子 素身郎 弘明 柳五郎 多賀子 喜代 洛醉 雀踊子 雄々 優 白光子 本蔭棒 典子 正敏 米朝 白峰 奈美子 晏 高明 三枝子

肌

林 瑞枝選

勝名乗り力士の肌に汗が浮く
 北壁と呼ぶ山肌に魅せられる
 清貧へ肌をよせ合う吹溜り
 稽古量自信がついた肌の艶
 二代目は肌が合わない学究徒
 双肌に母の苦勞の灸の痕
 子守唄きこえてくるよ母の肌
 皺肌も赤銅色の日があつた
 飽食の心は飢えて肌寒い
 磨き丸太乙女の肌を想わせる
 みちのくの乙女の肌は雪肌で
 肌色の違いも一つ和を祈る
 丸顔の野仏の肌温さ持つ
 湯上りの素肌が好きと言う鏡
 赤ちゃんの肌こぼれそに抱いてゆき
 荒れた肌伴せうすい人と知る
 彫刻の美女は木目の肌を見せ
 紫の似合う肌小さい手で探る孤児
 正月の南で焼いたギヤルの肌
 肌艶が戻り退院日も間近
 小錦の肌はパワーではち切れる

白漢子 弘朗 悠泉 重人 通彦 美津枝 喜与志 宵明 勝美 寿美礼 寿恵子 ちよ 風云児 どんたく たす子 螢 高夫 由紀子 三倉 代仕男 米朝

的

永倉僕川選

哺乳びんスキンシップを遠くする
最良の肌は白無垢着て巢立つ
汐のどか海女も乳児を肌を抱き
姿見に余熱を映す若い肌
酌み交わす酒のまろさよ肌が合う
老斑も生きてる証しわたしは符
水はじく肌をまぶしく撮りつづけ
あてにせぬ人が一肌脱いでくれ
浅黒い肌に女の海がある
裸婦の絵の肌がまぶしくなる茶房
ミナト神戸に住んで陽気な黒い肌
名曲の命を肌を受けとめる
マネキンの肌にも四季の血がかよう
肌色のちがいを五輪の環でつなぎ
自画像に今日も描き足す老いのしみ

佳

どん底の風には強い肌で生き
みごもりて艶増す肌を誇らねば
山肌が荒れるいつかは裁かれる
肌を刺すしぶきの中で神にあう
青い目の肌が画廊の壁にある

人

肌のいろ洩らすと消える雪女郎

地

古伊万里が生きてる肌が息吹いてる

天

此処はふるさとまだ人肌の風が吹く

軸

湯けむりの肌から匂う今日の倅

注目の的の背後で動く影
のはずれな事ばかり言う父が好き
一の矢は少し外して打診する
的を射る話に胸をえぐられる
クラス会羨望の的一人減り
のはずす途端に鬼が顔を出す
一言が過ぎて恨みの的になる
的に矢を射るのも外すのも親友
老いて尚羨望の的夢を追う
的だけを凝視無心に矢を放つ
出しやばりが過ぎて左遷の的にされ
特売の目玉を的に市場籠
ねらわれる的が一つもない強み
農政の歪みへの的が絞れない
的を射た答え隅から母が出す

佳

標的を持たない毬がよく弾む
長距離の電話短かく的を射る
目的のない風船で罪がない
矢がのへ届かぬ弓を持たされる
お人好し陰で非難の的にされ

人

的になる噂は軽い風になる

地

自信の矢決して的外さない

天

標的へどうも眼鏡の度が合わぬ

軸

度胸よく的へ心の矢を放つ

柳界展望

集録一敏・武庫坊

ある

いずも賞 奥田勝子

美しい未練へ高く手を

振って

同友大賞 岩田幸栄

子のために振って破れた

旗になる

同友賞

岸 桂子

子を捨てる母に乳房は

ないだらうか

★毎号の表紙を飾っていた

だいている直原玉青先生は

この度、社団法人日本南画

院理事長に就任されました。

★時の川柳社の第十九回・

東洋樹賞は、札幌川柳社主

幹齊藤大雄氏に決定、贈呈

川柳大会は5月8日(日)神戸

市立福祉センター婦人会館

で開催の予定

★「湖山駅待合室川柳」に

「シャミネ鳥取」という会

社がスポンサーの一頁に加

わり、誌面もB5判4頁(第

8号)になっている。

★「川柳塔まつえ」一月号

によると、柳楽鶴丸氏(本

社理事)が、還暦・銀婚・

退職・俳画歴10年、川柳歴

35年を期して、句画集を発

刊予定

★「川柳ささやま」一月号

裏表紙は「川柳界」新春句

会「川柳わかやま」一月句

会それぞれの出席者の「寄

せ書き」で飾られている。

★むらくも川柳会は、一月

十五日、堀江正朗氏喜寿祝

賀新春句会を行った。

★京都塔の会は、会誌の表

紙絵を、一月号から会長の

松川杜氏の俳画で飾られ

ている。

★ふあうすと賞発表大会

日時 昭和63年4月24日(日)

午前11時から

場所 兵庫県福祉センター

(神戸市中央区坂口通2丁

目1の18)

宿題「揺れる」「粒」

「戯れ」「潮どき」「鞭」

「根」「王様」「大地」

出句締切 正午

会費 千五百円

▽同人・誌友消息△

★奥谷弘朗氏(倉吉市・参

事)は、毎月、北条中央公

民館の川柳教室で指導して

おられる。

★草刈墮駄氏(西宮市・同

人)三月二十五日六時十七

分逝去。 釋 弘明

通夜に橘高薫風副主幹、

三月二十七日の告別式には

黒川紫香副主幹のほか、西

宮北口句会柳友多数が参列

お見送りをした。

★市場没食子氏(大阪市・

同人)三月二日午前三時老

衰のため逝去。八十八歳

同三日、自宅で告別式が行

われ、本社から西尾菜主幹、

黒川紫香、橘高薫風副主幹

阿萬萬的、大坂形水、高杉

鬼遊、森下愛論の各氏が参

列した。

★東野大八氏(美濃加茂市

・本社相談役)は、「きた

ぐに」誌一月号のきたぐに

秀吟抄に執筆。

★野村大茂津氏(和歌山市

・本社副理事長)は、同じ

たぐに秀吟抄に執筆。

★塩満敏氏(羽曳野市・常

任理事)は、二月二十七日

大阪市立労働会館で開催さ

れた「川柳入門教室」の指

導を担当。

★板尾岳人氏(富田林市・

常任理事) 3月22・25日、

河内長野市千代田公民館で

開催の川柳教室の講師を担

当。

★木山遠二氏(笠岡市・同

人)三月四日逝去。

★森下愛論氏(東大阪市・

同人)夫人が三月六日逝去

告別式が八日行われた。

★信本博子氏(広島県・同

人)夫君が三月一日逝去。

★紀市郁栄氏(西宮市・誌

友)三月三日逝去。

江口明光氏(豊中市)より

金一封拝受いたしました

川柳塔社

▽お便り△

★藤井明朗氏（島根県・参事）

14日（木）に予定しています。桜も満開と思います。

★黒川紫香先生を迎え、恒例のむらくも観桜句会を4月

★岡川洋々氏（鳥取市・理事）
5月15日（日）小林由多香さ

新 同 人 紹 介

土 橋 はるお
— 螢・洋々・由多香・紫香推薦

乾 喜与志
— 螢・洋々・由多香・紫香推薦

津 村 八重子
— 螢・洋々・由多香・紫香推薦

田 村 きみ子
— 螢・洋々・由多香・紫香推薦

んの句集発刊を鳥取で行います。またまたお世話になります。よろしくお願いします。

★堀江芳子氏（島根県・参事）

先日、川口弘生先生の遺句集を奥様から拝受。尼先生の句碑建立の際、正朗の手を引いていただいたり、優しく話しかけていただいたことなど尽きない思い出にひたっています。

★岩切康子氏（熊本県）

熊本城の梅は満開というのに、私の庭の梅はやつと一つ二つ咲きはじめました。春はそこまで来ているのに阿蘇山は雪です。

★直原七面山氏（久米南町・参事）

体の具合が勝れず、何時寝込んでしまうかも分りませんので、三カ月分の作品をお送りします。

★工藤甲吉氏（青森県・参事）

連日雪かたずけに追われ、老骨の身にこたえ宿命といええ天も怨めしくなります。

大 会 柳 川 の 春 崎 尼

と き 五月一日（日）・11時半開場

と ころ サンシビック尼崎 三階大会議室

（阪神電鉄尼崎駅から南西徒歩5分）

お 話 去来川巨城・黒川 紫香

題と選者（各題2句）

「池」 尾畑 晴代選

「波」 坂本須磨代選

「紙」 春城 年代選

「矢」 小出 智子選

「藪」 北浦 牧郎選

「咳」 奥田 白虎選

「巢」 伊東 静夢選

会 費 六〇〇円（発表句報呈）

主 催 尼崎川柳同好会

日 川 協 大 会 参 加 ツ アー

日 程 六月十日朝、新大阪発—東京—銚子を経て大吠崎泊—十一日は香取—潮来を観光、千葉で前夜祭出席（泊）—十二日は大会に参加、閉会後、東京—新大阪

約六万円（交通・宿泊・大会参加費）

申 込 参加希望者は四月十日までに内金三万円を添え、黒川紫香または田中正坊へ。

川 柳 塔 社

本社 三月句会

三月七日(月) 午後六時
メンスファツションセンター

さすがお水取りの季節、冷い風が吹く。

今月のおはなしは昨年三月から一年振り登場板尾岳人氏。話し方についてふだん店でラジオから話題の受入れと話術を学ぶ、小松園さんの幅広い知識も仕事場のラジオからだったということ、次いで琵琶湖の水資源、放流のコントロールから百貨店婦人便所の節水にからむ裏話と氏独特の探究心から集めたお話しつつものざわめきもなく謹聴。

お知らせは本年一月七日に第一回愛染帖賞を受賞された木山遠二氏(笠岡市)と森下愛論氏(東大阪市)夫人の訃報が伝えられた。初出席は山本礫氏(京都市) 森 茜氏(和歌山市)のお二人。

今月の月間賞は阿萬萬氏が獲得。

(進行―天笑)(受付―みつ子・いわゑ)

(記録―射月芳・敏・年代)

出席者―諷云児・芳子・白溪子・杜的・かなめ・小路・敏・はつ絵・いわゑ・みつ子・紫香・佳秋・武庫坊・年代・寿美子・重人・眉水・女・水客・狸村・作二郎・太茂津・しげお・幸・美智子・勝美・柳影・白峰・満津子・典子・達子・柳宏子・礫・千秀・朱夏・三千子・茜・薫風・天笑・月子・冬葉・英子・鬼遊・白兎・章久・あいき・三男・規不風・悦郎・山久・文秋・英壬子・憲太郎・頂留子・柳伸・柳右子・正坊・求芽・進・おさむ・美幸・萬的・度・射月芳・東雲・外吉・吸江・庸佑・昭子・美代子・智子・雀踊子・花村・寿美・岳人・寿子・元維・藤子・美房

席題「事故」

河内天笑選

事故現場やつと信号つきました 藤子
事故多発それでもやはり乗るバイク 藤子
娘の人生ひっくり返す事故一つ 月子
事故ひとつ一家を地獄につき落す 射月芳
娘に車事故の心配ひつつ増え 庸佑
事故多発地点に春が咲いている 作二郎
大事故のニュースへふざけたコマシャル 求芽
引きずられながら事故車が戻る車庫 紫香
新しい花が絶えない事故のあと 昭子
そつと手を合わせる事故のものさ 山久
棄てられた女も事故と思つて 美幸
事故忘れ得ず鉄橋の下に住む 水客

自慢する無事故に隙がきつとある
人身事故とならずにすんで胸をなで
街角の事故を珈琲飲みながら
片方の靴がかなしい事故現場
凄惨な事故に我が子を置いてみる
はねられて次の車にまた轢かれ
ハンドルに馴れて来たのが事故をする
事故のあと死んだ振りする癖がつき
人情をからめて迫る事故係
もう事故の話はしない松葉杖
人ごとと思えぬ事故を見てしまい
無事故無違反わたりしベードライバー
幸運は事故の列車に乗り遅れ
運命を大きく変えたネジひとつ
加害者に同情したい事故現場
善人の姿と見えぬ事故現場
遊び場を訴えている目撃者
帰らない子へビーボの鳴る深夜
夜遊びの好きな狸で事故にあふ
飛行機事故わたりが遭うと思わない
事故として片付けてゆく都市砂漠
事故続き少し気弱になつてくる
事もあらうにお地藏さんをハネました
死の灰が降つてからでは遅すぎる
あの事故を忘れたように土筆んは
跳ねられた子が泣いている生きざ
抜かれたらすぐ抜き返す悪い癖
千秀
三千子
作二郎
重人
眉水
昭子
規不風
おさむ
しげお
山久
三男
庸佑
朱夏
冬葉
芳子
女
藤子
芳子
月子
外吉
朱夏
杜的
東雲
天笑

席題「バッジ」

山本

磔選

明日から夫の胸にないバッジ
 乱闘へ議員バッジは取りなさい
 バッジ外してバチンコ台とにらみ合う
 定年のバッジをはす走馬灯
 社長と秘書だけの会社にもあるバッジ
 ゴシップを気にしていない金バッジ
 ベレー帽大事なバッジひとつある
 缶ビール趣味のバッジがよく笑い
 他校のバッジを着けてタバコを吸っている
 趣味のバッジ私と一緒に生きている
 二次会はバッジ外して従いてゆく
 バッジもう大学生の顔にする
 妻や子の頼りにされているバッジ
 社運かけたバッジが早い朝を出る
 たこ焼を値切ったことのないバッジ
 一流のバッジでツケがたんとある
 金バッジお忍びという言葉がある
 社のバッジつげて言葉を変える
 友ありて校章生涯手離さぬ
 校章をかくして入る喫茶店
 投票率たった二割の金バッジ
 何のバッジか知らんがお辞儀しておこう
 社のバッジ襟におもたい新社員
 社員章返上天下の素浪人
 君達に未来がかかる社のバッジ

重人 萬的 正坊 重人 鬼遊 元紀 典子 紫香 月子 文秋 おさむ 作二郎 天笑 水客 白溪子 典子 達子 橋本英子 芳子 小路 正坊 憲太郎

天王寺辺りのバッジは顔が効く
 父ちゃんのバッジは勲章なのだろう
 タイミング掴んでバッジ立ち上る
 バッジ外して阿部牧郎を読んでいる
 駅裏の飲み屋でつけの効くバッジ
 社のバッジ小さな踏絵とも見える
 眼に見えぬ鎖がついているバッジ
 自己主張はつきりもっているバッジ
 昨日迄のバッジがとれた安定所
 焼香順待ってる寒いバッジして
 無位無冠バッジはずしたフルムーン
 退き際をきれいに決めたバッジです
 プライドのバッジ外して二度の職
 エリートバッジ酸欠訴える
 中小企業の誇りを持っているバッジ

兼題「省略」

河内月子選

岳人 眉水 おさむ 作二郎 鬼遊 薫風 智子 智子 佳秋 作二郎 柳伸 寿美子 いわゑ いわゑ 磔選 荒介 芳子 白峰 典子 かなめ 小路 狸村 天笑 白峰 柳伸

省略が出来ないたちで瘦せている
 焼芋で済ました昼をバチンコ屋
 肝心なところが省略されている
 肝心なところが省略バスの旅
 前置きは省いて肩を叩き合う
 省略をするから話もつれ出す
 省略で嫁より先に孫が出来
 朝刊の見出し拾って靴をはく
 ハネムーンツアーは省略せぬように
 肝心な事は省略して騙す
 祝電の束だけ見せて飛ばされる
 省略をされてひとりの缶ビール
 おしゃべりは苦手省略しておこう
 省略をしただけさつちりツケがくる
 省略を利かせて返事眼で笑う
 神主も親も省略山で挙げ
 カネ送れだけで省略する息子
 許すとは省いてあるが温い文
 省略が欲しい男のおしゃべりに
 以下省略でいつも斬って捨てられる
 過去すべて省略します二度の職
 以下同文などといわれてもの足りず
 省略は一切無しの子沢山
 一病息災省けるものは皆はよく
 わたしには以下省略のほうがよい
 おふくろの愚痴は省略して聞こう
 嫌なことみな省略をして生きる

みつ子 柳右子 美智子 勝美 おさむ 庸佑 満津子 度 天笑 射月芳 東雲 いわゑ 藤子 重人 水客 天笑 外吉 佳秋 作二郎 磔選 佳秋 外吉 花村 水客 智子 智子 智子

バイテクに省略されるパパとママ
省略を許して姑も少し老い
神さまの省略はくのみ鼻立ち
省略の効いた別れを女から
省略がどすんと効いてからの酔い

耕花
典子
藤子
作二
月子

兼題「飴」

堀端三男選

黄金の飴が議員をしくじらせ
谷内六郎の絵は水飴を食べている
骨のある飴とも知らず噛んでいる
昨日と同じ飴でも蟻は群れてくる
花の山迷子に持たす飴二本
飴とムチ酒酌ぎに来て動かない
しゃぶらせた飴がそろそろ効く頃だ
お多福飴あれが初恋だったのか
飴色になるまで妻が妬いてくれ
慰問袋の飴から私にあるドラマ
頬張った飴からくらし落けてゆく
團長の引出しいつも飴がある
ドロップの好きな娘と行く小旅行
千歳飴この子戦にやりません
舐めさせた飴が寝返り打ってくる
タベラシヌデと書かれてそば杖くた飴
飴の味からしの味や有夫恋
しあわせな飴が美人になめられる
飴舐めて冬の焼香順を待つ
一粒の飴から和むバスツアー

頂留子
元紀
妻子
緑良
水客
芳子
東雲
規不風
白兎
美幸
福本英子
正坊
千秀
寿美
敏
作二
小林英子

芋飴のむかし咄を煮詰めよう
手作りの飴に後継者がいない
のど飴をなめて言い訳考える
のし飴が誰にも負けぬ肩車
飴玉と間接税の抱き合わせ
お多福の飴からのぞく亡母の過去
キヤラメルのおまけに夢が盛つてある
檜山へ飴玉ぐらいは持つてこよう
べっこう飴昔むかしが透けてくる
オタヤンの飴を値切る戎さん
禁煙の飴がたばこへ手が伸びる
キヤラメルエンゼルマークにある郷愁
五色飴母のない子の子守唄
風はまだ冷たいのだ飴子にもたす
切られても次のおたやん笑う飴
期待はずれの返事へ飴を噛み砕く
均等法男も飴を持って出る
金太郎飴が祭り囃子を連れてくる
飴舐めた舌なめらかに裏切りぬ
分け合つて昔ばなしの好きな飴
出征の兄と眺めた飴細工

荒介
重人
美智子
福本英子
美緒
柳伸
冬葉
杜的
芳子
雀踊子
佳秋
朱夏
典子
柳影
眉水
幸

兼題「余裕」

阿萬萬的選

天声人語読んだ余裕の靴を履く
舶来の靴がとからへりはじめ
余裕ないふたりをみてる冬の月
マル優の余裕に少し嘘がある

芳子
度
月子
元紀

大根が朝から煮えている余裕
偏差値の余裕を見せて声がわり
聞き流す余裕も出来た回り椅子
貫禄はないけど余裕が少しある
余裕ちと出来て来ました死にました
もつ一人産もつか夫婦の内緒ごと
釣りに行く余裕はすぐにこしらえる
人相までこんなに変わってきた余裕
さりげなく余裕みせてるイチゴ皿
西海岸めざす余裕の英会話
花嫁の方が余裕のインタビュ
ひやかしてセカンドハウス見る余裕
まだ肥える余裕の皺が邪魔になる
妻の余裕花やで仏の花を買つ
観梅の余裕も出来た老夫婦
余裕あるから脱税を考える
余裕はないが参加するボランティア
読み切った余裕で開ける缶ビール
余裕など人さし指にない筈だ
母さんは余裕を見せて太つてる
余裕ない男せかせか歩いている
余裕出てきたのか耳が柔かい
さりげなく余裕を見せる老いの指
付添が余裕をくれる足ならし
かたつむり余裕の角をもちあげる
円空仏余裕の笑みが温かい
余裕もち吾れ関せずと猫が居る

藤子
おさむ
諷云児
磯

藤子
かなめ
作二
進

余裕ある暮しへ月が昇りきる

隣より少しゆるめの縄を縛う

影武者に余裕がありすぎて困る

花活けて男の嘘を聞く余裕

言い負けておく余裕から春になる

転び方上手に考えとく余裕

ふところが深く喧嘩にもならず

春風のゆとり野仏笑み給う

やつと余裕出来た頃から呆けはじめ

菊つくる余裕他人に羨まれ

兼題「勲章」

黒川紫香選

勲章を貰うと肩の荷重くなる

ちいさくなつた乳房は母の勲章で

勲章の箱を大事にして開けぬ

勲章の値打ちわからず孫がもち

勲章を妻に捧げるフルムーン

勲章がひとり歩きをして困る

勲章の意義を亡父に問いつけ

勲章のたつた一つもない履歴

勲八の名督を抱いている夜誓

どの星にしようか女の勲章に

勲章が重くていつもそりかえり

退職金夫の勲章かも知れぬ

勲章など縁なき夫の靴磨く

勲章はないが胸には弾丸のあと

水客

千代

磔

いわゑ

幸

太茂津

天笑

みつ子

小路

萬的

勲章の重さにこたわらない風

ちっばけな勲章でいい母の掌に

勲章の好きな男の幼児性

勲章と並んで内助写される

世が世なら後生大事にした勲章

勲八等の勲章抱いて母老いる

ひたすらの汗へ勲章美しい

肋骨に勲八等をぶら下げる

好きなこととして勲章貰う父

勲章をひとつ貰った兵の墓

勲章の遺影が掲げてある旧家

戴いた勲章やたらと見せたがり

大ものでないから勲章がほしい

勲章が日向ぼっこをしています

金鶏勲章父は今でも磨いてる

釜ヶ崎で勲章吊った人と逢う

勲章をつけてお馬に乗りたがる

文化勲章順番などと思つてず

母さんの勲章すみれがよく似合う

勲章の話はしない松葉杖

春の坂春の勲章売っている

自画像へ派手な勲章つけておく

勲章が畏の一つになっている

勲六等ぐらいは父も持っている

文化勲章詩人むつりしています

勲章があるから父の名が残る

緑良

狸村

年代

白溪子

冬葉

美幸

美智子

雀踊子

昭子

芳子

白溪子

吸江

文秋

荒介

みつ子

三男

射月芳

水客

みつ子

しげお

作二郎

千秀

元紀

敏

萬的

紫香

第十九回

東洋樹川柳賞 贈呈川柳大会

とき 昭和六十三年五月八日(日)

十時三十分開場

場所 神戸市立福祉センター五階

(湊川神社西門前)

会費 一、五〇〇円(記念品・昼食・発表誌呈)

兼題「姿」

「酔つ」

「凡」

「遠い」

「声」

「深い」

「天」

各題二句締切十二時

特別課題

「食つ」

講演

宴会 三、〇〇〇円(当日受付)

主催 時の川柳社

八木 千代選

小島 蘭幸選

奥山 晴生選

長谷川紫光選

山本 哲郎選

梶川雄次郎選

小松原爽介選

和田 光代選

斎藤 大雄



締切毎月25日。必ず原稿用紙使用のこと。
作品は雅号も含めて20字まで。

担当・玉置重人

西宮北口川柳会

松本 一郎報

義理の世が恐いチョコレートが恐い
玩具屋の奥から軍靴の音がする
四面楚歌二月の風を疑わず
久しぶり休みなさいと雨が降る
辛口の御神酒神主さんが好き
可能なら明るい方の道を選ぶ
結び目にそとはさんだ良い返事
結び目の緩急妻が握ってる
婚約へ酒量の事も言い添える
銀婚へ婚約指輪がちびてくる
叱られて遠廻りする万歩計
ぬいぐるみだいて寝る児のどんな夢
優勝力士蔭に美人の婚約者
おもちゃ箱お伽の国からメッセージ
わん白がきつちり入れるおもちゃ箱
の入試心電図さえ乱れだす
反対をするのが好きなブラカード
肩書がとれて気楽な竹トシボ
さしさわり無い人だから打明ける
弟の嫁が優しくして呉れる

武庫坊 幸
嘉矩 幸
保蔵 幸
しげお 幸
よし津 幸
よ志子 幸
三男 幸
萬朝 幸
米朝 幸
紀雄 幸
きよ子 幸
千世子 幸
英子 幸
静子 幸
江美 幸
青珠 幸
諷云児 幸
花代子 幸
笑女 幸

いつの日も明るい妻ですくわれる
眼の中へ入れたら痛い孫がくる
喪主にしては少々し明るすぎないか
地下街の明るさについて怖くなる
婚約はただ財産に惚れただけ
忍従の言葉で結ぶ母の辞書
婚約をしました虹を見た時に
明るさが取柄し寸着ています
あいさつにチラホラまじる梅だより
婚約を喜ぶ母とくさす父
おもちゃ屋の前で動かぬ孫の智恵
豆投げてやりたい鬼が内に居る
バレンタイン大人の恋がほろ苦い
音の出る玩具の方をねだられる
ダンスでも足りぬまき餅のチョコレート
婚約をしてから毒舌やめにする
明るい男が生き残るとは限らない
男結びが野麦峠を越えてくる
明るい町に出ると女は手を放し
ラストシーンでは明るい量の上がよい
振り向けば明るい妻がそばにいる
婚約に迷う男女の別が道
明るい声でとつても下手な嘘をいう
結び目を締めなおして着る妻のいす
ブライドをグッと抑えて婚約す
美容院娘と並ぶ久しぶり
只今がさわやかですよ足の音
好きなタイプやつぱり明るい人がいい
同じ世に住んで同じでないドラマ
一言が腹の根雪となつて冬
南南東恵方に向かい手を合わす

いねえ 伊三郎
年子 伊三郎
みち子 伊三郎
はつ絵 伊三郎
芳子 伊三郎
杜的 伊三郎
正坊 伊三郎
美智子 伊三郎
白溪子 伊三郎
鬼遊 伊三郎
正一 伊三郎
作二 伊三郎
水声 伊三郎
和友 伊三郎
定人 伊三郎
伊升 伊三郎
太茂津 伊三郎
勝紀 伊三郎
猿脊 伊三郎
みつ子 伊三郎
市雄 伊三郎
俊子 伊三郎
御前 伊三郎
六郎太 伊三郎

金魚鉢去年の水で春を待ち
医者の前だまつて座れば誤診され
着飾って女は嘘を吐き易し
苦勞した老妻にやさしく妥協する
果立つ春へ春の風はまだ優し
万一の保険へ夫婦歩み寄り
疑えばポケットの手に武器がある
食後とは言わずメロン切りましょか
防寒帽鼻の頭が赤い冬
福豆の届かぬ所に鬼が居る
片言を聞き分け大も大人びる
婚約と同時に産もつ間近
公園の水銀灯にたじろぎぬ
里帰りお客のようでないよつな
負うた子に首の腫れものさわられる
花明り花の未練がつきまとう
方円の水で女の底力
大地踏む太陽の恵み夢青く
仁王さん三十五センチのわらじはく
幻燈を雨戸の穴で見た昔
婚約発表故郷の父母は土いじる
高槻川柳サークル卯の花 河瀬芳子報
自由ヶ丘名前が決め手買いました
美人のそばに一つ空いてる自由席
振り込みで自由のきかぬ軍資金
私だつてノラになりたい時がある
優しすぎる愛のこんな不自由な
花道を下りると自由待っている
自由席夫婦で座る場所がない
逃げた鳥森の自由に馴れたらうか
自由席でロマンに出合うかも知れぬ

勝美 勝美
文夫 文夫
芳仙 芳仙
雀踊子 雀踊子
三枝子 三枝子
曲ん手 曲ん手
保 保
博子 博子
ノブ 博子
森生 博子
千秀 博子
一進 博子
荒介 博子
茂坊 博子
光代 博子
春子 博子
紫春 博子
善太郎 博子
万亀子 博子
紫香 博子
幸枝 博子
陽露子 博子
草木 博子
里子 博子
さと美 博子
諷云児 博子
曲ん手 博子
一年代 博子

クラリネット吹いて場末をビエロ行く
一日を長生さします閏年

実印を預け一日長い事

孫に吹く大正生れのハーモニカ

笑うても泣いても孫はすぐ抱かれ

大根焚き湯気吹く顔も写される

尼崎おはま句会

これ位で節目が欲しい孫十人

根深節歌いながら惹きささむ

さりげない仕草苦節が添えてある

中国の歴史の節にある戦

礼節のうるさい祖母がまだ達者

罪つくる節穴一つ堀にある

空港で別れた女の身を案じ

空港は西も東も戦です

七色の光に映える晴れ舞台

ピッカピカ一年生は皆光り

朝市で老婆の光る汗に会う

出ますけどもとの娘にしておくれ

強がりのあとは涙になるパターン

賭事に強い男で職が無い

手習いを始めて娘らしくなり

寒風につい思わずも走らされ

知らぬ間に落葉散らして冬木立

暖冬で泣きだしそうな雪ダルマ

父母の涙タラップ踏んでから

古墳ブーム御先祖様も落着けぬ

川柳大阪

歩調トレッツ新人類へ怒鳴る夢

生きる知恵ここは本音をひっこめる

雑学の靴の隅に詰めた欲

一 郎

美智子

和 友

白溪子

萬 的

佳秋報

夢之助

歌子

武庫坊

紫 香

定 人

寅之助

た か

義 嗣

す み

佳 秋

保 蔵

十四郎

江 美

向 西

い わ

昌 子

敏 之

貞 吉

山 下

本 蔭

重 人

洛 醉

ばやいても会長さんはまだ来ない
生き仏きつちり四季の花を貰て

百までを未だ未だ孫とぬるい風呂

嫌われているのに威張る古狸

寒さ増しお尻に根が出る掘ゴタツ

暖房の効いた座席がまず埋まり

幸不幸キャンセル待ちの搭乗券

行つてよかつた温泉のぬくもり

これから残務整理の喜寿の歳

初恋の君も老けたたり同窓会

言つてやれ思つぱかりでよう言えず

言うだけでアノ人いつも居てはらん

俺の子だキツチリ言いたい事は言う

因縁を辿つてゆけば一つの輪

鍋蓋もよい因縁と諦める

順調な身に追い風の心地良さ

円高の追い風企業を船に乗せ

我がヨット追い風待ちの長い事

ひとり言赤いワインに酔つてい

追い風に見事に乗った竹トンボ

考える時間をくれた赤信号

因縁が昔の悪とアタ箱で

両輪が少しずれてる老夫婦

赤旗は正義の旗と信じふる

駒つなぎ川柳会

きつと返す言葉の裏も十二月

追及を必ずしも言つて逃げ

一言が多い禁物置き忘れ

満期来てやつと解かれる保証印

濫発の手形必ず来る期日

敏

与呂志

雅 巢

喜 醉

三千雄

正 之

柳 弘

亮 太

鉄 心

虎 吟

あすか

凡九郎

天 平

一 介

喜 楽

鈍 泉

哲 流

笑 風

比呂志

金 太

小 路

祥 恵

頂留子

悟 郎

喜代治

新 造

勇退の椅子をけじめとして去ぬか
女には必ず通る道がある

逆探知満期を狙つてお母さん

怒らせれば必ず喋る国詠り

酒煙草避けよと無理な聴診器

けじめまだつかずか浮かぬ顔で来る

保険満期まだまだ若いレオタード

自衛隊満期の土産に職がつく

あくびは禁物で後の席をとる

酒女ドクターストップかけられる

得のあるとこに必ずつる女

明日へ発つ二人へ涙などいらぬ

あの人の前で財布を見せぬよう

他人がけじめ付けたがるから困る

敗戦の満期悲しい抑留記

停年も一つの満期にはしとく

けじめだけつけておきたい釘を打つ

母さんが泣くから禁句にして置こう

ボクソに言うとおかずが悪くなる

針箱に母のけじめが入れてある

満期解約夫婦へ旅のスケジュール

パスポート満期で入る金がある

禁物は承知末期の水がわり

先妻の美点禁句にしておこう

満期までまだ半生を急ぎ旅

定年と満期同時に訪れる

けじめつけないアクセルをぐつと踏む

父の暮けじめのように雪が降る

同情は禁物必死で点字追う

必ず帰る男にリンゴ赤くなる

お隣を通れば必ず鳴く小犬

曲 手

正 一

市 雄

章 久

甘 平

しんじ

佳 秋

眉 水

文 秋

恒 明

度 幸

美 子

律 子

冬 葉

善 信

凡九郎

翠 公

萬 的

信 治

藤 子

比沙胡

笛 生

潔

壯之助

美津枝

千代三

重 人

作 二

浩 一

雀 踊

柳 子

極楽は必ずあると信じよ

霜踏んで満期知らずの父の歟
必ずのひとこと重荷になつてくる

けじめをつけてつづがなく生きている
請求書はきつちり届く雪もよい

満期など知らず野仏立ち給つ
来るこない勘は必ず的を射る

夜ふかしは禁物遠いとこで聞く

川柳後案

井上柳五郎報

カラオケが今日も二人を燃えさせる
カラオケに上手も下手も拍手する

うさひとつカラオケ喫茶の隅にいる
ストレスを話す庵主に過去の秘話

ストレスを恵方へ向ける妻の權
ストレスの解消譜面にあった罪

ストレスを抱いて重い一人旅
弱体化の労組の牙も欠けたまま

まいるい牙何とが生きるだけでよい
手鏡の裏で妬心が牙を研ぐ

停年の磨いた牙も抜けてくる
牙のない男になる父は言い

寒がりの子を鍛えてる奴唄
寒がりの癖に薄着の伊達男

寒がりの背中に落ちた一しずく
寒がりが一会の罪な風に会つ

日蓮を欺きました(公明党
オイランに瀬戸の眺めは如何ばかり

洗脳で罪の深さを知る娘
熱湯で熱いと言わせた韓国語

アメリカのクシャミを止めに総理飛び
物忘れ思い出すからボケとらぬ

金太

章

庸佑

白兎

智子

柳宏子

柳伸

小路

玉水

美智子

義親

博友

たけ志

文平

青銅

柳五郎

草風

桃風

照路

拓治

中平

進平

九城

健一

浄美

佐加恵

金吾

秋月

鯨虎狼

吟平

人間に引つ張られてる老いた犬

倉吉川柳会

渡辺

田高の慈雨は濡れないほどに降る
田高で毛皮着て出る兎小屋

空き腹に呑んだお酒に負かされる
腹芸はお手のもんだとロン・ノボル

雑兵のお腹にうまいにぎり飯
腹のうち割って話せる嫁姑

田高の差益目菜ほどもらしい
飯を食う癖はどうにも止められぬ

隠しても貴男の癖の解る妻
歩きぐせ何より靴に知らされる

一杯が入れば唄う祖父の癖
腹の中ボチは知ってる黙ってる

世渡りになくてはならぬ癖がある
てっぺんからてっぺんからはげる家系

田高になつても菩薩おなじ顔
新の字をつけるとものがよく売れる

最新のセクス男性化粧水
腹へった犬とテレビを見ています

若水をくんで今年の火を熾す
腹芸が巧くて奴は出世した

新顔が五百羅漢の中に増え
アリガトウ無垢な明日が待っている

黒髪に引かれて結婚致します
咳ばらいしてから怒る癖がある

近く母の髪か時の過ぎる音
白い腹をしたニンゲン見たことない

母さんの癖をみーんな貰いました
私語みんな捨てて女が髪を梳く

校則という条文が髪を刈る

哲郎

哲句報

もぐら

あや子

寿満湖

碧水

松女

とめ子

柳風

秋人

秋草

よしえ

満春

幸苑

かつみ

観洋

みなと

とみお

とみお

とみお

とみお

とみお

とみお

とみお

とみお

とみお

とみお

とみお

とみお

とみお

とみお

とみお

とみお

とみお

とみお

とみお

とみお

とみお

マネキンのおなかピカピカ光つとる

三幸川柳教室

桜井

酒タバコ婦人上位の均等法

婦人会男顔負け一気飲み

婦人アナ日々の服装気をくばり

舞いおりる鶴に貴婦人見る思い

誉め過ぎて婦人蔑視とたたかれる

婦人記者取材女の目でとらえ

婦人部の要となつてはいる才女

婦人服Lコーナリーばかり増え

婦人帽ちよつと気取つた旅にする

二次会へ行かぬ予定が三次会

目で合図今夜の予定ちゃん出来

桜咲く頃にはなどと岩田帯

苦句

千秀報

邦郎

重次

辰治

澄昭

高夫

三千子

美子

由梨

正二

周香

桂香

佳句地10選 (前月号から)

田中隆二選

澄み切った大空自分が小さくなる

へそくりがまだ残つて本を閉じ

通勤に坪何千万を踏んで行く

お隣と比べるくせがまだ抜けず

草野球応援席が指図する

朝刊の音孤独から救われる

結論を急かせるように酒がくる

ほつとしたところに置いてあるみかん

割り切っているのはいつも第三者

生き方を変えてみたい日のゴミ袋

はつ絵

はつ絵

はつ絵

はつ絵

はつ絵

はつ絵

はつ絵

はつ絵

龍重
襄幸

齢ほどに見えぬ元氣なお年寄
三ヶ日すんで普段の顔になり
お年玉配る長者になった顔

むつかしい顔で読んだる漫画本
氣味わるいほどに役所の愛想よし
彫りのある顔に憧れ隆鼻術

髪型を変えても妻は同じ顔
恍惚の寝顔童女の目を宿し
丸顔も角顔もある神の業

その人の立場になつて顔を立て
僕にまで嘘をついてるあの笑顔
母の顔見れば泣きやむ赤ん坊

釣書でおかめ戎に早替り
静岡市川柳塔同好会 永倉

左遷地へ笑顔で立った友想つ
雪空へ左遷の友は消えてゆき
言いそびれ疼きが残る別れ際

地蔵さん赤い帽子が語りかけ
抱き合つて暮が下りれば突き放し
福の神今年はうちへ来ておくれ

倅の一寸先は迷い道
戦争は負けても軍歌生きている
生きて居る証し妻との口喧嘩

たわむれの風に帽子を飛ばされる
若き日のロマン未だに忘れかね
旅の宿枕変つて寝つかれず

老いはれも生きてる証し税が来る
良き医師に出逢い命を救われる
一生を楽しく生きて迷わない

進学の子を持つ親の立ち話
控え目に生きて幸せ見えてくる

トシエ

初子

道子

春子

恵子

シマ子

幸子

公子

百子

重子

僕川報

寒いのに鼻の頭へ汗をかき
口喧嘩私と貴男熱秘権
土産物買わぬつもりが買つて来る

手を出せば死んだふりする夜盗虫
若衆が取らぬ秘密のベレー帽
岸和田川柳会 植山

夢のある昔話は残したい
預かつて夜明けが長い孫の熱
七福神掛けて新年祝い膳

昇り龍あやかり今年は上り坂
ラマーズ法で初産元氣な男の児
趣味一つふやして友の輪をひろげ

甘辛が顔を並べて待つ新酒
この句がぬけるぞポストの音がよい
双羽黒三重県人の夢やぶる

添え書きにそれぞれ温みある賀状
湯気の立つ鍋を囲んだ寒の入り
ラッシュ時の入口ヒップ押しこめる

雑音を避けて私の道を行く
余りに命が軽い事件記事
内職に年季を入れた坐りだこ

暖冬に戸惑つてゐる梅の枝
一年の計を考えたのも昔
初春の酒で散らしたわだかまり

正月三日カレーの旨さ知りました
子が叛くどうせ男は孤独なり
湯けむりの中でゆつくり春の夢

いい菓子があるのに今日は誰も来ず
川柳高知 川竹

子を五人産んでひとりの米をとぐ
三ヶ日思考がねむる飲み疲れ

まつゑ

みつ

静代

三津子

僕川

武助報

狸村

楽天

通彦

みのも

ゆずる

第十二回全日本川柳大会

日時 昭和63年6月12日午前10時

会場 千葉ニューパークホテル別館

(千葉市港七―三・京葉線千葉港)

駅前

宿題第一部(事前投句5月10日締め切り)

「野心」

「花」

「酒」

「森」

「紫苑」

「志水」

「剣人」

「白井」

「花戦」

「志水」

「剣人」

「白井」

「花戦」

「志水」

「剣人」

「白井」

「花戦」

「志水」

「剣人」

「白井」

「花戦」

「志水」

「剣人」

宿題第二部(当日出句)

「ロビー」

「書」

「答」

「夜明け」

「猿田」

「寒坊」

「句数」

「第一部」

「二部共2句吐」

「千円」

「振替口座」

「大阪七」

「三五七五」

主催 日本川柳協会

足の怪我妻の多忙へ目をつぶる
 乱れ髪かき上げて見る冬的大海
 黒豆を煮つつ賀状へ走るペン
 幸せになりたい花は赤を選ぶ
 ととききも一緒に外すネックレス
 少年と犬の対話に嘘がない
 旅人を送り迎える湯の煙
 盃を手からはなさぬ話好き
 金盃の酔いとは別なコップ酒
 盃にそえた名刺の下心
 盃を持って俄に元気づき
 一生を耐える女で終りそ
 口八丁手八丁の後家がいる
 横領の顔も男に負けてない
 美容院女の夢をふくらませ

久世川柳クラブ

二宗

吟平報

雲呼べぬまま還暦の初日の出
 ハイウエー続くマイカー年の暮
 無理やりに勧めた縁談善く続き
 晩学の苦勞続けて捨てきれぬ
 物入りが続いてボーナス持つて逃げ
 無理しても作ってやりたい親心
 まだ願ひあるかと神もあきれてる
 無理しても買つてよかったマイホーム
 無理言つても子の将来を案ずれば
 その仕事無理と言われる年になり
 いつの間に無理の利かない年になり
 無理するな無理の利かない年の口
 能力に無理と知りつつ見栄を張り
 子の無理も大きくなる程値が高い
 無理をした暮らしとわかる顔の皺

竹 幸 泉 春 枝 和 広 俊 子 淳 枝 和 興 義 晃 朱 坊 功 仙 幸 童 春 風 佳 風 松 風 贊 平 秀 香 禪 心 美 恵 子 半 仙 知 代 子 虞 人 種 子 静 香 寿 楽 雅 紅 勝 山 千 代 女 保 恒

病床の無理な甘えも聞いてくれ
 嫁ぐ娘へ無理算段の荷を持たせ
 一年の無沙汰賀正の二字でわび
 落葉してしつかり芽を抱く冬木立
 水府氏の顔がほころぶ句碑飾り
 忘れてはならぬ昔の靴の音
 幸せな明日を信じて花を活け
 筆不精思を忘れた訳でなし
 加減乗除答えが出ぬ間に師走来る
 柚子の香が部屋中包む秋の暮
 夕焼けの向うに想う人がいる
 過疎の町客一人乗せバスが行く
 優しさも鋭さもある風の声
 川柳塔からつ佐志教室 浜本 義美報
 老いてなおくしゃくと生く父の杉
 定年の坂から軽い靴に替え
 古稀近く夫婦の独楽は澄んだまま
 綻びし寒紅梅に春をみし
 月今宵猫にも馳走ありにけり
 雑事みなふり捨てひと日寒の明け
 冬苅雪の間合いをまたきたり
 郷土力士勝つてお茶の間湧きに湧き
 旅プラン友の祝儀に邪魔される
 何とて口に入れたか猿の親
 あの世界でも添うとは嘘も甚だし
 老兵の脳裡に戦の修羅消えず
 打吹川柳会 江原とみお報
 花道はないが日本一の父
 俵せがまた逃げました糸が切れ
 思い出をつなぐ賀状を手に温め
 振切った言葉に悔み残してる

定 山 山 光 水 さら 吟 平 山 人 伊 久 栄 明 子 英 子 旭 正 江 山 治 幸 源 吾 一 徳 喜 久 夫 常 善 昌 一 紀 一 フユ子 万 亀 子 茂 坊 ち 美 規 仔 巡 歩 宗 光 孝 美

ふあうすと川柳社 62年度年間賞発表川柳大会

日時 昭和63年4月24日(日)11時開場
 場所 兵庫県福祉センター3階
 神戸市中央区坂口通2-1-18
 電話 078(242)4647

宿題

「揺れる」 山倉 洋子選
 「粒」 松田多恵子選
 「戯れ」 加賀美白英子選
 「潮どき」 安藤富久男選
 「鞭」 稲垣 正徳選
 「根」 平田のぼる選
 「王様」 小松原爽介選
 「大地」 藤本静港子謝選

席題

なし・各題2句・欠席投句拝辞
 締切午後1時

会費

一、五〇〇円(記念品・昼食呈)
 知事賞・市長賞ほか

主催 ふあうすと川柳社

紋付に吸わせた酒を叱るまい
 胃カメラへ保証をされた屠蘇の味
 妻の座を三三三日あけるのも謀反
 マイケルの歌は新人類の文化
 肩車父の高さをおぼえてる
 空財布師走の風が身にしみる

紫 映 雄 々 日 枝 子 雀 踊 子 梅 朗

初夢はミンクのコートでデートする
コート下年齢と共に数増える

暖冬にコートと脱いで雪を待つ
挑戦する気構えコートの衿を立て
ウインドのコートバーゲンまで待とう

福娘こぼれる笑顔福ちようだい
笑顔から若さこぼれる歯が白い
横顔は笑顔を見せぬ三面鏡

野心持つ女笑顔の仮面付け
福笹の笑顔に酔った宵戎
病人の笑顔へ一喜一憂し

たてまゑと本音の笑顔ふたつ持つ
わかあゆ川柳会
松本はるみ報

また法螺を聞くを承知でお茶を入れ
もやもやを捌いて除夜の鐘を聞く
ゆがんだままの大根捌かれぬ

大法螺の心の隅をつつかれる
法螺でなく念願かなう総理の座
子沢山母はピンチを捌ききり

餅とりの手捌き母はまだ老いず
法螺はれた時は口笛など吹こう
押売りも親も子もあり妻もあり

老いの日に抱きしめたいぞ嫁ヶ島
押売りへ立場を逆に置いてみる
川柳たけはら

森井 蒼居報
おにいてんやいふもささうれしいな
かれてないまつのばはいえがお

ストープとこたつとちがあつたかい
せつぶんはやつぱり父さんおにになる
たこ上げひっかかりそつあぶないな

サツカーをまじめにやっつけをした
小三裕次郎
小五由博

光子

素子

義一

和子

美津子

美南子

昭子

トミ子

白水

シメ子

文子

寿美

ヒデ子

聖子

かつ子

智重子

世似

民子

清泉

さようなら三日間のお正月
考えてもジグソーパズルむつかしい
初もてで五四分の願いごと

せつかくのタコ上げ大会雨になり
雪のない正月だとはつまらない
情無いお正月からもう部活

年賀状はじめてわかるフルネーム
共通一次間近二階の灯が消えぬ
ジギル氏とバイドのわたしかも知れぬ

だがまてよ固い拳をひらかねば
ご飯ですよへ近頃耳が遠くなる
鈴の音美し今日は寒の入り

恋心未だに賀状よう出さぬ
一人もの一人住まいの友を訪う
行き先のない女にも夜は来る

挫折するたび柳誌は気付け葉なり
一里塚知らないふりをして行こう
平凡に生きて傘寿の春迎う

妻の旅男料理もおまつなもの
明治ですアルファベットなら読める
初春や女ばかりのかくし芸

雲飛んで飛んで大根よく乾く
勿体ないむなし過ぎす今日も暮れ
いさぎよい椿の私語を聞きもらす

今日もまた堪忍袋を縫っている
みんな主婦残った寿司は折に詰め
さて何を描く年頭の白い画布

八転九起俺こそ本当に洩い奴
正月の朝寝が続く七草よ
病んで知るお相手欲しい日が続く

弁解はやめとこ影が嫌うから
小四聡子
小四晴美
小四品美
中一純平
小四視幸
中二亜貴子
高三紀

静佳

愛子

ふさ枝

静風

清水

光子

千恵

栄恵

子

美

美

平

幸

幸

幸

幸

幸

幸

幸

幸

幸

幸

幸

幸

幸

幸

幸

人の計や本屋に本のない日なり
計報きくびり止まった風の音
趣味し続けと竜にたのみしこの体

振り出しへ戻る双六なぞ要らぬ
毒舌はよしましよ女なんだもの
シクラメンやつぱり君は過保護だぞ

駄馬なりにシルクロードの夢をみる
我慢した分だけ付けが来た歯医者
ちちははの遺影がいいつも笑んでいる

息災へ七草がゆを二日程
目が覚めてみれば小さな道が見え
手紙書いてますせれナード聴きながら

喉元を過ぎて懲りずに株を買う
吹きだまり肌よせ合つて血のぬくみ
京都塔の会

裸木と星の対話を夜のしじま
七十年付き合つてくれたお月様
塔の影声なくひそむ堀の冬

恵まぬ女に小さい泣き黒子
筋を通して大同小異とは言わせない
雑巾がきれいに干してある眩暈

揺れるからバランスとれる綱渡り
弾まなくなった手毬と通じ合う
老母が居るから明日のおかず考える

かぐや姫の映画にまきれ込みにゆく
風に背を叩かれ本音吐かされる
本物の笑顔で長い借り還す

片方の耳だけつけたイヤリング
いちいち日を自分の心に問うてみる
五十からの予定は自分でたてたいね

手を洗う二度と恋などせぬ予定
同芳子

花代子

年代子

武庫坊

はつ絵

英王子

水客

葉子

不朽

房子

ヤスエ

節夫

貞子

静火

政己

博子

比呂子

太虚

一路

淑子

新造

シゲヨ

達子

ただし

英子

笑女

求芽

予定表にあなたは入れてありません
明日帰る予定へ米をといでいる
もてなしの床にビシツと池の坊
年始客もてなす酒の熱い燗
素朴さと蕎麦が気に入るおもてなし
御馳走はいろりの火でさす北の国
乙姫のもてなし太郎は家忘れ
ライバルにもてなされてる左遷の日
もてなしの鍋に居座る寒の冷え
もてなしが悪くてチツプ出し惜しみ
文鎮も龍筆置も龍さあ書き初めだ
画に書こう竜の落し子みて帰り
連風の龍は尻尾が天を突く
トラキチに似せてことしの竜を描く
フレームの鉢の底から龍が浮く
昇龍にあやかる計を立ててみる
遠来の客をもてなすばたん鍋

川柳藤井寺 赤木 和子報
売れ残りばかり集めた福袋
ダイエツトまだ懲りませんやせません
空つ風耐えて春待つ梅の花
春風に一枚ずつ脱ぐ身の軽さ
今は亡き師の面影のだぶる席
福寿草しずかに春を待つところ
走ってる夢さめないで車椅子
新年の森に聴かせる理想論
福の神うちは寝に来るだけでよい
幸せが詰ついていそうな新暦
もう一度振り向く未練かも知れぬ
八十歳まだまだ何かの役に立つ
もう懲りた懲りたお酒が止められず

松芳子 白李 三求 飛鳥 孝江 慶治 栄 紅陽 志子 杜的 陽露子 紫香 和友 白溪子 風云児 女 志洋 三郎 ときお きよし スミ つかよ 治子 喜道 美房 昭子 美代子 吸江 比呂志

初詣一年分の手を合わせ
練習の車をどぶが待っていた
破られる日を待っている新記録
死ぬまでは懲りないだらう嘘を持つ
ボーナスが過ぎて銀行無愛想
口ほどに懲りてはいない夫婦です
初場所の茶屋の土産はチャンコ鍋
新品の靴に噛まれる旅疲れ
晴読雨読独り者の特権だ
寒鴉私の孤影かすめゆく
この恋のロマンスはヒアスに秘めとこう
三日日だけは計画通りゆく
新しい足袋をかばって初詣で
久々の和服で女をとり戻し
懲りもせず地震の島に帰り住む
賽銭に外貨もまじる初詣で
山鳩の来る頃七草の粥うすめ
書初めは死亡届か帰省事故
除夜の鐘終わるを待たず雑煮炊く
向い風女の意地を通します
欲呆けの友に又会う戎さん
裏門を叩いて貰う福
空席の面影偲ぶ雑煮箸
東風吹けと天神様はお待ちかね
福多い年であれよと四方拝
戎さん非課税の福廻してね
浄土から今も叱咤の声がする
人間に懲りて草花を愛す

佐川川柳 赤川 菊野報
定退になって自由をもてあまし
自由詩の中で自画像描き出す

繁男 作秀 本蔭棒 与呂志 伴子 婦美枝 枯二 敦子 和美 雅美 彩 みのる 末一 正枝 かな女 うめ 秋園 風来坊 初枝 美佐 清心 幾 つかよ ふゆ 政代 和子 穂夫 天花

開店が近い花輪と待つお客
首都圏の夢に近づく瀬戸の橋
母となる日の近くなる髪洗う
孫が来てはあちゃん自由うばわれる
もつ少し飲んだら好きと言えるかも
妻らしく嫁らしくなり娘の帰省
さりげなく生きている父の水面下
近道の思わぬとこに落し穴

聴障川柳 稲田 豊作報
あかね雲今日のフイナール飾るかに
爺ちゃんの今日の雲行きどうかいな
難題の際限もなく重い雲
村爭議雲行きを待つ煙草の輪
雲連し野仏赤い花という
合格をしたよ故郷へ走れ雲
雲の神秘日の出に被せる真赤な服
行く雲に古里想う街の暮れ
足奏えの私乗せてよ流れ雲
再会を約したままに雲流れ
千切れ雲見上げる空を散歩かな
年明けて雲を呼ぶよな竜の年
草原で雲の字ひねもす流れ雲

富柳会 池 森子報
空席の椅子が決まらぬ会議室
初会議肘掛け椅子の心地良さ
定年後夫の会議は町内会
隠すのが下手で喜劇の好きな父
怪男もあつてからんの新人類
あなたなら隠した話ついで喋り
隠す気になかった筈が出しそびれ
隠す過去知っているヤツ裏に居る

和興 朱坊 節子 恒風 佳鳥 千鳥 和広 菊野 豊作 一行 一眺 承平 三香 八恵子 みる 柳香 文古 和江 健女 真郎 進一 山久 義雄 市雄 曲手 花子 シズエ 伊庭勇 昭水

井戸端会議ストレスをも洗ひ
怪童の影におびえる天の邪鬼
怪童も家に帰れば甘えんば
隠し味亡母よ亡母よと句の味
怪童の胸に添い寝をしてる母

川柳塔まつえ

恒松

翔びそこねて女漫画の貌になる
岐れ道漫画の本がおいてある
陣取りに負けた男の漫画描く
ばつさり漫画で世相切り捨てる
漫画ほど上手に姿身出来ないか
B面の私の顔が漫画めく
知床を守る俊二の漫画買つ
ストレスを漫画で解消親も子も
テレビ漫画親子の対話するところ
真剣な顔で見ているエロ漫画
四コマの漫画が朝の笑みをくれ
知ったふりする雑学へ恥をかき
雑学が救い社交の糧となり
三流を出て雑学で博士号
結局は雑学やつと卒業し
雑学に秀でた人も呆けに負け
タレントの雑学水着よく似合い
好奇心強く雑学こなしてる
中卒の子が雑学で世を渡る
雑学が飾られている応接間
雑学のネタ図書館へ借りにゆく
雑学が待合室を沸かせてる
平凡を愛して鬼を手なずける
鬼だとして情けにもろい鬼もいる
やわらかい言葉で鬼が舌を抜く

田中勇 莊次 文火 岳人 森子 叮紅報 蒼流 昭二 由郎 桂子 妻子 清志 みつこ 山久 ノブ 満江 芳江 笑円 まさし 一進 友子 小生 愚童 君江 正朗 代仕男 鳳人 貢範 翠星 房子

鬼瓦ビルの威圧に負ける夢よ
撒く豆に恐れてくれる鬼がよし
気の弱い鬼もいるだろ鬼が島
ストレスのたまつた中に鬼がいる
世をなげき駈け込み寺へ来てた鬼
一生涯笑つたことのない鬼瓦
鬼は外寒い夜道をどこへ行く
鬼の目の涙が濁くと狂いそう
絶好のチャンスに舌が廻らない
プロポーズチャンスを掴む矢を探す
このチャンス逃がすならぬ意地張り
このチャンス逃がすならぬ雨の帰り道
三つ揃いチャンス待つて見合写真
誘われて旅のチャンスと思いつく
人生の綱引一瞬にあるチャンス
人を見る眼鏡は軽い方がいい
改札を小走りに出たサングラス
果てなく眼鏡は明日の夢を追う
そして今父の眼鏡を借りて読む
姑の眼鏡は落ち度ばかり見え
眼鏡の向こうで故郷の父が笑っている
頑固さがだんだん目立つ老眼鏡
川柳わかやま 西山 幸報 緑良 紀久子 輝虎 狂虎 豊太 美智子 太茂津 雀踊子

静雄 静翁 静美子 静恵 雄々 かつみ みえ きみえ 登美也 多賀子 風子 幸子 日出子 静江 長三 弘三 巡歩 瑞枝 荒介 与根一 鶴丸 叮紅 幸報 緑良 紀久子 輝虎 狂虎 豊太 美智子 太茂津 雀踊子

感動の二コマ遅れて湧く拍手
風邪引かぬ様にと結ぶ母の文
いつまでも逃げてはならぬ石を積む
立春へ青い言葉信じてよう
春誘う言葉になって女の目
此処一息立春を言いつてはる
立春へ何か答を出さなけりや
先頭がゲートを抜けて来た拍手
焦つては四面楚歌から逃げだせぬ
逃げ道にきつと踏絵が伏せてある
暖冬の隙間すきまで風邪をひく
逃げてても逃げてても仏の手の中で
逃遁行つづく枯野の冬帽子
利巧者上手に風邪を使い分け
立春へマネキン見事変身し
風邪三日甘えん坊のくせとれず
逃げられぬ女の道を練つてゆく
逃げて来て袋小路に突き当たる
逃げて来た小鳥がひよいと掌にとまる
頼らないから逃げられたとは思わない
幸せに酔うて弾んで逃げた毯
逃げ出そう逃げ出そうと腕く血の絆
待つてくれ逃げたがってる福の神
逃げはせぬ男に風は常に吹く
花の芯ゆれて春立つ恋こころ
逃げ道がないので正面向き直り
逃げ水へ夢を求めて野の果へ
足音がコトコトと鳴る立春の駅
立春へ袋の種が目覚め出し
立春へ追い込みかける受験の子
立春はこの豆囃めばすぐに来る

正博 女 三枝子 登志代 石子 凡九郎 久子 紫香 武雄 三男 英子 千寿子 信秋 裕美 稚代 繁子 三千代 結実 克雄 忠 政一 恭子 紀美女 瑞穂 桂香 信子 愛子 守

漕ぎ続けねば灯台の灯が逃げてゆく

南海川柳部

広井季柳子報

幸福をにがさぬ妻がいてくれる

母と娘が歩けば遠くなる招き

招福の笹高々と縁のない話

金屏風晴れて背にした高島田

金箔が剥けていたとて仏さま

仏壇の金鵝勲章孫に見せ

金権へ怒りのペンが突き刺さり

初年兵の友情続く年賀状

一枚の年賀でつないでいるきずな

二重橋年賀の波にある平和

年賀にはお元氣そうな筆のあと

年賀状一句を添えたあたたかさ

新春に惚ふ人あり書く賀状

年賀状あの達筆がもうこない

單身赴任父も帰って来て年賀

お年賀の客へ済まない犬が吠え

中大阪川柳会

中川

意気込んで吐いた言葉は飲みこめぬ

意気込みに勝利の女神迷い出す

浜市の意気込が魚がピンと跳ね

初せりの意気込み街が動き出す

意気軒昂傘寿の父の寒稽古

心意気だけは相手を吞んでいる

男対女で見せるこころ意気

意気壮々春の笑顔も炎えている

協力はしてまず口も出してまず

穂やかな目は根回しが効いている

師と弟子が火花を散らす向う槌

幸

山久

悦郎

真砂

一進

重之

曲ん手

季柳子

千万子

志華子

凡子

勝美

柳影

圭水

覚然坊

東雲

庸佑

重人

滋雀報

千里

庸佑

慶三

トミ子

寿美

晴風

曲ん手

喜風

重人

白兎

善信

協力の出来ぬ話を飯時に

いちばん協力してくれたのは落し蓋

盗み聞きしたと協力せまられる

氣持だけそって入れたまず社会なべ

協力が有って成りたつ命づな

茶碗割って陶工深く腕を組む

裕福になると失敗恐くなる

失敗を許すかたちにめしを盛り

失敗して元の裸になっただけ

失敗を思うと重い裁ち鋏

失敗の毬はころころ雪だるま

失敗談笑い飛ばせる今だから

人間を創って神は悔いている

失敗を重ねて強くなる絆

神かけて誓う男に氣をつける

ライバルの誓い素直に信じよう

いくつもの橋を渡ってきた誓い

おいしそうな話で誓い忘れそう

新婚の誓い時々責めて来る

誓いの言葉忘れてないがもう別れ

荷の重い話電話が遠くなり

父と重い父の荷物の重さ知る

生きて行く事を荷物にしないように

荷になった子の荷になってわが世春

倉吉川柳会

渡辺

今朝の雪今日のシナリオ書き直す

一枚のバスポートから出る手品

一枚になつて論吉は出たがらぬ

浮草も逆巻く刻を待っている

一が出てやつとサイコロ上りです

肉づきのいい方選ぶ癖がある

山久

智子

頂留子

三重子

シマ子

作二郎

度

冬葉

文秋

久子

章久

新造

公一

柳伸

外吉

柳宏子

藤子

恒明

雅風

綾珠

滋雀

信治

凡九郎

しんじ

吾吉報

松女

あや子

康志

よしえ

碧水

とみお

一匹の猫が我が家を司どる

うきうきと訪ねて犬に吠えられる

一二三四、二三三四押ひする

秘話一つ残し朝から鶏鳴く

音のする方へ方へと鴉鳥が寄る

浮き草の花にとも温い春の風

お陽さまに背中を向けて朝の酒

死ぬ時は四月レンゲの頃を選ぶ

旅の朝仏にしばし留守を託び

午前四時魚市場にある活氣

神さまの役得賽銭を選ぶ

いろいろな鬼を選んで豆をまく

音のない世界に手話が花咲かす

ことごと大根が浮く亡母が浮く

玉子の山から玉子をつつ選ぶ

あすの朝逢おうと言ったまま消えた

酸欠で金魚も俺も浮きそう

一年が一日多い時惜しむ

一円が二重貼薄の謎を解く

帖尻を一生懸命合わせましよう

赤い毬一つはずんて春の音

飼主をえたらんが猫も家出する

浮き雲になる頃年金手帖来る

一例として私も生きている

なんにもかんがえずに雲浮いてるのかな

豊中もくせい川柳会

田中

両目より大きい窓を胸に持ち

窓の猫己が姿を不思議がり

梅の香がほしくて窓をあけておく

朝の水ふくめば今日の匂いする

眠っても眠らなくても朝になる

日枝子

柳風

はるお

雄々

かつみ

幸苑

完司

荒介

民子

満春

みなと

御前

秋人

瑞枝

観洋

千秋

螢

やえ

石花菜

ゆり子

千代

独歩

次男

苦句

正坊報

薫風

登代子

とく子

メ女

きく子

朝の蜘蛛今日の入試に自信わく
茶柱が朝の動きを軽くする

戦国史一朝で血の敵味方

売られぬ牛の視線が刺さる朝

団体のだるま不徳の身を恥じる

団体は何所かで恥をかいて来る

歩くのはとほとほだけど口達者

チャップリンの靴とはとほとほの街

結論を出してとととほまわり道

とととほは行けば行商老婆に追い越される

車椅子連れたつともとととととと

サントイッチマンとはとととととと

記念日に夫のくれたガラス玉

火を噴いて大地は呼吸整える

煮こりへ母は達者でいるそう

ひたすらに走った靴を今朝も履く

宅地造成ダンブの音が耳につく

紙袋に詰め込みすぎた春の旅

禁煙は鳴りもの入りで飴をなめ

ありがとうだけは孫にも教えとく

明治の祖母でコヒーも大好きで

西空に帰る遅れた月がある

一升が十二本になる徳利

あわてたよ孫とはぐれた梅花祭

むらくも句会

藤井

明朗報

初雪の茶筌に和むほど積り

子の背幅積る苦勞がけていく

老妻の出る幕のなけ太っ腹

言う者は言わぬおけと太っ腹

山と積む収穫ぬくい畑を囲む

富子

風云児

洋子

佳秋

曲ん手

明光

英子

眉水

史子

作二郎

つえ子

白漢子

よし子

隆

しげお

慶子

市雄

和友

典子

花村

杜的

房一

福史

博史

正朗

芳子

鶏生

秀子

文子

みどり

こんな時太っ腹見せる父が好き
中傷にこたわり持たぬ太っ腹

暖冬も二月峠で風吹く

消せぬままだ積る思い出母の胸

色気などさらつと忘れ喜寿の坂

受けて立つ度量頼もしく太っ腹

暖冬の居場所困るラッセル車

ごみ積るように札束つまれたら

暖冬へ腰の痛みが遠慮する

和やかな笑いに福もつりこまれ

積る愚痴電話でばいと捨てておく

太っ腹人に好かれて福を呼ぶ

新しい橋が桜に彩を添え

さりげなく揃いのマフラーして歩き

水郷にかかる橋から見る夕陽

盆栽が根を盛りあげるぬくい冬

瀬戸の海つなぐ大橋新幹線

新婚のお揃いの服甘さだし

条件が揃い縁談まためられ

就職へ新車も来ます初出勤

農を捨て都会へ就職若い夢

暖冬へ着ぶくれ一枚二枚脱ぎ

就職がわが人生を左右する

暖冬へよもぎつくしが目をさます

暖冬へ風邪もひかずに傘寿かな

就職を笑顔で送る花の駅

世の進歩迫いすがやくい老いの坂

就職をさせてようやくい親離れ

親ひとり子ひとり就職祝う膳

就職が決り夕餉の灯が明かい

暖冬へキャンセルに泣くスキー宿

一葉

福子

ヤス子

はる代

林蔵

武衛

義良

千里

竹乃

吉野

君子

久仁

保子

八重子

ふさえ

さくら

寿

節江

昭子

よし美

梅園

三津江

幸子

雪路

峰雪

緑水

蚊声

昌子

ゆき子

ふみ女

暖冬へ準備せかれる農作業
積る雪ながめて暮らす老いの坂

暖冬へ野草息吹く山畑

父さんの何んでも呑みこむ太っ腹

暖冬へ畠の用事待っている

就職へうれしくわびし子を送る

川柳はびきの

増やすより始末している老いの知恵

初会に茶柱だった良い笑い

妻の眼が言い訳と見る空元氣

寒行の声の震えが伝わる

かたつむり相続税が重すぎる

マラソンの青春ドラマ胸をつく

よく笑う娘にもある泣きはくろ

無駄使い承知バチンコ宝くじ

夕焼けの空を信じた遠回り

舞う鶴の白き冬陽の暖かさ

雑煮餅馴れぬ入歯が手古摺らし

汚職沙汰とかげの尻尾にならぬよう

オリオンを孫に教える冬の天

ちくはくな歩幅が合った夫婦坂

冬帽子の愛待ちわびる孤児の夢

小雪ちらほら妻へ湯豆腐電話する

頭から足の裏まで検査つけ

葬儀屋の近くに住んで不感症

一枚の賀状が増える孫の筆

ビジネスと割り切る友が羨まし

冬ごもり女無精になつて来る

ロボットが深夜の工場支配する

藤子

明義

マサノ

延子

つね女

明朗

隆二報

敦子

葉子

吐来

美代子

キミ子

志洋

蛙声

与呂志

美子

昇

みつる

健三

敏

優

忠宏

隆

一枝

弘子

白水

末一

たけし

比沙胡

美津子

定年を銀盃でくむ老夫婦

木枯しに押されて背が丸くなる

身から出た錆木枯し身にしてみる

あたたかな寒中見舞ペン迷う

新春の心が踊るシクラメン

大阪で肩を寄せ合う老姉妹

詣らねば損した気持ち恵比寿さん

正直な言葉せめても忘れまい

盃を伏せて初出の靴磨く

世の中で義理ほど重いものはない

幸せと思つひとりの湯につかる

箸紙へ名を書き初めのお正月

念入りに化粧したのに待ちぼうけ

正月二日ラーメン欲しい子供達

一蓮托生祈りが深くふかくなる

定年をひかえ上司の丸い肩

定年に妻の日課が見直され

定年の余裕まだまだ働ける

恥かしい話意外に喜ばれ

サザンカの寒さ引き裂く心意気

尼主宰教委表彰祝いずも川柳会

切替えて姑は歩幅を子に合せ

今年こそ切替えてよと妻の愚痴

切替える第二のプランだけは持ち

切替えて耐える未練は背に疼く

切替えて出来る寡黙の老二人

切替えて欲しい名義の父が持ち

切替えてに敏い男でそつがない

やっとながりました雑巾がけの身に

趣味同じ花芽へ夫婦の円い愛

ケイ子

絢子

隆二

満洲子

清子

シメ子

淑子

シマ子

トミ子

三世

悦子

昭子

伴子

寿美

ダン吉

希代司

胡村

三千代

石橋義一

川柳会

吉岡きみえ報

まこと

勝平

軒太楼

みよ女

多賀子

峰雪

代仕男

多津老

三代

今耐えてこそ芽も出よう男意地

ねんねこで子に愛の芽を育てたい

嫌われて花芽に巣食う虫になる

芽ぶく頃やつとふところ手が抜ける

雑草の芽は踏まれてはね返す

カラオケのメロディー客の和をつくる

カラオケの美声ときめく胸おさえる

カラオケに花嫁の父詰る歌

カラオケにどこで覚えた北酒場

カラオケで意外な人の歌に酔い

カラオケは淋しがりやの吹き溜り

カラオケに軍歌わびし月明り

カラオケに自信過剰もいるマイク

カラオケで歌うあの娘も酔っていた

カラオケよ今日のストレス吸ってくれ

カラオケがとりもつ縁の夫婦です

カラオケもやがて軍歌で締括る

カラオケにチャールストンで浮かれ出る

カラオケに乗らぬが父の祝いの歌

カラオケが海の男のがたわぬ老いの歌

失恋の日から日記は白いまま

万に備え日記にNとK

失業へトンネルマンの書く日記

関病記繰れば子のこと妻のこと

日記には雪の降らない冬を書く

日記帳過去をべらべら嘆り出し

日記書く手を重くする悔い一つ

蔵の中祖父の日記が怒り出す

絵日記に孫が書いてる父の癖

勝った日の日記一頁でたらず

智恵子

幸栄

草丘

きみえ

明朗

芳郎

雅水

良子

萬吉

房緒

芙佐子

房子

智子

昭二

紋次郎

水煙

青湖

桃子

由紀子

正朗

夢酔

治

重昭

弁治郎

雨学

鶴丸

牧童

六之介

江雲

功

身障の子に満願のない日記

本音吐く日記を持たぬ嫁となる

生きてこそこんな温い風に遇う

温もりのないワープロで来た賀状

行間に温もりの母のやせた文字

温かい部屋に富山の置き薬

胸襟を開いて温い手にすがり

温情の里は実りの花盛り

温かい風呂で猿がお気に召し

恥と罪重ねて温い風探す

温い手の届くところで暮らす幸

温もりを故郷の方言から貰う

見えぬ目に支えをくれる手の温み

温暖なハウスが騙す冬いちご

呼び捨ての人が居るから温い部屋

手袋に母の温さが編んである

懐の温いものほど出ししふり

ぬくもりを肌で感じた募金箱

土いじり春の温みを手にうける

温情の日々へ悔悟の膝を折り

温い心いつも見せてる地藏さん

ふるさとの訛りがぬくもりに

赤ん坊抱けばあったかほは寄せる

素っ気ない老父だが温い味がある

口惜しさの涙は母の背で温い

懐が温いと笑顔こぼれ落ち

千羽鶴温い祈りを折りこめる

ぬくぬくと育ち世間の風に負け

子宝の温みに和むおひなさま

温もりが欲しい人形の細い眉

緑之助

芳一

幸水

桜江

満草

千裕

久代

芳枝

九歩

春雄

為一郎

ちかし

秀子

芳正

ゆう子

寿美

早苗

翠星

律子

桂子

和子

叮紅

勝子

文子

美磯

4 月 各 地 句 会 案 内

	日 / 時 及 び 題	会 場 と 投 句 先
尼 崎 いくしま	1 日(金) 午後1時半より 飾る・先生・自由吟	サンシビック尼崎 阪神電車尼崎下車南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水11番1号 田淵定人 句会費 300円 投句料 60円切手 3枚
堺川柳会	3 日(日) 午後1時より 平日・へま・弁当・部屋	堺総合福祉会館 南海高野線堺東駅下車堺市役所西入ル 〒593 堺市堀上緑町2-9-2 河内天笑
川 柳 塔 ま つ え	9 日(土) 午後1時半より 堅物・表情・影	慈雲寺 松江市和多見町 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅 句会費 300円 投句料 300円(60円切手可)
川 柳 わかやま	10日(日) 午後1時より 映画・浮く・巢	和歌山県民文化会館 4F 〒640 和歌山市駕町15 野村太茂津 句会費 300円 投句料 60円切手 3枚
八尾市民 川 柳 会	10日(日) 夕6時より 鶏・グルメ・人形・斬る	八尾市立労働会館(山本) 近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市弓削町南2-141 飯田悦郎
西宮北口	11日(月) 午後1時より ふくらむ・道・自由吟	西宮市中央公民館 阪急神戸線西宮北口駅南出口歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代 句会費 300円 投句料 60円切手 4枚
川 柳 ねやがわ	17日(日) 正午より 運転・辞令・仲間・自由吟	寝屋川市立総合センター 4階 寝屋川市駅下車京阪バス総合センター前下車 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 句会費 500円 投句料 60円切手 3枚
もくせい 川 柳 会	18日(月) 午後1時より 虫・教える・切手・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急宝塚線曾根下車東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
南 大 阪 川 柳 会	19日(火) 夕6時より 夫婦・無造作・夕暮れ・類	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋 句会費 500円 投句料 180円(郵券可)
高槻川柳 サークル 卯 の 花	21日(木) 午後1時より 河童・靴下・転ぶ・自由吟	高槻市市民会館302号室 阪急電車高槻下車歩5分 〒569 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児 句会費 500円 投句料 200円(60円切手3枚と20円切手1枚) 各題2句
南海電鉄 川 柳 部	21日(木) 夕6時より フルムーン・庭・人気	南海会館ビル内南海電鉄本社地下食堂 南海・近鉄・地下鉄各難波駅下車高島屋東南角 〒542 大阪市南区難波5丁目1番60号 南海電気鉄道(株) (川柳部) 不動産管理部管理課 廣井孝雄 句会費 無料 投句料 60円切手 1枚
富 柳 会	21日(木) 午後1時より 私財・辞書・自慢	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴353 池 森子
川 柳 東 大 阪	23日(土) 夕6時より 弾む・キャリア・名前・花	東大阪市社会教育センター2階 近鉄布施駅北へ5分長堂小学校隣 〒577 東大阪市菱屋西5-6-23 桑原喜風 句会費 500円 投句料 60円切手 3枚
駒つなぎ 川 柳 会	25日(月) 夕6時より わびしい・したたか・ めくもり・いたずら	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南口下車 南へ1丁3筋目左へ駅より歩3分 〒545 大阪市阿倍野区天王寺町北1-3-11 津守柳伸

★特に記載なき場合 句会費 500円、投句料 300円(郵券可)、各題3句以内

原稿送り先 (〆切・毎月20日 予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です)

〒597 貝塚市地藏堂53番地の5-1-401号 宮園射月芳

●募 集●

★川柳塔欄の投句は本社同人に限りです。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

六月号発表 (4月15日締切)

課題吟 (5句)	「好き」	田形美緒選
「駅」	脇田米朝選	
「雲」	森田熊生選	

川柳塔 (10句)	西尾 栞選
水煙抄 (10句)	黒川 紫香選
愛染帖 (3句)	橘高 薫風選
茴香の花 (3句・女性)	八木千代選

七月号発表 (5月15日締切)

課題吟 (5句)	「艶」	松本ただし選
「祭」	江原とみお選	
「写真」	時末一灯選	

川柳塔 (10句)	西尾 栞選
水煙抄 (10句)	黒川 紫香選
愛染帖 (3句)	橘高 薫風選
茴香の花 (3句・女性)	八木千代選

★愛染帖・茴香の花・課題吟は同人・誌友を限らず。

4月の常任理事会は1日(金)

定価 五百円 (送料50円)
 半年分 三千二百円 (送料共)
 一年分 六千三百円 (送料共)
 昭和六十三年三月二十五日印刷
 昭和六十三年四月一日発行
 編集兼 西尾 厳
 印刷所 藤原童心社
 〒545 大阪市阿倍野区三好町二一〇一六
 ウエムラ第2ビル202号室
 発行所 川柳塔社
 電話 (区六九) 一六九一四番
 振替口座大阪 813336八番

本社4月句会

日時 四月七日(木) 午後六時
 会場 メンズファッションセンター7階
 東区内本町一丁目 電話 06・941・1918
 地下鉄谷町4丁目下車(2番出口)交差点西南角

兼題 「油断」 西田 柳宏子
 「互角」 林 はつ絵選
 「群れ」 藤井 二三選
 「抱く」 神谷 凡九郎選
 橘高 薫風選

席題 二題 当日発表 各題三句以内厳守

会費 五百円

★投句は柳箋(4cm×19cm)に一葉一句。
 各葉毎に裏面に必ず氏名明記。
 投句料 300円(60円切手5枚)同封のこと。

川 柳 塔 社

5月の兼題 「紐」 「煙」
 「添う」 「重い」

5月の本社句会は7日(土)

『夜市川柳』募集

第11回 「湯」 西出 楓楽選
 3句・締切 4月末日
 第12回 「男と女」 河内 天笑選
 締切 5月末日
 投句先 〒593 堺市堀上緑町二一九一二
 河内 天笑方
 堺川 柳会

編集後記

☆西尾葉主幹の傘寿のお祝いの会が、三月六日堺福祉会館で開かれた。三月六日は、私の子供の頃は地久節と言った。皇后さんのお生まれになった日をそう言ったのである。主幹はあるとき、「僕の誕生日を町内が旗立てで祝うてくれましたのや」と言われた。

☆主幹思いの板尾居人君が主幹のおめでたい日に内輪で乾杯しませんでしたと呼びかけたので、それならちよと堺の句会が当日にあるので、お迎えしようやないかと長男役の私が提案した。内輪のつもりが、主幹の人徳で、瞬く間に話が広がりました。米子から八木千代・沢田千春・政岡口枝子さんらの顔も見え、和やかで賑やかなすばらしい会になった。

☆葉主幹のお喜びようから親孝行の真似ごとが出来たような気がした。

☆今回は小句会に便乗したもので終ったが、本社主催の盛大な祝賀会をする機会

もあろうかと思うので、その時はご支援を頂きたい。

☆その句会場のエレベーターに偶然主幹と乗り合わせたのは、岩佐初枝さんで、会の進行につれて、葉主幹と同年齢であること、しかも誕生日まで同じだと分かってきた。八十の手習いの堺川柳会の一老会員の感激は大きかった。主幹もそれを知って深い感慨にひたられたのである。

☆翌日、堺句会を主宰する河内天笑君と、遠来の女性を案内して、故八木摩太郎氏の句碑へ案内し、附近の公園を散策した。摩太郎氏は「ふるさとは大仙陵のあるところ」と、仁徳陵、百舌鳥耳原中陵を詠まれた。郷土愛の現れた句である。

☆師弟愛も、郷土愛も「川柳は人間陶冶の詩」と喝破された路郎先生の精神にはかならない。葉主幹のゆとりを見習いたいと思う。

☆第一回愛染帖賞の受賞者木山遠二氏が三月五日死去された。心からご冥福をお祈りする。

☆桜前線北上中、わが桜塚近辺の桜もまことに美しい。

（薫）

▼「涙の真砂は尽きるとも世に盗人の種は尽きまじ」の名古詞は、歌舞伎の中だけのことではない。新聞の社会面を賑わすのは何も盗人に限ったことでなく、悪人を働かした人の何と多いことか。「税のことはよくわからなかった」と、元大蔵次官だった人の脱税行為（申告漏れとはまだ格好をつけるのか）や、砂利船汚職で参議院議員を辞職した、神格に近い人のやっていることを見ていると、選んだ者の馬鹿さ加減を見せられているようだ。

▼月末になると本誌の発送があり、毎年きまった人が手伝いに来て下さる。遠近に聞けず日当は勿論のなと交通費も差し上げている。完全に奉仕である。金の要ることが出来るという目的の色が変わる会計室長に遠慮して、ご協力下さっていることと思う。今の政治家諸君のように「パーティ商

法」でもやって金集めをするれば別だが、彼等のように金が目的でない。好きな川柳のために犠牲を払って下さるだけにほんとうに有難い。発送には人手だけでなく、郵便局へ運び込む車が必要なのである。

▼月末に参議員補欠選挙があり、発送がその前々日であり、当てにしていた塩崎敏さんが選挙運動のために来られず、急速、河内天笑さんの車で無事に済ますことができた。辞職は勝手だが川柳を楽しんでいる者に迷惑をかけないで欲しい。

（き）

☆近頃の私には珍しく早いスピードで一冊の本を読みあげた。それは新潮文庫のカララ版作曲家の生涯「プラムス」である。購入して随分長い間、棚ざらしに散置していたのだが某日、本棚の整理のついでにバラ頁を繰っていると年譜のところに、一八九七年四月三日の朝、息を引きとる、と記してある。

☆三明町の川柳塔本社事務所の向い側に「つくし」という大衆食堂があって、毎月常任理事会のあと有志で一杯やりに行く。そのママさんの生年月日が、たしか四月三日であった。昔の神武天皇祭の日である。しっかりと憶えて。かくの如き連想が、この本を読むきっかけになるのだから、書き世の因縁まことに妙と言うべきだ。

☆プラムスは、かのシューマン夫人クララをはじめとして多くの魅力あふれる女性たちを愛した。にも拘らず六十四才の死に至るまで遂に結婚することがなかった。極端に引込み思案で、自分の殻に閉じこもりがちな性格だったという。また、あれほどの地位、名声を得ながら生涯、自分の家を持たなかった。

☆プラムスの音楽は、それほど好きというわけではなかったのだけれど、改めて親近感を覚え、早速サイフをはいてCDを買った。単純だナァー。（史）

NEW FORMAL COLLECTION



泣いて笑って……
夜を通り過ぎたら
また陽がのぼっていた
男のロマンと
フオーマルと

OSK JEFF
ORIGINAL DESIGN

株式会社 **大ニエスケ**

〒540 大阪市東区南新町 1-13
☎ 06(941) 8 0 1 5

5つの個性・5つの色味!!

アイスクャンデー

ミルク・アズキ・パイン・チョコ・宇治金時



なんば戎橋本店
なんば南船場百貨店
城北高島屋百貨店
京都高島屋百貨店
阪神百貨店
松坂屋百貨店
利仁百貨店
京都王将店

サンストア中之島店
サンストア淀屋橋店
アベノ新百貨店
上本町近鉄百貨店
東大阪近鉄百貨店
奈良近鉄百貨店
京都近鉄百貨店

なんば新川店
堀のまち店
ドーチ力店
南海難波駅店
国鉄大阪駅店
梅田大丸百貨店
堺東店



大 阪 ・ なん ば



TEL 641-0551